

---

# アナザー：ロミオとシンデレラ

目白皐月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アナザー・ロミオとシンデレラ

### 【Zコード】

Z5419V

### 【作者名】

田白皐月

### 【あらすじ】

拙作『ロミオとシンデレラ』のレン視点バージョンです。他に、ミクなどの視点が入ります。ピアプロに掲載しているものと重複投稿になります。

## 注意書き

IJの作品は、doriko様の「ロミオとシンデレラ」を題材に、黒刃愛様が作成したPVにインスピレーションを受けて、私が書いた小説『ロミオとシンデレラ』の、レン視点バージョンです。レン以外に、ミクなどの視点が入ります。

もともとは頭の中を整理するために書いていたのですが、割とまとまって一つの作品としても読めると判断したため、掲載することにしました。

基本的に話の中身は『ロミオとシンデレラ』と同じです。

こちらを先に読んでも問題はないと思いますが、個人的には『ロミオとシンデレラ』を読んでから、こちらを読んだ方がいいかなとは思います。

## 大丈夫？

その日、俺は前から楽しみにしていた舞台を見るために、劇場に行っていた。ミュージカル、『RENT』の来日公演。映画を見てからというもの、実際の舞台を見てみたくてたまらなかつた。

初めて見た『RENT』は、想像以上に素晴らしかつた。特に「オーバー・ザ・ムーン」の前の曲では、音が空から降つてくるんじやないかと思つた。ラーソンは空から落ちてくる雪を、音で表したかつたんだろう。きっとそつだ。

上演が終了した後も興奮が冷めないので、あれこれ考えつつロビーを歩く。なんでラーソンはあれ一作で死んでしまつたんだ。もつと長生きしてくれていたら、どんな作品が生まれていただろう。ああでも、あのタイミングで亡くなつたから伝説となつた部分も大きいし、伝説になつたからこそこうして俺が見るチャンスもあつたわけで、でも、やっぱりもっとたくさん作品を……。

そんなことを考えていると、肩に誰かがぶつかつた。……人が多い。ちょっと立ち止まって、俺はそんなことを考える。やっぱりそろそろ外に出るか、そう思つた時。

俺の視線のちょっと先で、大きな鞄を持つた男が俺ぐらいの年の女の子を追い越そつとした。はずみで、鞄が女の子の背に勢いよく当たり、女の子はそのまま倒れこんでしまう。俺が声をあげる間もなく、男はさつさと行つてしまい、後には倒れた女の子だけが残されていた。……気づけよ、ぼんくら。

女の子は倒れたまま起き上がれずにする。……倒れるところを見てしまつた以上、放つておくわけにも行かないか。俺は近寄つて、女の子に声をかけた。

「大丈夫？」

女の子が振り向いてこっちを見た。あれ……この子、知つてる。

同じクラスの巡音リンさんだ。こんなところで会うとは思わなかつ

たけど。

「……あれ、巡音さん？ ビーフしたの？」

俺は膝をついて彼女の隣にしゃがんだ。向こうまばびっくした表情でこっちを見ている。

「「めんなさい。誰だつたかしら？」

……えーと。確かにまともに話をしたことはないけど、クラスメイトなんだから、憶えてくれよ。それはちょっとないんじゃないかな？

「同じクラスの鏡音レンだよ」

巡音さんは俺を見て、考え込む表情になった。

「ああ、「めんなさい。制服じゃないこと感じが違うんでわからなかつたの」

そういうもんか？ 俺だつて巡音さんの私服姿見たの初めてだけ、すぐわかつたけどなあ。……そういうことをあれこれ言つても仕方がないか。

「ふーん……で、どうしたの？」

「転んだ拍子に足をくじいたみたい」

「立てそつ？」

「……多分」

巡音さんはそう答えたけれど、表情を見る限りじゃかなり辛そうだ。一人で立つのは無理だろ？ 俺は彼女に手を差し出した。

「俺につかまりなよ」

巡音さんは俺の手を取ろうとして、ためらった。なんで遠慮してるんだろ？

「遠慮しなくていいって。足、相当痛いんでしょ？」

俺がそう言つと、巡音さんはちょっとと考えて、それから俺の手を取つた。俺は巡音さんの片腕をつかみ、自分の肩に回して、それから彼女を引き上げて立たせた。

巡音さんはまだ遠慮しているのか、あまり俺の方に体重をかけようとしてない。別に巡音さん支えたぐらいで、潰れるほどヤフッじゃな

いんだけどな。

「じゃ、俺に体重かけて」

「え……？」

どうも意志の疎通が上手くこなしてない感じがする。そのままところに歩いていかないので、俺は巡音さんを支えながら歩いて、ロビーの椅子のところまで行くと、そこに座らせた。さてと、こういつ時は冷やすといいんだけど……。

「ちょっと待つて」

そう言つと、俺は巡音さんの返事は聞かず歩き出した。ロビーの先に、ジュースとか売ってる売店があつたはずだ。

売店に行くと、俺は「足を痛めた女の子がいるので、氷をわけてもらえませんか?」と頼んでみた。すると、「あら、それは大変ねえ」とこつ言葉と共に、あつさり氷をビニール袋に詰めて渡してくれた。……言つてみるもんだ。

氷の入つたビニール袋を持って、俺は巡音さんのところに戻った。

「ほり、これで足冷やしなよ」

巡音さんはビニール袋を受け取つて、足首に当てた。見るからにほつとした表情になる。俺もちょっと安心した。

「ありがとう。どうしたの、これ?」

「そここの売店でもらつてきた。足痛めて歩けない子がこるつて言つて。……巡音さん、これからどうする?」

さすがに彼女の自宅まで支えていくつてのは無理があるし、俺にはこれ以上の治療とかはしてやれない。休日だから病院とかも閉まつてるだらうし……。そんなことを考えていると、巡音さんがはつとした表情になつた。

「迎えが来る予定になつてるので。だから、それまで行ければいいんだけど」

そういうや、巡音さんの父親つて半端なく大きな会社の社長なんだつけ。学校にも、運転手つきの車かなんかで送り迎えしてもらつてたはずだ。初めて見た時は驚いたもんだ。そんなものが存在してゐ

なんて思わなかつたしな。多分、その車が迎えに来てるんだろう。

「迎え？」 そう言えば、巡音さんのところって確かすこかつたよね」  
巡音さんは困った表情でうつむいてしまつた。……ありや、しまつた。こうすることを指摘してはいけなかつたらし。

「じゃ、そこまで送つてくよ」

「え……いいわよ。鏡音君に悪いわ」

別に遠慮しなくてもいいんだけどなあ。俺が言い出したんだし。  
「けど、その足じや歩くのも辛いんじゃない？ 俺なら平気だから  
気にしなくていいよ」

巡音さんはしばらく悩んでいたが、結局のところの承諾した。

「本当にいいの？」

「くどい。男に『言はない』

俺はもう一度巡音さんを支えて、立ち上がらせた。と、座席の上  
に何かが残つていて。

「巡音さん、プログラム忘れてる」

巡音さんがプログラムを拾う。表紙には『ロリオビジュリエット』  
と書かれている。……シハイクスピアか。

俺は巡音を支えて、出口へ向かつた。劇場の外に出ると、そんな  
に離れていないとこりに、巡音さんが言つていた車が止まつていてる。  
車に近づくと、運転手らしき人が血相を変えて駆け寄つてきた。

「リンお嬢様つ！ どうなさつたんですか！」

「……転んで足を捻つたの。歩くのが辛くて困つていたら、助けて  
くれたのよ」

「そうですか。お嬢様がお世話になりました」

運転手さんが頭を下げる。……えーと、なんか反応に困るな。

「困つた時はお互い様ですから。気にしなくていいですよ」

我ながら言つてることが変だ。とりあえず、巡音さんを車の後部  
座席に乗せる。さてと、これでもう大丈夫だよな。

「それじゃあ、また明日学校で」

そう言って、俺は巡音さんと別れた。

舞台が終わった後、CDショップやら本屋やらに寄つたので、家に帰つた時はちょっと遅くなつていた。

「ただいま」

帰宅すると、姉貴はちょうど台所で夕飯を作つているところだつた。

「あ、レン、お帰り。舞台はどうだつた？」

「言葉にできないぐらいすごかつた。姉貴、晩飯は何？」

「今日は餃子よ。まだちょっと時間かかるから、もう少し待つて」

「じゃ、俺はその間に風呂洗つて沸かしとくよ」

俺の家はいわゆる母子家庭な上に、母親が去年から海外赴任しているので、現在この家で生活しているのは俺と姉貴の二人だけだ。といつても、姉貴は社会人だし、俺も高校生だから、生活にそんなに不都合はない。面倒ではあるけれど。家事も大体折半して二人でやつている。例えば晩飯作りなら、月、水、金が俺。火、木、土が姉貴。日曜は週ごとに交代。食器洗いは作らなかつた方の担当。掃除は各自の部屋以外は、一階が姉貴、二階が俺。洗濯は姉貴、風呂洗うのとゴミを出すのは俺。こんな具合だ。もちろん、個々の都合もあるから、いつもこうつてわけじゃないけど。

風呂を洗つて沸かした後、部屋に戻つて買つてきた雑誌を広げていると、下から姉貴が「ご飯できたわよ」と声をかけてきた。階段を下りて下の部屋へ行く。

一人で晩飯を食べていると、姉貴が、不意にこんなことを言つてきた。

「そう言えば、今日スーパーで珍しい人に会つたわよ

「誰？」

「えつと……ほら……あの子よあの子」

「それじゃわかんないよ」

「名前が出てこないのよ。あんたが前につきあつてた子」

「コイか。……よく憶えてたね」

別れてもう一年以上になるんだよな。それにしても、姉貴はよくコイのことがわかつたな。世の中には服装が変わっただけで、誰だかわからなくなる人もいるの。」

「ああ、そうそう、コイちゃんだった。向こうが声かけてきたのよ。レン君は元気ですかって」

「へえ……」

俺は反応に困つて、適当な返事をする。一年近く前に別れた相手のことなんか、今更持ち出されてもなあ。

「あんた、冷たいわねえ」

姉貴はそう言って顔をしかめた。

「……どういう反応をすりやいいんだよ」

「普通他に向か訊くことあるんじゃない? 元気そつだつた? とか

「……じゃ、元気そつだつた?」

「とつてつけたように訊かれてもねえ……」

おー。俺がむつとすると、姉貴は笑い出した。

「冗談よ冗談。元気そつだつたわ」

「そりゃ良かつたね」

俺がそう言うと、姉貴はちょっとと考え込むような表情になつた。

「……復縁とか期待しないんだ」

「向こうが俺を振つたんだぜ」

コイは中学の時の同級生で、三年の文化祭の時に告白されてつきあうことになつた。確か、ずっと好きだつたとか言られて。けど、あいにくと一人が進学したのは別々の高校だった。それでもしばらくはつきあつていたが、結局、コイは自分の高校で別に好きな人ができるとかで、俺たちは別れることになつた。

「『やつぱりあなたが一番だつたと気づいたの』とか、言つてほしかつたりしないの?」

「何それ」

そう答えると、姉貴はちょっと呆れた表情になつた。

「……そりゃあんた、別れた時もあんまりショックそりじやなかつたわよね」

「別れ話切り出される前から、そういうなんじやないかつて氣はしてた。少し前から、一緒にいてもあんまり楽しそうじやなかつたし」  
氣持ちのくなつたユイを引き止めたいとは思えなかつたし。だから別れ話にもすぐ同意したんだつけ。

「……そういうあつさりした態度、向こうは不満だつたかもよ」

「そう言われても」

「どうしようつていうのさ。

「ま、確かに。こればっかりはどうじよつもないしねえ」

そう言つて、何故か姉貴はため息をついた。……なんだよ。と思つたが、姉貴と喧嘩してもしかたないので、俺はこれ以上あれこれ口を挟むのはやめた。

次の日、俺が登校すると、巡音さんはもう来つていて、自分の席で本を読んでいた。左足には包帯が巻かれている。昨日あんなことがあつたせいか、ちょっと気になるな。俺は彼女に声をかけてみるとこにした。

「おはよう、巡音さん」

巡音さんは顔を上げてこっちを見た。……少し驚いているみたいだ。昨日のことがあるまで、普段ろくに話もしたことがないから、じょうがないかもしれない。

「あ、おはよう、鏡音君」

「足の具合はどう?」

巡音さんは、視線を自分の左足に落とした。

「捻挫で全治一ヶ月つて言われたわ」

「じゃ、当分大変だね」

「骨を折つたわけじやないわ。大丈夫よ」

巡音さんは淡々とそう言つたけど、それでも結構辛いんじやないだろうか。それに色々不便だろうし。

「まあ、そりやそうだけど……」

「昨日はありがとう」

「気にしないでいいよ。ところで、何読んでるの？」

巡音さんは、本の背表紙をこちらに向けた。『椿姫』と書いてある。あ、これ、中学の時に読んだ。……父親の方と間違えて借りるというバカをやらかしたせいで。最後まで読んだけど、正直言うと大して面白くなかった。何故かつまらなければ止めるという選択肢が、当時の俺にはなかつたんだよな。

「『椿姫』か」

「ええ」

女の子はやつぱり『じうのが好きなのかな。昨日見てたのも『ロミオとジュリエット』だつたし。うちの姉貴みたいに、B級映画を笑いながら見るのは珍しい部類に入るんだろう。そんなことを考えていると、後ろから明るい声がかかつた。

「リンちゃん、おはようっ！」

「あ、ミクちゃん」

同じクラスの初音ミクさんだ。確か彼女も大きい会社の社長令嬢だとがで、同じように車で送り迎えしてもらつてる。初音さんの従弟のクオは俺の一年の時からの友達で、色々と話は聞いているが、本人と喋つたことはあんまりない。……そういうや、初音さんと巡音さんつて仲良いんだつけ。ここにいたら邪魔かな。

「じゃ、俺はこれで」

巡音さんにやつひいて、俺は自分の席へと戻つた。

## 大丈夫？（後書き）

色々考えたのですが、結局こちら（レン視点バージョン）も平行して掲載していくことにしました。

作中で言及されているレンの元カノはオリジナルキャラです。もしかしたら同じ名前の亞種とかがいるかもしれません、全く関係ありません（すいません、亞種には詳しくなくて……）ので、ご了承お願いします。

その日の朝、登校したわたしの目に入ったのは、信じられないような光景だった。何かつて？ リンちゃんが、同じクラスの鏡音君と話をしていたのつ！ 「これが驚かずにはいられますか！」

……と言つと、大抵の人は「それのどこが信じられないわけ？」同じクラスなんだから話ぐらいするでしょ？」って思うかもしない。けれど、リンちゃんに関してはそれはありえないのだ。何しろリンちゃんは、がちがちにガードが固い。リンちゃんの育った家庭を考えると仕方がないんだけど、とにかくもう固い。相手が男の子だとそれはもつと顕著で。わたしはリンちゃんと幼稚園の頃からのつきあいだけど、小学校高学年になった頃から、リンちゃんは自分からは、全く男の子と話さなくなってしまった。じゃあ、話しかけられた時はどうかって？ 大抵は口ごもっちゃつてまともに返事ができない。わたしの家には現在、わたしと同い年の従弟のクオ。これはあだ名で、本名はミクオ が同居していて、リンちゃんが遊びに来た時にクオと顔をあわせることがあるんだけど、やっぱり話せずにいる。

わたしがリンちゃんに「おはよ」と声をかけると、鏡音君は自分の席に戻つて行つてしまつた。

「ねえねえリンちゃんつ！ 今話してたの鏡音君でしょ？」

「そうだけど」

リンちゃんはちょっとわたしの勢いに困つてゐるみたい。でもこれだけは譲らないもんね。絶対に鏡音君と話してた経緯を聞きださなくちゃ。

「いつ仲良くなつたの？」

わたしがそう尋ねると、リンちゃんが昨日起きたことを話してくれた。リンちゃんが劇場 リンちゃんの趣味は観劇だ で転んで足をくじいてしまい、困つていろところに鏡音君が通りがかつて

助けてくれたのだそうだ。さつき話していたのも、足のことを心配していくかららしい。

「そんなすごいことがあつたんだ……」

それはさておき、これってなかなかいい状況じゃない？ そういう「困った状況」だつたから、リンちゃんのガードが一時的に外れただわ。思つてもみないチャンスかも。

「別にすごくないわ。ただの捻挫よ」

「怪我の話じゃないんだけどな……というか、鏡音君は意外といい人だったのね」「

鏡音君はクオの友達だけど、クオは家に友達連れてこないからわたしもお父さんもお母さんも、遠慮しないで連れて来いつて言つてるんだけどね わたしは鏡音君のことによく知らないの。

「ミクちゃんは、鏡音君のことよく知ってるの？」

「わたしはそうでもないけど、クオが仲いいのよ。一年の時同じクラスだったし、部活も一緒だから」

クオは、似合わないことに演劇部に入つていて。今年の学祭では、結構目立つ役を舞台で楽しそうにやつていた。……何て役名だったかしら。人間じゃなかつたことは憶えてるんだけど。「人間を滅ぼせ！」って舞台で叫んでたつて。

もつと話していたかつたけれど、始業のベルが鳴つてしまつたので、わたしは席に戻つた。先生が入つてきて、あれこれと話を始める。でも、わたしの頭の中は、思いついた計画のことでいっぱいだった。

リンちゃんのガードが外れるなんて、数年に一度あればいい方だ。しばらくは継続しているだろうし、これはチャンスっ！ この機会に一人をくつつけるのよっ！ それがわたしの使命だわっ！ でも、わたし一人じゃ難しいわね。クオにも手伝つてもらわなくちゃ。

昼休みに、わたしはクオにメールを打つた。相談したいことがあ

るので、学校が終わつたらいつもの喫茶店に来てくれつて。え？家で話せばいいじゃないかつて？ だつて、できるだけ早くこの話したかつたんだもの。家に帰るまでなんて待てないわよ。

学校が終わると、わたしは鞄をつかみ、喫茶店へと向かつた。  
「クオはまだ来ていない。でも、もうじき来るだらう。わたしは奥の席に座つた。

しばらく待つと、クオが入つてきた。

「あつ、クオ！」

手を振ると、クオはわたしに気づいてこちらにやつってきた。向かいの席に座つて、メニューを見る。しばらくするとウエイトレスさんが注文を取りに来たので、クオはアイスコーヒー、わたしはアイスココアを注文した。このお店のココアは、クリームがたっぷり入つていて美味しいの。

「で、なんだ？ 相談したいことつて」

「あ、うん。あのさあクオ、鏡音君と仲いいよね？」

「なんだよいきなり！」

クオはちょっとむつとしてるみたい。どうしたんだらう。とはいえる、この目的のためには、クオの機嫌なんかに構つてられない。わたしは質問を続ける。

「調査よ調査。クオ、鏡音君つて、今つきあつている人はいる？」  
まずは彼女の有無を確認しないとね。お膳立てしといて実は彼女がいました、じゃ、リンちゃんが傷ついたやう。あ、でも、つきあつてる人がいたらどうしよう。さすがに別れさせるのはちょっと、ね……いませんよつに。

一方、クオはますますむつとしてるみたい。

「今はいなのはずだけど。去年の今頃に彼女と別れたつて聞いてから、新しいのができたという話は聞いてないし」

前はいたけど、今はいなのは。なかなか悪くない話。クオの口ぶりだと、深刻な失恋つて雰囲気でもなさそうだし。今頃淋しさが身にしみてるかも。

「じゃあ今フリーなんだ。ね、前の彼女と別れた理由って何?」「

「なんでそんなこと訊くんだよ」

「だつて知りたいんだもん。浮気性だつたりすると困るし」

浮気症とか、彼女に暴力振るうとか、金銭関係のトラブル抱えてるとか、そういう性質の悪い男をリンちゃんに近づけるわけにはいかないもんね。

クオは、不機嫌と困惑が入り混じったような表情で、わたしの質問に答えてくれた。

「なんか……相手の子に別に好きな人ができるたらしい。学校が違うからつきあいの継続が難しかったんじゃないのか。詳しいことは聞いてないから俺も知らない」

割とオーソドックス、というかものすごく普通の理由ね……。まあでもそんなもんか。それに、下手に失恋の傷引きずられても困るわ。

「じゃ、浮気とか暴力とかじゃないのね。まあ、真面目そつだし大丈夫だと思ったけど。これならOKだわ」

リンちゃんの彼氏として。鏡音君は外見もいい方だし、成績も良いし、リンちゃんと並んでも見劣りしないわ。よし合格。

「何がだよ。おいミク、自分で納得しないで、俺にちゃんと説明しろ」

おつとつと。クオにもちゃんと話をしなくちゃね。これから協力してもらひうんだから。この計画には、クオの協力が必要不可欠なんだし。

と、クオが不意に深刻な表情になつた。どうしたのよ。

「なあ、ミク……。お前、もしかして、レンのことが好きなのか?」  
は? やだなあクオったら、どうしてそうなるのよ。思つてもみなかつたことを訊かれたせいで、わたしは笑い出してしまつた。ありえない。そりや、確かに鏡音君は見た目いいけど、わたしの好みとは外れている。

「え? 嫌だ違うわよ」

あれ、クオ、怒るかと思つたらほつとした顔してゐ。びりしたんだろう。

「じゃあ何が『いれならOK』なんだ」

あ、いけない。ちゃんと説明しないと。

「鏡音君とリンちゃんの仲を取り持つてもOKつてこと」

わたしがそう言つと、クオは今度は畳然とした顔になつた。何もそんなに驚かなくてよいにじやない。

「どこからそういう話が出てくるんだ」

クオはわたくしたちはクラスが違うので、あの朝の風景は見ていない。というわけで、わたしは力を込めて説明することにする。

「今日ね、リンちゃんと鏡音君が話をしてたの。それを見てわたしはびんと来たのよ」

「……何が」

クオ、どうしてそういう興味なさそうな反応なの？　わたしにとつてこれは一大事なのよ！？

「あの一人は絶対お似合いだつて！」

「ごぶしを握つてわたくしはそう断言した。でも、クオはしらけた表情をしている。……もつ。

「なんでそこでお前が盛り上がるんだよ」

クオはそんなことを言つてきた。

「え～、だつて、高校生活勉強ばかりじゃ淋しいじゃない？　リンちゃんが彼氏を作るチャンスをものにしてあげるのが、親友の務めつてものでしょ？」

ちょっと、クオつてばどうしてそこまで呆れきつた表情するの？

全くもう、クオはリンちゃんの抱えてる事情知らないし、仕方がないのはわかってるけど、ちょっと面白くないわ。こうでもしないと、リンちゃんは恋愛する前にあのお父さんに結婚させられてしまつ。「お前だつて彼氏いないじやないかよ。他人の世話を焼く前に、自分をどうにかしたらどうだ？」

しかも、しかもだ。クオつたら、こんなことを言い出したのだ。

「しょうがなーじゃない！　わたしにつりあつようないい男がいいんだから！」

「わたししがつきあうんだから、わたしのことを世界で一番お姫様扱いしてくれる人じゃないと。これだけは譲れないわ。というか、クオだつてわたしの好みは知つてゐませうなのに、なんでこんなこと言つのよ？」

クオはむすーっとした表情のまま、アイスコーヒーを一口啜つた。

「それにしても……お前それだけの理由で、レンに巡音さん押しつける気か」

……ちゅうと、それ、どうこいつ意味！？　久々本気で怒つたわよ。クオつたら、リンちゃんのことなんだと思つてるの！？

「クオ……それ、どうこいつ意味？」

わたしは冷たい口調でそう言つて、クオを睨んだ。クオが椅子の上でじりつと後ずさる。さすがにわたしが本気で怒つてることがわかつたみたい。

「ハ、ミク……そんな怖い顔するな」

悪いけど、返答次第によつちや許しちゃおかないわ。

「『レンに巡音さん押しつける』って、どうこいつつもりで言つてるの？　リンちゃんはわたしの友達よ？　クオは、リンちゃんをそういうふうに思つてるの？」

わたしがクオを睨んでいると、クオはたじたじになりながら、こんなことを言い始めた。

「い、いやだからさ……レンの気持ちはどうなるんだよ？　お互いの気持ちが大事だろ。レンにせよ巡音さんにせよ、好みは逆かもしれないぞ」

賭けてもいいけど、クオ、もともとは違つてると考えてたでしょ。でもまあいいわ、勘弁してあげる。

「それは……まあそうだけど……」

クオは、見るからに安心した様子をしている。甘いわね。計画に

協力はしてもらうわよ？ わたしを怒らせたんだから、これは当然の代償よね。

「でも、うまくいくかもしないでしょ？」

わたしの勘は、あの一人はうまくいくと告げている。

「可能性がないとは言わないが……」

「じゃあやるわよ」

クオをさえぎり、わたしはぴしゃりとつい言つた。

「何を」

「二人の仲を取り持つのー」

クオ、できることなら協力したくなさそう。でも、逃がすもんですか。

「クオ、手伝ってくれるわよね？」

声にフレッシュナーをこじませてつい言ひ。絶対に承諾してもらいますからね。

「……わかったよ。で、俺は何すりゃいいんだ。言つとくけど、レンを巡音さんとつきあいつの説得するには無理だぞ」  
ふつふつふ、かかった。

「そんなこと頼まないわよ。あのね……」

わたしは早速、クオに作戦を説明し始めた。

## //クの興奮（後書き）

やつぱりハイテンションな//クは書いていて楽しい。

何故ならそれこそが恐怖だから

土曜日の夕方。俺が自分の部屋で課題を片付けていたいと、携帯が鳴った。かけてきたのは……クオか。

「もしもし」

「よつ」

「どうした？」

「ああ……えっと、お前、明日暇か？」

なんか歯切れ悪いな。いつもならもつと立て板に水みたいに話すのに。

「暇だよ。晩飯作らないといけないから、それまでだけど」

晩飯当番以外の予定は入ってない。遊びにでも行こうってのかな。

「そつか。だつたら、明日、俺の家に来ない？」

「え？」

俺は思わず訊き返してしまった。こいつ、今、何て言った？

「だからさ、明日、暇なら俺んちに来ないかって言つたんだよ。映画のDVDでも見ようぜ」

変だな。クオの奴は両親が海外赴任中で　ぶっちゃけ、これが俺とクオがすぐ意気投合した理由の一つだつたりする　現在は従姉の初音さんの家で生活している。そのせいか、クオは基本的に誰かを自宅に呼ばない。だから、一緒に映画のDVDを見ようとかゲームをしようなんて話の場合、クオの方が俺の家に来る。なんだ？　何があった？

「映画？　だつたら映画館行こうぜ。面白そうな新作が確か今日からだつたぞ」

「……それもいいけど、やっぱ明日は俺んちにしようぜ」

やつぱりなんか変だぞ。俺が携帯を握つたまま考え込んでいると、クオはこんなことを言い出した。

「そつそつ、レン。例の奴買つたんだぜ。お前が見たいって言つて

たゾンビ映画」

「『ブレイン死』？」

そりや見たい。前から見たいと思いつつ機会が無かつたんだよ。  
「折角だから俺んちで見ようぜ。ホームシアターあるし」

へえ、初音さんとこにはホームシアターがあるのか。それでゾンビ映画見るのも楽しいかも。

「じゃ、そうするか」

なんか変だなと思いつつ、俺はクオの誘いに乗ることにした。

クオの家　　つてか、初音さんの家か　　に行くのは初めてだ。  
住所を確認してついた先は、聞きしに勝る豪邸だった。ああ、これ  
じゃあ……家に人呼ぶの、確かに嫌かも。

インター ホンを押すと、クオが出てきた。つていうか、門から家  
までが広い。ここは本当に日本かと突っ込みたくなる。

「よう、来たな。入れよ」

「一応、挨拶とかした方がよくないか?」

「ああ、今日は伯父さんも伯母さんもいないんだ。いるのは俺とミクと、お手伝いさんとかだけ」

……だから呼んだのかな？　まあいや。あれこれ突っ込むのは  
やめとこう。

「ホームシアターがあるのはこっちだ。ついてこいよ」

俺はクオの後について行つた。クオが一つの部屋のドアを開けて  
中に入り、そこで立ち止まる。……あれ。

クオが開けた部屋には確かにホームシアターが設置されていた。  
さすが金持ちというか、部屋の壁一つがスクリーンになつていて。  
周りの音響機器も高そうだ。スクリーンから離れたところにゆつた  
りしたソファと背の低いテーブルが置いてあって……そこに女の子  
が一人いる。……初音さんと巡音さんだ。もしかして、かちあつた?  
「あれ、ミク。お前、なんでここにいるんだ」

「あ、クオ。今日はリンちゃんと映画を見ようと思つて「ちょっと待て。今日は俺がホームシアター使う日だぞ」「そんなの聞いてない」

俺の見ている前で、クオと初音さんはもめ始めた。巡音さんの方に視線をやると、ソファに座つたまま、困つたような表情で一人を見つめている。

「何言つてんだミク。俺、昨日ちゃんと話しただろ」「聞いてないってば」

「お前、先週もホームシアター独占してただろ。今日は譲れよ」「えへ、嫌へ。折角リンちゃん呼んだんだし」

「やかましい。こっちだつて都合があるんだよ

……何やつてんだこの二人は。と、その時、巡音さんがおずおずと口を開いた。

「ミクちゃん……。わたし、今日は帰ろうか?」「

そうだよな、こんな状況見たら帰りたくなるよな。

「ダメっ! リンちゃんがクオに遠慮することないのっ!」

すかさず叫ぶ初音さん。……こうこうキャラだったのか? けど、

一人の喧嘩を見ていても楽しくないぞ。それは巡音さんも同意見だろつ。

「あへ、じゃあ俺が帰る

「レン、帰るんじゃないつ! 僕をこの状況で一人にするなつ!」

今度はクオに止められてしまつた。どうしろつていうんだよ。巡音さんを見ると、困つたような表情のまま、今度はこっちを見つめる。どうしよう、と言いたげだ。それはこっちが訊きたい。

俺と巡音さんが内心で頭を抱えていると、初音さんが立ち上がりつた。

「……ちょっとクオと話をつけてくるから、リンちゃんはここで待つて。帰っちゃダメだからね」

……なんだか怖いぞ。クオ、もしかしたらすゞへ苦労してたのか?

「レン、俺が戻つてくるまで勝手に帰るなよ

そう言つて、クオは初音さんと部屋を出て行つた。なんだよ、そんない人になりたくないのかよ。とはいへ、こう言わるとさすがに帰れない。

というわけで、俺は巡音さんと一緒にで部屋に残されてしまった。巡音さんを見ると、相変わらず困った表情のまま、視線を宙にさまよせている。えーと……。

「……いつも、ああのの？」

俺は、とりあえず浮かんだ疑問を口にした。

「え、いつも？」

言葉が足りなかつた。

「クオと初音さん」

「大体あんな感じかな」

へえ。初音さんつてクオと一緒にだとああなるのか。結構意外だ。

「大変だなクオも。あ、そっち座つてもいい？」

立ちっぱなしで待つてんのもあれだしな。巡音さんが頷いたので、俺はソファの少し離れた位置に座つた。

「あの一人、どれぐらいで戻つてくると思つ？」

数時間単位でもめられても困る。ま、さすがにそれはないか。

「さあ……わたしも、あんなに派手に揉めてるのは初めて見たし」

巡音さんは首を傾げた。見当もつかないらしい。

「クオの奴一体何やつてんだか……。そういうや巡音さん、足の具合はどう？」「

「まだ痛いけど大丈夫よ」

「巡音さんは、初音さんとは仲いいの？」

「ええ。幼稚園の頃からのつきあいだから」

「そりや長いね」

ここで話が途切れてしまつた。えーと、何だか気まずいな。何か適當な話題、適當な話題……。

「巡音さんたちは、今日は何見る予定だつたの？」

映画の話題なら無難だろう。

「え？」

「いやだからさ、映画。俺とクオはホラー見る予定だつたんだけど、そつちは何を見る予定だつたのかなって思つて」

「聞いてないの。ミクちゃんは『楽しみにしていて』としか言わなかつたし。でも、多分ラブコメじゃないかな」

クオとは真逆の趣味だな。女の子らしいけや、らしいけど。

……つて、初音さんのこと話してると巡音さん、感じ違うな。

「初音さんはラブコメが好きなのか。クオはああいうの苦手みたいだけど」

「そうなの？」

「前そういう話をしてたよ。あれじや度々揉めてるだらうね。巡音さんは？」

軽い気持ちでそういう話をしてみる。……なんでそこまで固まるんだ？

俺、別に変なこと訊いてないよな？

「だから、ラブコメとかが好きなの？ それとも恋愛物の方がいい？」

具体的な質問の方が答えやすいかと思つて、訊き方をえてみる。

「え……」

やつぱり固まつたまんまだ。そんな緊張するようなことか？ 俺、映画見る人間なら誰でも訊くよつなこと訊いただけなの。『』。

「単純にどっちが好きなのかつて話なんだけど。あ、どっちも好きなの？」

「…………」

「『』の前『ロミオとジュリエット』見てたし、『椿姫』読んだりしてたから、巡音さんつて恋愛物が好きなのかつて思つてたんだよね」

……何喋つてんだろ俺。と、巡音さんがようやく口を開いた。

「あれは、たまたまそういう組み合わせになつただけで……」

えーと、そんな悲痛な表情をしないでくれますか。俺がいじめるみたいじゃん。……さつきみたいにしてた方が可愛いのに。

「……巡音さん、俺何か悪いこと訊いた？」

気になつたので更にこいつ訊いてみる。

「え？」

戸惑い半分、困つてます半分つて表情で訊き返された。……どうなつてんだろ。

「あ……いや……」

俺も返事に困つてしまつた。そして、一人とも無言になつてしまつたまま、時間がだけが過ぎていく。……さすがに結構しんどいぞ。クオの奴何やつてんだ。

どれだけ経過しただらうか。ようやく、ドアが開いた。

「ごめんね～、一人とも。待たせちゃつて」

初音さんとクオが戻つて來た。助かつた……。巡音さんの様子をうかがうと、向こうも明らかにほつとしている。

「ミクちゃん、お帰り」

初音さんは明るい。隣のクオは仏頂面だ。

「とりあえずクオとは話がついたから」

初音さんはそんなことを言つた。どう話がついたんだろう。「で、結論は？」

俺は初音さんに訊いてみた。

「うん。今日のところは四人で揃つて映画を見ようつて」

……へ？ どうしてそういう話になつたんだ。思わず巡音の方を見ると、向こうもびっくりしている。そりやそうだよな。つていうか……。

「クオ、お前、それでいいの？」

恋愛映画嫌いだろ。

「しううがねえだろ。レン、悪いが今日はつきあつてくれ。俺、この状況で一人になりたくない」

別にホームシアターにこだわらなくとも、今からでも俺の家に行くとか、選択肢はあるだろ。けど俺がそう言つ前に、初音さんがソファにやってきた。

「というわけだから、詰めて詰めて」

初音さんが巡音さんを軽く押したので、巡音さんは俺の方に向かって席を詰めた。初音さんが巡音さんの反対側の隣に座る。クオはDVDのパッケージを開けて、プレイヤーの開閉スイッチを押した。「じゃんけんでわたしが負けたから、最初の映画はクオが選んだ奴だけど、リンちゃん、辛抱してね」

「ミク、お前、一々うるさいよ」

クオはえらく不機嫌だ。DVDをセットすると、リモコンを片手に戻ってきて、初音さんの空いている側の隣に座つて、再生ボタンを押した。つて、ちょっと待てよクオ。お前、この状況で『ブレインデッド』見る気か？ どう考へても女の子と一緒に見る映画じゃないだろ。画面が汚いって評判な上に、使つた血糊の量でギネスブックに載つてる映画だぞ。

……もしかしたら初音たちもホラー好きとか？ あ、これ、『ブレインデッド』じゃないや。『グーン・オブ・ザ・デッド』だ。さすがのクオも『ブレインデッド』と一緒に見る気はなかつたらしい。……これもゾンビ映画だけど。

前に一度レンタルで見たことあるけど、やっぱりホームシアターだと迫力が違うな……なんてことを思いながら、冒頭の女の子ゾンビが襲つてくるシーンを見ていた時だった。突然、隣からすごい悲鳴があがつた。

「いやああああ！」

びっくりしてそっちを見る。初音さんが悲鳴をあげていた。あれれ。巡音さんも画面を見るが、じやなく、初音さんを見ている。こんな反応するつてことは、初音さんつてホラーが全くダメなタップ？ クオ、お前、何考へてんだ。俺と巡音さんはどちらも畠然として、悲鳴をあげる初音さんを見ていた。

「クオのバカつ！ 変態つ！」

初音さんはいきなり立ち上がりつてクオに飛びかかると、その首を勢いよく絞め始めた。うわあ……。

「何考へてんのよつ！ 信じられないわつ！」

「…………」

「あんなグロい映画見るなんてつ！ クオの悪趣味悪趣味悪趣味  
つー」

いや、じんのまだ序の口で、この後もつとす」このシーンが……  
なんて言つてられる状況ぢやないな。とりあえず、俺はリモコンを  
手にすると、停止ボタンを押して画面を消した。消えたら落ち着く  
かなと思つて。でも、初音さんは相変わらず叫びながらクオの首を  
絞め続けている。

「ねえ、巡音わん」

「何？」

「初音さんつて、ホラー苦手だつたりする？」

「…………そう言えば、わたし時々ミクちゃんと映画見るのだけど、ホ  
ラーは一緒に見たことがないわ。わたし、ホラー映画つて見たの、  
これが初めて」

なんか今引っかかる台詞があつたけど、今はクオを助けてやらな  
いと。口から泡ふきかけてるし。俺は立ち上がると、初音さんの肩  
を軽く叩いた。

「初音さん初音さん、それくらいで勘弁してあげて。クオ、白目む  
いてる」

初音さんははつとした表情になり、クオの首を絞める手を離した。  
えーと……今、クオの頭がソファの腕木にぶつかって、なんだか鈍  
い音がしたような……。

……つていうか、クオ、動いてないぞ！？  
「きやーつ、クオ、しつかりしてつ！」

初音さんはもう一度クオに飛びつくと、今度はクオを激しく揺さ  
ぶり始めた。その度にクオの頭がソファの腕木にぶつかって、鈍い  
音がする。……なんというか、背筋が寒くなってきたぞ。

「ねえ、ミクちゃん……そつとしておいてあげた方がいいんじゃな  
いの？」

たまりかねたのか、巡音さんがおずおずと口を挟んだ。

「リンちゃんつ！ クオが起きないつ！ じつしよつ！」

初音さんはクオを放り出すと また鈍い音がしたぞ 巡音さんに勢よく抱きついた。巡音さんが初音さんの頭を撫でてこる。……もしかして、こここの家これが日常茶飯事だつたりするんだろつか。

「えつと……多分大丈夫よ」

巡音さんはそう言つてゐるが、本当に大丈夫かこいつ？ 僕はクオの傍らにしゃがみこむと、頬を軽く叩いてみた。

「お～い、クオ。生きてるか？」

「う……」

クオは首をさすりながら起き上がつた。さすがにちょっとほつとしたぞ。救急車を呼ぶような事態にならなくてよかつた。

「ほひ、ミクちゃん。ミクオ君は大丈夫だつたから」

巡音さんが初音さんにそう言つてゐる。

「悪いが……全然大丈夫じゃねえ……ミク……俺を殺す氣か……」  
それはそうかも。

「クオ、良かつた！ 生きてたのね！」

初音さんはそう叫んで、今度はクオに抱きついた。巡音さんはほつとした様子で、そんな一人を見ている。

「誰の……せいで……死にかけたと……」

「あーん、クオ！ ゴメンなさいっ！ わたしがやりすぎたわ！」

これは一応いい光景と呼んでいいんだろうか。……俺にはわからん。

といふか、映画は？ クオも息を吹き返したので、俺は訊いてみることにした。

「で、映画はどうする？」

「ホラーは嫌よつ！」

初音さんの即答。確かに、これじゃあ俺もホラーを見る気はない。今のクオの臨死体験は、下手なホラーより怖かった。

「じゃあ、初音さんが見たい映画を見るとこいつと。それでいい？」

巡音さんの方を見ると、頷いた。クオを見る。

「もうそれでいいよ……」

それが、クオの返事だった。諦め半分、疲れ半分という顔をしている。あんなことがあつたんだから仕方ないか。

「じゃあわたしのお薦め映画を……」

初音さんが立ち上がり、プレイヤーにDVDをセットした。そして、映画上映会は再開したのだった。

昼食やら休憩やらを挟みながら、俺たちは結局映画を一本見た。どっちも初音さんのお薦めのラブコメ映画。クオはずーっと仏頂面をしていたが、女の子一人は楽しそうだった。一本目はともかく、二本目の映画は音楽の使い方が面白かったな。

映画を一本見終わると、巡音さんは「門限があるから」と言って、帰つて行つた。初音さんも自分の部屋に引き上げてしまい、ホームシアタールームには俺とクオが残された。さて、と……。

「俺もそろそろ帰るけど、クオ、ちょっとといいか？」

「なんだよ」

「今日見れなかつたホラー映画、備してくれ」

結局『ブレインデッド』は見れなかつた。

「ああ、別にいいぜ。今日は悪かつたな。ミクと鉢合せしちまつたせいで、お前までラブコメ映画につきあわせちまつて」やつぱりこいつ、なんか変だ。ちょっと確かめよつ。俺がクオを正面から見つめると、クオはたじろいだ。

「……なんだよ」

「訊きたいことがあるんだ。クオ、お前、俺に何か隠してないか？」

クオは、なんというか、わかりやすいほどに派手にうろたえた。

「……な、何だよいきなり。そ、そんなことないだろ」

お前、嘘つくて向いてなこよ。演劇部なのになあ。……思わず派手なため息が出る。

「お前さあ、その態度だけで『はー、俺は何か隠します』ってバレてるよ?」

クオがむつとした表情になる。だが、俺はクオが口を開く前に、先を続けた。

「そもそも、昨日の時点ではだと思つたんだよ。お前、あんまり自分の家　ってか、初音さんの家か　人に呼びたがらないだろ。なのに今回に限つてはやけにしつこかつたし。何がしたかったんだ」絶対何か魂胆があるはずだ。何を企んでいるのか知らないけど、正直、こういふのは面白くない。

「別に深い意図はねえよ」

そりつとぼけるクオ。あ、そつ。それなら俺にも考えがあるわよ。「クオ。正直に全部喋らなこと、この前の合宿でのこと、初音さんに話すぞ」

俺がそう言つと、クオの顔が引きつった。

「レン、あのことは言つなつて言つただろ!」

「うん、だから、黙つててやるから、隠し事があるなんならここで全部白状しろ」

クオは冷や汗を流しながら固まってしまった。……そんなにあのことばらされたくないのか。別に大したことでもないと思うんだがなあ。アニメ見て号泣するのって、そんな変なことでもないだろ。そりゃあの時、クオがボロ泣きしたせいで、みんな引いてたけど。普段から初音さんの前で「『フランダースの犬』!？」その程度のアニメでこの俺が泣くか」とでも宣言してみんだろうか。

「で、クオ、どうするんだ?」

「えーっと……誰にも、特に、ミクと巡音ちゃんには絶対に言つなよ?」

「わかつたからひとつとと喋れ」

俺がそう言つと、クオはうつむきながらぼそとこじんないと

言い出した。

「ミクと一緒にホラー映画を見たかつたんだ」

「……なんだよそれ」

理由になつてないぞ。

「最後まで聞いてくれよ。ミクはホラー映画が嫌いで、俺がホラーを鑑賞してる時は絶対よりつかない。そんなミクと一緒にホラーを見るにはどうしたらいいか！」

妙に力を込めてそう言うクオ。おい……そんなことの為に、わざわざ俺を引っ張りだしたのか？

「それで初音さんの予定を調べて、わざわざ巡音さんが来る日を選んで、俺を呼んだわけ？」

「だつて一人だと逃げられるだろ。誰かいたら逃げづらいじゃないか」

巡音さんと俺は、初音さんを引き止めておくための障害物かよ。道理でひたすら帰るな帰るな言ってたわけだ。……アホらし。

「うまくすれば、ミクがきやーって叫んで俺に抱きついてくれるかもって、思つたんだよ……悪かったな」

「……良かつたな、夢が叶つて」

実際、抱きついてはもらえたわけだし。といつか、こいつ、普段からそんなこと考えていたのか。まあ、初音さんは可愛いし、クオがそういう気持ちになるのはわからなくもないけど。けどなあ、一緒に住んでるんだからもつと別のアプローチあるだろ。

大体理由には納得したが、これだけは言つとう。

「ホラーが嫌いという人にホラーを見せるのは、はつきり言って悪趣味だよ。せめて、もつと大人しいのにできなかつたのか？」

「ゾンビはホラーの王道だろ。お前だつてゾンビ映画好きじやねえか」

「ホラー苦手な人と一緒に見たいとは思わない」

他のジャンルはともかく、ホラーだけは苦手な人に下手に見せるもんじやない。

「 もう一度としねえよ。さすがの俺も懲りた。たく、巡音さんぐら  
いミクも落ち着いてくれりやいいのに……」

「 あれは落ち着いてたんじゃなくて、初音さんが騒ぐから画面に集中できなかつたんだと思つ」

初音さんが悲鳴を上げ始めてからは、巡音さんは初音さんの方ばかり見ていた。あんな大声で悲鳴をあげられたら、誰だつてそつちを見るだろう。

と、クオが急に、妙なことを訊いてきた。

「 お前、巡音さんのことどいつ思つ？」

「 何だよ藪から棒に」

「 いきなりそんなこと訊かれたつて答えられるか。同じクラスとはいえ、一週間前までまともに喋つたことなかつたのに。」

「 いいから答えてくれ」

……こいつ、また何かろくでもないことを考えてるんじゃないだろうな。

「 クオは、巡音さんのことどわぐらい知つてる?」

「 あんまり知りん。ミクとは仲いいけど、俺はほとんど話したことないし」

「 巡音さんの口ぶりだと、よく遊びに来てるみたいだつたけど。それで全然話す機会ないわけ?」

よく一緒に映画見るみたいな感じだつたもん。クオはちょっと嫌そうな表情で、こう言った。

「 だつて俺あの子に用事ないし、たまに話しかけても黙り込んでしまうつて、結局はミクが代わりに話すし。ミクも何だか俺に冷たいし。で、お前は巡音さんのことどいつ思つわけ? まだ質問に答えてもらつてないぞ」

確かに巡音さんは人と話すの苦手みたいだけど……要するに、クオは巡音さんのことが邪魔なんだるうな。ついでだからもう一つ確認しようと。

「 もんもー一つだけ教えてくれ。初音さんの方が、巡音さんの家

に遊びに行く」とは?」

「ねえよ」

ふーん、そうか。それにしても……クオ、ちょっと大人げないぞ。自分が初音さんの一番になりたいからって、その親友を追っ払おうとするのはさ。というか、俺にどうしてほしいんだよ。

「で、お前いい加減に俺の方の質問にも答えろよ」

「何だつたつけ?」

別に忘れてないが、ちょっととからかってみる。

「巡音さんのことどう思うのかって、さっきから何度も訊いてるだろ」

悪いけどお前に同意はしかねる。

「お前は俺にそれ訊いてどうしたいわけ?」

「レン! 質問に質問で返すなよ!」

「だつてお前の意図がわからんないし」

「ああもうつ!」

大体、自分の人間関係に俺を巻き込むなよ。この環境じゃ色々気苦労も多いのかもしけないけどさ。とばっちりを受ける身にもなってくれ。

「……お前の気持ちもわかんなくはないけど、そういうのはよくないと思うぞ」

「は?」

「じゃ、俺は帰るよ。あ、クオ。DVD  
クオがDVDを渡してくれたので、俺は家に帰ることにした。

何故ならそれが恐怖だから（後書き）

なんかリンパートと比べてずいぶんと長くなつたりやこましたね、この部分。

余談ですが、書いている私自身はゾンビ映画は苦手……といつか、そんな好きでもないです。

## ミクの不満

わたしが立てた作戦は完璧だった。まず、わたしがリンちゃんを「映画でも見ない?」と言つて家に呼ぶ。そして同じ日に、クオがやつぱり映画を口実にして、鏡音君を連れてくる。後はわたしとクオが喧嘩をする振りをして、一人だけ部屋に残して出て行つてしまつた。これで、リンちゃんと鏡音君が部屋の中で一人っきり、といつ、非常に美味しい状況ができあがることになる。

クオはうまくいくわけないだろ?、という態度を崩さなかつたけれど、鏡音君を呼ぶことは呼んでくれた。なんでも、このために鏡音君の見たがつていた映画のDVDを買つたらしい。ありがと、クオ。

わたしもリンちゃんに電話をかけて話をする。いつちは簡単だ。リンちゃんは基本的に、わたしの誘いは断らない。一いつ返事でわたしの家に来ることになった。

そして当日。わたしとクオは予定どおり、ホームシアタールームで鉢合わせして喧嘩した後、「話をつける」と言つて、部屋を後にした。お一人さん、じゅつくり。

「ところで、第一段階(一人を呼び出して、一人だけにする)はうまくいったけど、この後はどうするんだ?」

部屋で、クオはこう訊いてきた。

「適当なところで部屋に戻つて、四人で映画を見ましょ?。何も見ないと変だと思われるし。うまくいけばこれで更に親密度がアップするはずよ」

一緒に映画を見たら、きっと親近感とかも沸いてくるだろ?」。クオも異論はなさそつ。

「ミク、映画は何を見るつもりなんだ?」

「ラブコメよ。どびきりキュー<sup>ト</sup>な奴」

えりすぐりのを用意したもんね。可愛くて、ちょっと笑えて、う

つとりできるような奴。これを見たらきっとリンちゃんだってその気になるわ……って、クオ、なんで不満そうな表情になるのよ。

「先に俺が選んだ奴見てもいいか?」

「何?」

「ホラー映画」

……ちよつと…

「わたしがホラー嫌いって知ってるでしょ?」

クオは、なんでだか知らないけどホラー映画が好きだ。正直、わたしには理解できない趣味だつたりする。あんな気持ちの悪い映画のどにがいいのかしり。

ところが、わたしが顔をしかめていると、クオはこんなことを言い出した。

「おい、ミク。お前、一人の仲を取り持ちたいんだろ。だつたらホラーを見せた方がいい」

なんでそうなるのよ。

「どうして?」

「つまくいけば、巡音さんが怖がつてレンに抱きつくかもしないぞ」

え……。でも、リンちゃんがそんな簡単に抱きつくかな……。

「うーん、でも……」

「ミク、アメリカじゃホラーはデータームービーの定番だ。さや一つ怖いって抱きつかれたら、どんな男だつて悪い気はしないっ!」

妙に力を込めて、クオはそう力説した。ガードの固いリンちゃんが、幾ら怖くても抱きつくとはちょっと想いにくいんだけど、震えて怖がつたりしたら、男の人の目には可愛らしく見えるかもしれない。

「絶対ホラーの方が盛り上がるつて! 俺を信用しろ!」

正直、ホラーは嫌だ。でも、画面を見ないようにしていれば大丈夫よね、きっと。

「うーん、なら、いいけど……」

クオ、ガツツポーズして喜んでいる。そんなにホラーが好きなの？

「ミク、お前も映画が始まつたら俺に抱きつけ」

「なんでそうなるのよ？」

「巡音さんがお前に抱きついたら困るだろ。先にお前が俺に抱きついておけばそれを防げるじゃないか」

「…………」

とりあえず、わたしはクオの頬つぺたを力いっぽいつねつておいた。

ホームシアターの部屋に戻つてみると、リンちゃんと鏡音君は気まずそうな表情で座つていた。……おかしいわね。今頃談笑してくれるはずだつたのに。何か問題でもあつたのかしら。

とにかく、今は映画よつ。そんなわけで、わたしはリンちゃんの隣に座つた。わたしの隣はクオの為に開けておく。

そして、クオが選んだホラー映画とやらを見ることになつたんだけど……正直、わたしにはとてもじやないけど耐えられなかつた。何なのよおつ！ なんでいきなり流血沙汰なのおつ！？ ふつつとキレたわたしは思わずクオの首を絞めてしまい、ホラー映画鑑賞はそのままストップになつた。

まあそんなわけで、結局残りの時間はわたしが選んだラブコメ映画を見ることになつた。……クオは、ずーっと不服そうにしていたけれど、仕方がないでしょ。なんでホラーなんかが好きなのよ。

映画を見てお昼を食べて、もう一本映画見ておやつ ちなみに、おやつはリンちゃんが持つてきたケーキだ。相変わらず美味しかつた を食べると、リンちゃんは門限があると言つて帰つてしまつた。……あそこのお父さん、異常に厳しいのよね。門限を破つたりしょつものなら、リンちゃんは一ヶ月は外出禁止だ。うちのお父さんですら、リンちゃんのお父さんのことは「うーん、ちょっと、あの人はなあ……仕事の上では問題ないんだが……」と言つている。

わたしのお父さんがやつぱりハーレーとせよほどのじいだ。実際、あ  
あいこと也有つたし。

ああいうことってのは何かって？ あれはわたしたちが小学校に  
入ったばかりの頃だった。わたしの家に遊びに来たリンちゃんに、  
わたしは当時ハマっていた少女漫画を見せた。リンちゃんがもつと  
読みたいというので、わたしはリンちゃんに漫画を何冊か貸してあ  
げた。リンちゃんは大喜びで漫画を持って帰り……。

そして、その夜。リンちゃんのお父さんが苦情の電話をかけてき  
た。娘に変なものを見せないでくださいって。言つておくけれど、  
わたしが当時読んでいたのは、小学校低学年向けの、たわいもない  
内容の漫画だった。過激な内容でもない。ほのぼのした、本当に普  
通の少女漫画。

次の日、リンちゃんはしおげかえつて漫画を返してきました。お父さ  
んに、ひどく怒られたらしい。あんなくだらないもの見るんじゃあ  
りませんって。あんまりよね？ わたしは、リンちゃんがあまりに  
落ち込んでるので、うちに遊びにきたときにつそり読めばいいよ  
つて言つたんだけど、リンちゃんは、あれ以来、漫画に手を触れな  
くなつてしまつた。

後でわたしは自分のお父さんから聞いたんだけど、リンちゃんの  
お父さんは、あの時、電話口で漫画の害について延々と喋り倒した  
らしい。あんなもの読ませるとバカになるとか、勉強しなくなると  
か、子供のためにならないとか、そんなことだ。うちのお父さんは  
自分が漫画が好きなので、あ～そうですかと聞き流していたらし  
いんだけど、リンちゃんのお父さんが「あんなもの読ませるなんて、  
お宅の教育方針はどうなつているんですか」と言つた辺りで、さす  
がにカチンと来て、「それは、」ちらへの戦線布告と受け取つてよ  
ろしいのかな？」と冷たい声で言ひ切つたんだそうだ。それで向  
こつもお互ひの立場 わたしのお父さんの経営する会社と、リン  
ちゃんのお父さんの経営する会社は、大きな繋がりがあるので、ト  
ップ同士が喧嘩するわけにはいかないのだ を思い出して、黙つ

ちやつたんだって。さすがはわたしのお父さんよね。わたしのお母さんは、お父さんはいつも自分をお姫様みたいな気分にさせてくれるって言つてるの。だから、わたしも、将来結婚するとしたら、絶対にそういう人がいいの。これは譲れないわ。

さてと、鏡音君も帰つちやつたし、作戦の第一弾を考えなくちゃ。何がいいかしらね？ クオももつと積極的にアイデア出してくればいいのに。

## ミクの不満（後書き）

一応、ホラーは「ホラーテム」にしての需要はあります。

## フレインテッド

その日の夜、俺は晩飯の後で、姉貴に訊いてみた。  
「今日、クオから映画のDVD借りてきたんだけど、姉貴も見る?  
何借りたの?」

「『フレインテッド』ゾンビ映画。ピーター・ジャクソン監督」  
ちなみに、姉貴は変な映画が結構好きだつたりする。弟の俺でも、  
姉貴の映画の趣味をはつきりとは把握していない。

「ピーター・ジャクソン……ああ、『乙女の祈り』の監督ね  
「姉貴……そこは『ロード・オブ・ザ・リング』の監督ね、って言  
うところじゃないの?」

「いちじうちるさこわよ。……そうね、私も見ようかな  
というわけで、食後は姉貴と一人で映画鑑賞会になつた。  
「何あの格好、ありえな~いつ」

「今切斷した手、どう見ても作り物……」

「人間の解体シーンなんて、下手にリアルでも困るわよ  
「ひつどい親だなあ」

「主人公! 变だつて氣づきなさいよ!」

「神父さんがなんでカンフー?」

「これ……うるさいスジから漏つて言われない?」

「この頃はまだ無名だから、チェックされてないんじゃ?」

「つていうかゾンビつて死んでるんでしょ? 子供なんて作れるの  
?」

「俺に訊かないでくれよ」

「うわーっ……あのおじさん、実は強かつたのね」

「主人公やつと目覚めたか……つて、遅いだろつ!」

「これつて一応ハッピーエンドなのかしらね?」

「じゃないの? ゾンビはやつつけたし、うつとうじい母親は死ん  
だし、恋人もできたんだから」

姉貴と一人で画面に突っ込みを入れながら見ていると、あつとう間に映画は終わってしまった。何せ突っ込みどころがありすぎる。でも、映画として見るとちゃんと面白い。ストーリーも、ちゃんと一本の軸が通してあるし。

「あ～面白かった。こんなに笑えるゾンビ映画は確かに無いわ」

ビールを飲みながら、姉貴はそんなことを言った。

「姉貴はゾンビ映画って怖がらないよね」

今日もけらけら笑いながら見ていた。

「今のをどうやって怖がれというのよ」

「これだけ血と肉片が飛ぶんだから、気分悪くなる人はいると思うよ。グロがいきすぎてギャグになつてるのは認めるけど」

「なんというか、ゾンビ物つて作り物くさくて怖がる気になれないのよね。心理系だと確かに怖いと思うんだけど。で、どうしたのよ急に」

俺は今日、クオの家であつたことを姉貴に話した。

「うーん……まあ、その辺りは個人差が大きいから。駄目な人は駄目なんじゃない？ 私の知り合いにも、ホラー映画つて聞いただけで逃げ出しかねない人いるし。そいつ、男なんだけどね」

それも結構すごいな。

「姉貴は、その人にホラーを見せてみたって思つたりする？」

「ちょっととは思うかな？ ま、実際にはやらないけどね。泣き出されたりしたら寝覚めが悪いでしょ」

そりやそうだ。今日、そういうことにならなくて良かつたかもしれない。

「姉貴はさ、映画のジャンルだつたら何が一番好き？」

ふと思いついて、俺は姉貴に訊いてみた。

「難しいこと訊くわね……」

姉貴は考えこんでしまった。

「難しいか？」

「だって、面白いジャンルつていっぱいあるし。だから一番を選べ

と言わると迷うのよね。あんただって、SFとホラーとどっちが

好き？ つて訊かれたら返事に詰まるでしょ？」

「……確かに。じゃ、特に好きなジャンルをあげてみて、つて言わ  
れたら？」

「特に好きなジャンル？ そうねえ、まずはアクション全般でしょ。  
それからコスチューム物もいいわね」  
えつらい差がある組み合わせだな。

「ホラーも好きだし、最近はファンタジー物も面白いのが増えてき  
たし……」

姉貴は楽しそうにあれこれと作品の特徴を交えて話し始めた。う  
ーん……。

「どうしたのよ、難しい顔して」

「いやさ、今姉貴に、好きな映画のジャンルについて訊いたら、そ  
うやつてばーっと喋りだしだろ」

「訊かれたら大抵は喋るもんじゃない？」

「だよなあ。じゃ、なんでの時、巡音ちゃんはあいつ反応だつた  
んだろう？」

「訊いたら黙られちゃつたんだよ」

「誰に？」

「クオの家で会つた初音さんの友達」

クオは何度か家に遊びに来ているので、姉貴はクオの家庭環境の  
ことは大体把握している。

「あんまり言いたくないジャンルが好きだったんじゃないの？ ミ  
リタリー 映画とか」

「それって言いたくないジャンルになるわけ？」

「『フルメタル・ジャケット』が好きです、なんて男の子の前じや  
言いにくいわよ。変人扱いされちゃう」

巡音さんは『フルメタル・ジャケット』を好きそこには見えない  
んだが……。つていうか、それは姉貴が好きな映画じゃないか。男  
の前でそれ言って変人扱いされた経験でもあるんだろうか。

「『椿姫』を読むよいうな子なんだけど」「別に両方好きでも変じやないでしょ」

そりやそりや……あの時の反応は、そういう感じじやなかつたんだよなあ。

「そもそも『フルメタル・ジャケット』は不憫な映画なのよ！　真面目なテーマを扱った作品なのに、リー・アーメイのおかげですっかりネタ扱いされてるんだから！」

俺が考え込んでいる間に、姉貴はなにやら熱を込めて喋り始めた。何も俺の前で熱弁しなくても……。やっぱり姉貴、誰かにドンビキされたんだろうなあ。

## ブレインデッド（後書き）

名前が出てませんが、レンの姉はめーちゃんです。  
今回かなり映画の趣味が変な人になってますが、これは今作だけ  
の設定で、また別の作品では、違う趣味になってると思います。  
…多分。

ただ、今回、二人が見る映画は『ブレインデッド』でなきゃいけ  
ないんですが。

## 檻の虎に太陽を見せて

クオの家で映画を見てから、数日が経過したある日。俺は学校の図書室で『RENT』のサントラを聞きながら、歌詞をチョックしていた。この前見た舞台は字幕がいいかげんで、話の意味を取りづらかったんだよな。そんなわけでネット通販でサントラを購入したんだが、歌詞カードがついていなかつた。幸い、歌詞を全部載せてくれているウェブサイトがあつたので、そこからプリントアウトしてきただけど。

しかし、映画だとかなり曲がカットされていたんだな。「クリスマス・ベルズ」と「ハッピー・ニュー・イヤー」がカットされているのもつたないさすぎる。映画じや表現しづらかつたんだろうけど。

曲を聞きながら、ノートに思いついたことを書き留める。この辺りは台詞が交差していく聞き取りにくいな……ちょっと一息入れるか。プレーヤーを止めて……あ。

書棚の近くに巡音さんがいて、思い切り目があつた。大体いつも真っ直ぐ帰つてゐるのに、こんなところにいるなんて珍しいな。

巡音さんはしばらくそのまま立つていたが、やがて、こつちへやつてきた。声をかけられそうな気がしたので、俺は片方の耳からイヤフォンを抜いた。

「ここ……空いてる?」

図書室の勉強用の机は四人がけだが、俺は一人で座つてゐるので、他の三つは空いてゐる。訊かれたので、俺は頷いた。巡音さんが俺の向かいの席に座る。そのまま、巡音さんは本を読み始めた。

……何読んだらう。様子を伺つてみたが、本を机の上に置いた状態で読んでるので、タイトルがわからない。

「何読んでるの?」

気になつたので、結局訊いてしまつた。もちろん、声のボリューム

ムは落としている。「ここは図書室だ。

巡音さんは本を立ててみせてくれた。『アグネス・グレイ』と書いてある。

「どうこう話?」「

「……さあ。まだ読み始めたばかりだから」

「そりややうか。

「鏡音君は、勉強?」

今度は巡音さんが方が訊いてきた。違うけど。でも、こんなもん広げていたらそう見えるか。辞書も置いてあるし。

「いや、これはただの趣味」

俺は印刷してきた歌詞を、巡音さんに差し出した。

「詩?」

「歌の歌詞」

俺はポケットに突っ込んでいたプレーヤーを取り出した。

「これのね。聞いてみる?」

俺は何気なくそう言つた。巡音さんはしばらく考えてから よく考え込む子だな 頷いた。

巡音さんにイヤフォンを渡し、彼女がそれを耳に差したのを確認してから、曲の一覧を表示して、「レンント」を選択する。舞台でかかる長い曲はこれが最初だ。……あ。これじゃなくて、「シーズンズ・オブ・ラヴ」の方が良かつたかな。

「……ひやつ!」

再生するやいなや、巡音さんはびっくりしたような声をあげて固まってしまった。えーと……そんなショックを受けるような曲でもないと思うんだが。俺の方がびっくりだよ。

停止ボタンを押すと、巡音さんは強張った表情のまま、イヤフォンを外した。

「……大丈夫?」

「『めんなさい。』いうこの初めて聞いたから、驚いちゃって」

ロックなんか別に珍しい音楽でもなんでもないと思つんだが……

普段何聞いているんだろう。

「巡音さんは、普段はどんな音楽を聞いてるの？」

「クラシックだけど」

お嬢様というのはそういうもののなんだらうか。でも確かにこの前クオの奴、初音さんの誕生日プレゼントだと言つて、アイドルのCD買つてたよな。

「クラシックが好きなんだ」

「……多分」

おーい、返事になつてないぞ。

「こりで、俺はあることを思いついた。」

「じゃ、ちょっとこれ、聞いてみてくれる？」

巡音さんはあんまり気が進まなそうだったが、もづ一度イヤフォンを耳に差した。俺は曲の一覧から「コア・アイズ」を選択する。巡音さんは微妙に緊張した表情で、曲を聞いている。途中から「あれ？」といったげな表情になつたが、最後の方で驚いたようになつた。

「なんで!!!!の名を呼ぶの？ ムゼッタのワルツでしょ？」

「あ……やっぱりわかるんだ」

『RENT』は、十九世紀のパリを舞台にした『ラ・ボエーム』というオペラの翻案だ。でもって、『RENT』の中でロジャーが何度もギターで爪弾いている曲が、『ラ・ボエーム』で使われている、「ムゼッタのワルツ」という曲だつたりするんだそうだ。最も俺は『ラ・ボエーム』を見たことがないので、どんな風になつてているのかはよくわからないし、原曲の「ムゼッタのワルツ」という曲も聞いたことがない。

すぐにわかつてこいつ言ったといつとは、巡音さんは『ラ・ボエーム』を見たことがあるんだな。

「……かなり感じが変わつていたから、名前が出てくるまでは自信がなかつたんだけど」

「作中でもそう言われるけどね。『それじゃムゼッタのワルツだつ

てわからないよ』つて

字幕では「パクリではあります」になつてたりするけど。それじゃ意味が全然違うだろ。

巡音さんは、何がなんだかわからないという表情になつた。あ、いけない。『ラ・ボエーム』のことは知つても、『RENT』のことは知らないんだ。俺は『RENT』についてざつと説明した。「これ『RENT』つていうミュージカルの曲なんだよ。オペラの『ラ・ボエーム』を現代のニューヨークに翻案した作品。ちなみに、前に巡音さんと劇場で会つた時に見てたのもこれなんだけど。で、今のは主人公のロジャーが、最後の方でミニに歌う曲

「ロジャー……ロドルフのこと?」

「そうだよ」

一応あらすじとキャラクターはネットで調べたので知つている。ロジャーはロドルフ、マークはマルチロ、モーリーンはムゼッタだつたはず。

「どうしてロドルフがムゼッタのワルツを歌うの?」

「まあ……何でだろう? でも、三回ぐらいこのフレーズ弾いてるよ」

さすがにそこまではわからん。ラーソンが単に気に入つていただけかも。

「ロドルフオが、『わたしが街を歩くと、誰もが立ち止まって、わたしの美しさに見とれるの』つて歌うの?」

巡音さんがそんなことを訊いてきたので、俺は想像して思わず笑い出してしまつた。……そんなことを言うロジャーは嫌だ。いや、向こうは『RENT』を知らないから仕方ないんだけど。

「……さすがにそれはないよ。あくまでギターで弾いてるだけ。その台詞自体は別の曲にあわせて、ムゼッタに当たるキャラクターが歌つてるけどね」

「ムゼッタのワルツ」はバラバラにされて、『RENT』の中にちりばめられている。曲はロジャーがギターで爪弾き、歌詞はモーリ

ーンが全然違うメロディに乗せて歌う。タイトルだけを真似た「モーリーンのタンゴ」という曲もある。

「『』の曲の歌詞自体は『君こそが探し求めていた歌なんだ』とか、そんな感じ」

「その台詞、『ラ・ボエーム』にも似たのがあるわ。『詩をみつけたんだね』ってみんなが言うの」

ロッカーのロジャーは、『ラ・ボエーム』では詩人だったよな。映像ドキュメンタリー作家のマークは画家、ハッカーで教師のコリンズは哲学者、ストリートアーティストのエンジエルは音楽家だ。

「へえ……『ラ・ボエーム』は見たことがないからなあ。一度見てみたいとは思ってるんだけど」

さすがにオペラは敷居が高い。巡音さんにとってはそうでもないんだろうけど。

「あ、『』めんなさい。携帯に着信入ったみたい」

巡音さんは鞄を開けると、携帯を取り出した。確認して、ちょっと残念そうな表情になる。

「誰から?」

「運転手さん。今日は車の調子が悪いから少し遅れるって、少し前に連絡があったの。で、今、迎えに来たって」

ああ、それで、図書室にいたのか。巡音さんはさよならを言つて、帰つて行つた。……あれ。読みかけの本は借りていかないんだ。

## 檻の虎に太陽を見せて（後書き）

どうでもいいのですが、このシーンでリンが読んでいる本のタイトルで、一時間ぐらい悩みました。いや、最初は別の本を設定していましたが、その本だと、音楽の話そっちのけで本の話になりそうだったもんで……。

こういう、「創作の中に登場させる作品」って、セレクトが難しいんですよね。大体いつもこれで悩みます。

## 作戦会議中のクオ

わたしは現在、クオと喫茶店で作戦会議の真っ最中。作戦といつのは当然、リンちゃんと鏡音君の仲を親密なものにするためのものだ。

同じクラスとはいえ、基本的に一人は全くといっていいほど話す機会がない。というより、リンちゃんはわたし以外と喋ることがほとんどないのよね。だから何としても、一人つきりにして、話をさせが必要がある。親密な関係になるのに一番必要なのはフランクな会話よ。

「とにかく、どうにかしてもう一回呼び出したいの。クオ、何かいい案ない?」

クオはため息をついた。もう、なんで乗り気になってくれないのよ。

「なあ、ミク……もう止めようぜ、いろんなこと」

わたしは、大きく首を横に振った。一度や二度の失敗で諦められますからっての。

「絶対に嫌」

そう答えると、クオは「しおりがないな」と言いたげな顔になつて、今度はこんなことを言つてみた。

「そもそもレンの奴をお前たちに呼ぶのに無理があるんだよ」

「どうして?」

「だって、クオと鏡音君は友達でしょ? 友達の家に遊びに行くのつて当たり前のことよね。クオはよく鏡音君の家に遊びに行くじゃない」

「だからさあ、お前んちはお前たちであつて、俺たちじゃな」の」

そうしたら、クオはこんなことを言い出した。あのねえ。お父さんもお母さんも、家に預かる以上、クオは自分たちの息子だと思つて責任持つて面倒見ますつて、叔父さん叔母さんにそひ宣言してゐる

んだけど。

「今はクオの家よ」

だから遠慮なんかしなくていいのよ。クオってば、変なところで律儀なんだから。

クオは考える表情になつた後で、今度はこんなことを言つ出した。

「レンに怪しまれたんだよ」

「どうこうとかしりつ?」

「怪しまれたつて?」

「この前、なんていきなり自分を家に呼んだのかつて、しつこく訊かれた。何か魂胆があるんじゃないかつて。考えてもみるよ、レンと知り合つて一年半なのに、俺があいつをお前んちに呼んだの、この前が初めてなんだぜ」

「うーん、鏡音君がそんなに察しがいいなんて、予想外だわ。伊達にトップクラスの成績は取つてないつてことかしりつ。あれ、ちよつと待つて。

「問い合わせられたつてことは……クオ、まさか、全部綺麗さっぱり喋つちやつたんじやないでしょ? わたしは思わずクオの顔をまじまじと見てしまつた。

「クオ、まさかとは思つけど」

「誓つて計画のことは喋つてない。適当にじごまかしておいた」

即答するクオ。ほつ、良かつた。喋られたら何もかも終わりだもの。それでも、そうなると、なんかもつと上手な理由を考えないとね。

「何かイベントでもないかな。……今は十月の半ばよね。

「そろそろハロウィンだし、パーティーをするつてのはどうづ。」

「断言するが、そんな口実じや怪しまれるだけだし、あいつは来ない」

きつぱつといつづつクオ。うーん、ダメか。リンちゃんならパーティーやるつて言えば来てくれるんだけどな。

「家に呼ぶのがダメなら……じゃ、家じやなければ?」

「うーん……わたしの家に呼ぶのが難しいとなると……あ、そうだわ。みんなでどこかに遊びに行かない？」

それだったら、もつとクオも口実を考えやすいかも。

「行くつてどこへ？」

「リンちゃんは門限があるし あやこのお父さん、門限にはすこ  
くつるさいのよ 近場じゃないと無理だけど」

移動は我が家の中の車を使えるから、かなり自由が利くはず。

「ゲームセンとか？」

そんな提案をするクオ。確かにクオはよく鏡音君と遊びに行つて  
る。クレーンゲームのぬいぐるみを、わたしにおみやげにくれたこ  
ともあつたつけ。でも、問題が一つ。

「リンちゃんをゲームセンターに誘つのは無理だと思つ。ゲームや  
らないもの」

漫画類が全面禁止なリンちゃんの家だもの、当然、ゲーム類も一  
切禁止だ。ゲームセンターじゃ、鏡音君は大丈夫でも、リンちゃん  
の方を誘い出せない。

「じゃ、カラオケは？」

「それも厳しいと思う。リンちゃん、クラシックしか聞かないから  
いまどきの音楽禁止つてのもどうかと思うんだけどね……。もち  
ろんアニメもダメだし、ライトノベルとかもダメ。おかげでリンち  
ゃんは、普段はクラシックしか聞かせてもらつていなし、読ませ  
てもらえるのは文学みたいな固い本ばかり。

「あんまり変なところだと、レンを引っ張り出すのが難しくなるぞ」

一般的な高校生の遊べる場所じゃないと、確かに鏡音君がまた変  
に思つだらうなあ。えーっと、どこか遊べそつな場所は……。

「……遊園地なんてどう?..」

何も考えずに遊ぶのなら一番適任なはずだ。ここなら、何とかリ  
ンちゃんを説得する自信がある。

「遊園地か……それならいけるかも」

「でしょでしょ~」

わたしは胸を張った。クオに呆れられりやうかな。でも、これくらいいいでしょ？

「で、いつにする？」

「コンちゃんはまだ足の怪我が治つてないから、足が治つたり誘つてみる」

遊園地となると結構中で歩くから、捻挫が治つてなかつたら辛いわよね。やうなると、来月になつちゃつなあ。まあ、果報は寝て待つて呪ひし。これがダメならまた次を考えるだけよ。

## 作戦会議中のミク（後書き）

場所が喫茶店なのは…… 約分、ミクはクオと一人で喫茶店に入りたいんだと思います。

## 芸術家の暮らし

その次の日の昼休み。俺は購買部でサンディッシュとおにぎりを買うと、校庭でそれを食べながら音楽を聞いていた。ちなみに今日も聞いているのは『RENT』のサントラだつたりする。何度聞いても『RENT』の曲はいい。

食べ終わった後も、俺はずつと『RENT』を聞いていた。……あれ、誰か来たぞ。

顔を上げると、そこには巡音さんだった。どうしたんだろう。俺は耳からイヤフォンを外した。

「……巡音さん、俺に何か用？」

「あ、えっと……」

劇場で会つてから妙に縁があるが、そのおかげで、ちょっとは彼女のことがわかつてきた。無口とか人付き合いが悪いとか言われているらしいが、実際のところは、ただ単に喋るのが苦手なだけのようだ。待つてればそのうちに話すだろう。

「それ、昨日と同じ曲？」

「そうだけど」

まさかそれ訊くためだけに、わざわざ来たわけじゃないだらうなあ。巡音さんはしばらくためらつた後、手に持つていた紙袋をこいつに差し出してきた。

「これ……貸そっと思つて。『ラ・ボエーム』のDVDなの」

「え？ 俺は紙袋を開けてみた。確かにDVDが入つていて。パッケージはよりそい二人の男女の写真で たぶん、ロドルフォとミミだろう。『La Bohème』と書かれていた。オペラってDVD出てるのか。知らなかつたぞ。

「え……いいの？」

「見たいって、言つてたから」

わざわざ持つててくれたのか。へえ、なんというか……。

「じゃ、遠慮なく貸してもらひうよ。……あ、返すの、多分週明けにななると思うけど、それでもいい？」

平日は他にやることあるから、見るのは週末になるな。

「ええ。……それじゃあ」

巡音さんは帰つて行つた。

土曜日の夜、晩飯の後で、俺は姉貴にDVDを見ていいか訊いた。俺の部屋にはPCがあるので、DVDならそれでも見れるけど、居間のテレビの方が画面が大きいから、できればこっちで見たい。

「何見るの？」

「オペラ『ラ・ボエーム』」

「……珍しいもの見るわね」

姉貴は驚いたようだつた。まゝ、それは俺も認めよう。

「『RENT』の元ネタだから、前から一度見たいと思つてたんだよ

「別にいいわよ。今日は特に見たい番組も無いし」

姉貴がそう言つたので、俺はDVDを持ってきて、プレーヤーに入れて再生ボタンを押した。姉貴も暇なのか、焼酎のお湯割りを飲みながら一緒に見始める。

パッケージの裏面によれば、これは外国の大きな劇場の公演を収録したものだそうで、最初に映るのはその劇場の外観だ。なんだか既に別世界つて感じがするんだが……中も広いし、内装もえらく豪華。早いところ中身が見たいので、この辺りは倍速にしておく。

序曲（かなり明るい）の後で、いよいよ幕が上がり、オペラが始まると、セット凝つてるなあ。十九世紀のボロアパートの屋根裏がしっかり再現されてる。ロドルフオとマルチエロの衣装も、いかにも当時の人気が着てるみたいな感じだし。二人とも若者のはずなのに、役をやつているのがおっさんのがひつかかるけど。どう見ても両方とも四十代だ。歌はさすがに上手い。普段聞く音楽とは全然違う

歌い方だけど、上手いのはわかる。朗々と響くといふか、声量のある歌声だ。

見ていると、『RENT』に登場したのと同じ台詞やシーンがちよこちよこでてきて面白い。「オウムのソクラテスは天国に羽ばたいていったのさ」は、「秋田犬のエビータは地獄に落ちたの」になつたんだな。///の「ロウソクに火を点けて」や、「みんなわたしを///と呼ぶの」もある。ロドルフオが///の手に触れて「冷たい手だね」もちゃんと入っている。第二幕でのカフェの前で物売りが呼び交わすシーンは「クリスマス・ベルズ」にあるし、子供が玩具屋の後を追いかけていくのは、ヤクの売人の後をジャンキーが追いかけていくシーンに変更されている。

一方で違うところも多い。コリンズとエンジェルに当たる、コリーネとショナールはんまり目立たない。ロドルフオと///は一日で恋に落ちるし、積極的なのはロドルフオの方だ。「僕が暖めてあげましょう」とか言って、///の手をすつてるし（『RENT』では、///の方がロドルフオに抱きついて誘いをかける）……そのくせ第二幕では貧乏な自分と一緒にだと未来がないから、と、よくわからぬ理由で///を捨てる。貧乏なのはどっちもどっちのはずなんだが……。ムゼッタはマルチエロと一度はよりを戻すし、第三幕の冒頭の牛乳売りのシーンは『RENT』には無い。気になつていた「ムゼッタのワルツ」は、巡音さんが言うとおり、かなり感じが変わっている。って、じつちがモトネタか。歌詞は冒頭部分のみ「テイク・ミー・オア・リーヴ・ミー」と共通だけど、『RENT』が喧嘩別れするシーンになつていてのに対し、じちらではよりを戻す。……なんというか、マルチエロだらしないな。これがいわゆる「惚れた弱み」という奴なんだろ？

一番違う印象を残すのは、やっぱり最後の幕切れだらう。病氣で死にかけている割に『ラ・ボエーム』の///はよく喋るが、それはまあ置いておいて、『RENT』では///は死なず、最後にみんなで、「ノー・ディ・バット・トウデイ」を歌い上げて賑やかに終わる

る。一方『ラ・ボエーム』では、ミミは死んでしまい、ロドルフオが彼女の名を悲痛な声で呼んで、暗い音楽で幕切れとなる。

……うーん、俺はやっぱり『RENT』の方が好きだな。『ラ・ボエーム』はなんというか、話自体がすゝくあつさりしているとうか、シンプルな感じだ。その割に長いが、これは登場人物が同じことをずーっとだらだら歌つてるせいだろう。『RENT』の方が密度が濃くて、ぎゅっと濃縮されている感じがする。それに、『ラ・ボエーム』の幕切れは正直好みじやない。最後のカーテンコールを見ながら、そんなことを考えていた時だつた。

「どんだけ、こいつはヘタレなのよつー」

不意に姉貴が叫んだ。

「へタレって？」

「こおのロドルフオとかいう男よ！」

げつ、やばい。姉貴酔ってる。しかも悪酔い。普段は酔つてもケラケラ笑つてるだけで苦労しないんだけど、たまにこうなるんだよな……。オペラに集中してたせいで、姉貴の酒量にまで気を配つてなかつた。焼酎の瓶、空になつてゐるよ。

「なあにが『一番悪いのが僕の部屋の寒さなんだ』よ！ かつこつけちゃつてさ。どうせ同じ貧乏人なんだから、最後まで傍にいてやんなさいつてのー。バツカじやないの。そんなんだから、あんたは死ぬ時も彼女の手すら握つてあげられないのよ」

参つたな……こうなると姉貴は止まらないんだ。

「大体あんたに甲斐性つてもんがないからこうなるんでしようがつ

！ バイトの一つでもして薬代でも稼いできなさいつてのー。あれこれ言うのはそれからこしなつ！」

「あ～そうだね」

俺は適当に流しつつ、DVDをプレーヤーから取り出してケースに閉めた。このままにしておいて、姉貴に借り物のDVDを壊されても困る。

「だあいたいこの脚本もおかしいのよつー！ なんでわざわざムゼッ

タが『ミミは私と違つて天使のような女です。だからお救いください』なんて言い出すわけえ？自分の勝手な好みを押し付けてんじゃないわつ、どっちからけよつ！』

「それじゃ、俺はもう寝るから」

酔っ払った姉貴の相手をしてられる程、俺も暇じゃない。こういう時は放置しておくに限る。俺はDVDケースを抱えて、自分の部屋に戻った。

次の日の朝、俺が階下に下りていくと、姉貴が梅干を入れたほうじ茶を啜っていた。どうやら、派手な一日酔いになつたらしい。

「あ～、レン、おはよ～……」

「おはよ～、姉貴。一日酔い？」

姉貴はうなずいた。まだ顔が青い。

「私……昨日、何かした？」

「ひたすら大声でロドルフォの悪口言つてた」

姉貴はバツの悪そうな顔になった。

「ん～、なんか、あれ見てたら腹が立っちゃつて、気がついたらぐいぐいやつちやつてたのよね～。次の日は休みつてもあつたし」「そんな怒るようなもの？」

ロドルフォがヘタレというのに異論はないけど、そこまでヒートアップしなくともいいじゃないか。確かに、恋人が死ぬまでつきそつてた、『RENT』の『リンズと比べるとなんだかなあと思つけどさ。

「舞台に乗り込んでつて、あいつどついてやりたいと思つたわ」

そんなきつぱり言わなくとも。つーか、姉貴は本当にやりそうで怖い。

「レンはあれ見てどついたの？」

「『RENT』との共通点とか相違点とか、色々見えて興味深かつた

「あなた、本当に『RENT』好きねえ……」

「でもいいけど、『RENT』のロジヤーはもつとかつといいよな。もしかして、プッチーがこれ発表した当時は、ロドルフォみたいのがイケてる男だつたんだろうか。

……幾らなんでもそれはないな、うん。

「姉貴は、今日はどうする?」

「ん~、まだ頭痛いから家でゆっくりしてる。あなたは?」

「俺? 僕は映画でも見に行つてくるよ」

折角の日曜だし、天気もいいし、家でくすぶつて居るのはもつたいない。僕は冷蔵庫を開けて、昨日の残り物を取り出した。料理するのは面倒だから、朝飯はここついでいいや。

「姉貴も食べる?」

「いい……食欲無いから」

「わかつてんならそんなに飲まなきゃこいのに」

「うつさいわね」

姉貴は不機嫌そうにうつ言つた。これ以上刺激するとぶちきれるな。ここまでにしておづ。

## 芸術家の暮らし（後書き）

意外と、専門外の分野のことって気づかなかつたりするんですねよね。

最近はオペラといつても色々な演出がありますが、『ラ・ボエーム』に関しては、奇をてらつた演出というのは見たことがありません。

四回ぐらい見てますが、大体どれも同じような感じでした。

## 凍るか、燃え上がるか

月曜の朝、登校してきた俺は、学校の校門のところに、見覚えのある車が止まっているのに気づいた。あれは巡音さんのところのだ。見ていると、運転手さんが車から降りて後部座席のドアを開けた。車の中から巡音さんが出てくる。運転手さんは一礼して車に戻り、そのまま発進して行つた。巡音さんは、校舎に向けて歩き出す。

「おはよう、巡音さん」

俺は、その背中に向けて声をかけた。巡音さんが振り向く。

「あ……おはよう、鏡音君」

……なんだか元気が無いような？ もともと淡々と喋る子だけど、今日はいつもにも増して淡々としている。昨日夜更かしでもしたのかな。

「週末にあれ見たんだ。巡音さんが貸してくれた『ラ・ボーム』」  
俺はそこで言葉を止める。巡音さんが「どうだった？」と訊いてくると思つて。

「そうなんだ……」

えーと。想像してたのとは全然違つた反応が返つて來たので、さすがにちょっと困惑つ。

「姉貴が暇だつたらしくて一緒に見たんだけど、見ていたら姉貴が怒り出しちやつてすぐかつたよ。『このへタレ男』って、ロドルフオのことを怒鳴りまくつちやつて。うちの姉貴、感情の起伏が激しいもんだから。何もそんなに怒らなくともいいと思うんだけどさ」自分の感想よりも姉貴の反応の方がネタになりそつたので、こう振つてみる。驚くとか笑うとか呆れるとか、何か反応が出てこないかなと思つて。

「…………」

無反応だよ。……よく考えてみたら、俺は巡音さんに自分の家族構成のこと話をしたことがなかった。いきなり知らない人の話を出

それで困惑しているのかな。

「巡音さんはどう思つ?」

結局いつも訊いてみる。まあ幾らなんでも巡音さんは、姉貴みたいに怒り狂つたりはしないだろ? カズ。

「……お姉さんのこと?」

いや、姉貴のことじゃなくつて。つい、姉貴の話を出したのは俺の方か。

「そうじゃなくて、『ラ・ボエーム』のこと」

「プッチーニの代表作の一つよね。彼の作品の中では一番ロマンチックと言われていて、現代でも人気が高いわ」

あのひ……。何その「オペラ手引書」の説明文みたいな台詞……。

「俺が訊きたいの、そういうのじゃないんだけど」

巡音さんの返事は無い。……腹領を得ない会話で、たずがに俺もいろいろしてみた。

「だからまあ、巡音さんは『ラ・ボエーム』をどう思つてこるわけ?」

「…………」

何で黙るんだろう? 別にどんな反応が返つて来ても驚きやしないんだけど。何せ姉貴がああだったからなあ。巡音さんが姉貴と同じことを言つとは思えないし。

「何も評論家みたいなこと言わなくていいから。『こんな恋愛してみたい』とか『ミミよつとメゼッタの方がすてきだと思つ』とか、そんな単純なのでいいんだつてば。なんならうちの姉貴みたいに『ロドルフオのベタレ顔を洗つて出直してきやがれ』とかでもや。なんかないの?」

でも、巡音さんの返事はいつもだつた。

「別に……」

「巡音さんは自分の意見つてものがないの?」

思わず、俺はかなりきつい調子でそう言つてしまつた。言つた瞬間、巡音さんがはじかれたように顔をあげる。……やべつ。やつち

「……また。

「そんなこと……訊かないでよ……」

俺の見てる前で、巡音さんが自分の肩を抱いて、震えだした。様子がおかしい。

「……巡音さん？」

「それに……そんな言い方しないでっ！　言われても困るの！　わたしは……わたしあつ……！」

悲鳴みたいな声だった。俺は騒然として、巡音さんをみつめた。どうしちゃったんだ？　それに、ここは校門だよ。周りの視線が痛い。

「ちよっと巡音さん、落ち着いて」

俺は腕を伸ばして、巡音さんの肩を抑えた。まずは落ち着いてもらわないと。これじゃ話もできやしない。

巡音さんは目を見開いて、じつちを見ている。その身体がふりふりとよろめいて……。

「ガラスが……」

「巡音さん？　ちよっと、巡音さん！？」

俺は倒れかけた巡音さんの身体を咄嗟に支えた。げ……気を失っちゃってるよ。おまけに真っ青だ。そんなに具合が悪かったのか？  
まさしくことしちゃったな……。

「巡音さん、しっかりして」

軽くゆすってみると、目を覚まさない。そのままこはしておけないな。保健室に連れて行こう。

あの後、俺は通りかかった知り合いの手を借りて　幾らなんでも、氣絶した人間を担いで歩くのは無理だ　巡音さんを保健室に運び込んだ。

「先生、巡音さんはどうしちゃったんですか？」

校医の先生に俺は訊いてみた。

「貧血でしょうね。この年頃の女の子にはよくある」と云ふ

そう言つて先生はため息混じりに、ベッドの上の巡音さんへ視線を向けてた。

「ただでさえ最近は、雑誌とかの影響で過激なダイエットに走っちゃって、そのせいでひどい貧血を起こす子が増えているのよね……」

「ダイエットが必要そには見えませんけど……」

そもそも、ダイエットなんとしてるのか？ 初音さんの家で会つた時は、普通に食事してたけど。

「そういう子の方がダイエットに血眼になっちゃうのよ。全く、世の中の風潮にも困ったものね……」

……先生、何だか完全にダイエットのせいって決め付けちゃつてるけど、せめて本人の口からダイエットしてるかどうかを聞いてから、そう言つてくれませんか。

俺は気を失つている巡音さんを見た。血の気が無いせいか、ひどく弱々しく見える。

「ところであなた、そろそろ行かないと、授業が始まっちゃうわよ」正直言つとあんまり行きたくない。この状態の巡音さんを放つておくのは気が進まないし。

「……傍についてたら駄目ですか」

「あなたが残つていってもできるこことなんてないでしょ？」むしろ邪魔なんだから、早く行きなさい」

そこまできつぱり言わなくともいいじゃないか……。俺は恨めしげに先生を見たが、向こうは全然動じていなかつた。仕方ない。

「わかりました。行きます」

「わかればよろしい」

……なんかいろいろあるな。

結局、巡音さんは教室には戻つて来なかつた。俺は昼休みに保健室に行つてみたが、校医の先生に「早退した」と言われてしまった。

状態をしつこく詮索するとまたあれこれ言われそうだったので、そこで引き上げる。

その日、俺は結局授業にも部活にも集中できなかつた。らしくなりぞ、と、自分で自分に突つ込みを入れてみるが、事実なんだから仕方がない。

「……レン、お前、今日なんか変だぞ」

クオにまでそう言われてしまつた。

「なあ、クオ。あのわ……」

「なんだよ」

「……やっぱいいや」

幾らなんでも巡音さんのメールアドレスは知らないだろ？ 初音さんなら知つているだろ？ けど、そのためにクオに初音さんに連絡してもらうのもな……。

「言いかけたことは最後まで言えよ」

「大したことじやないからいい」

「気になるだろ」

俺はちょっと考えて、違うことを訊いてみることにした。

「クオ、お前、なんで恋愛映画嫌いなんだっけ？」

露骨にはあ？ という顔をされてしまった。多分「本当に大したことじやないな」とでも思つてているんだろ？

「だつて退屈じやないか」

「そんだけ？」

「なんかずーっとうだうだやつてるだけだろ、あれ。俺には理解できない世界なんだよ」

まあ、俺もそんなに面白いとは思わないけど。

「初音さんは好きそうなのに」

「ミクはな～、基本的に、可愛らしいもんが好きなんだよ。動物が出てくる映画とかも好きだぜ、あいつ。そっちならまだ見てられるんだけど、恋愛映画は、俺はバス」

クオの言葉を聞きながら、俺は巡音さんのことを考えていた。喋

るのが苦手なだけだと思つていただけれど、何かもつと別の問題を抱えているのかもしれない。

……つて、人のことをあれこれ詮索すんのもなあ。

「レン、どうしたんだ。またぼーっとして」

「ちょっと考え方」

「悩みがあるんだつたら聞くぜ」

「悩みつてほびじやない。ところでクオ、お前、ガラスつて言われて何連想する？」

「なんだよ、今度は連想クイズか？」

クオは思い切り呆れた顔になつたが、一応返事はしてくれた。

「ガラス……ガラスねえ。窓だろ、コップだろ、電球だろ……ぱつ」と思いつくのは「こんなといひか」

「うーん……」

確かにどれもガラスができるが……。なんか違うよな。なんで氣を失う前に巡音さん、ガラスつて咳いていたんだろう？

「ガラスの靴」

クオは突然、そんなことを言い出した。思わず顔をあげる。

「……へ？」

『『シンデレラ』だよ。ミクなら絶対そいつ言つね』

ああ、あれか。アニメにもなつてる有名なおとぎ話だ。それもなんか違うなあ……。そんな、ロマンチックな雰囲気じやない。じゃあ、ガラスつてどういう意味だ？

「うーん、そうじやないんだよな……」

考えたが、俺にはわからなかつた。

## 凍るか、燃え上がるか（後書き）

自分で書いておいて言つのもなんですが、この学校の校医の先生は頼りにならなそうです。

## ミクの苛立ち

月曜日、登校してきたわたしは、リンちゃんの席が空なのに気がついた。……いつも、わたしがより早く来るのになあ。お手洗いにも行つているのかな。

自分の席に座つて、わたしはぼんやりしていた。普段はリンちゃんをお喋りしている時間。ちょっと手もあがめた。

結局、始業のベルが鳴る時間になつても、リンちゃんは来なかつた。お休み？ 心配になつたわたしは、昼休みにリンちゃんにメールを送つた。ついでにクオに、お昼と一緒に食べないかともメールしておぐ。

リンちゃんからもクオからも、すぐに返事がきた。リンちゃんからは、「一度登校したんだけど、貧血で倒れて早退したの。連絡しなくて」「めんね」と。クオからは「いいぜ。中庭で待つてる」と。リンちゃんに「大丈夫？ 無理しちゃダメだからね」と返信してから、わたしは自分のお弁当と水筒を持って、中庭に向かつた。

クオはもう来つていて、ベンチの一つに座つていた。わたしは手を振つて、クオの方へと駆け寄り、隣に座つた。

「今日は振られたのか？」

それが、クオの第一声だつた。どうこう意味？

「振られたつて？」

「巡音さん。お前、いつも昼は一緒にだろ」

どうしてクオはいつもいらっしゃること言つのかしき。

「クオ、振られたつて言い方はないでしょ。リンちゃんはね、今日は学校休んでるの。具合が悪いんだって」

単なる体調不良ならいいけどね……リンちゃんのことば、色々と心配。プライバシーのこともあるし、クオに話すわけにはいかないけど。

クオは頷いて、お弁当箱を開けて箸をつけた。クオのお弁当箱、

いつ見ても大きいなあ。わたしのお弁当箱の倍くらいはある。なんでも  
あんなに食べられるんだろう。

「具合が悪いって、風邪か何か？」

「貧血だつて」

「それ、病気か？」

クオはそんなことを言い出した。わたしはクオの額を軽く叩いた。  
貧血を甘くみないでほしいわ。

「あのねえ、あれ、辛いんだからね」

「経験したことあるような口ぶりだな」

「わたしだつて、貧血になつたことぐらいあるわよ  
倒れるほどひどいのじやなかつたけど。

「血の氣多いのに？」

誰がよつ！

「もう、クオつてば！ 女の子はね、色々と大変なの」

クオつて、どうしてこうデリカシーないのかしらね？ 困つたも  
んだわ。

この日は、クオは部活があつたので、わたしは先に帰つた。演劇  
部の活動つて、結構長いのよね。一人で待つつても退屈だし。

今日は家庭教師の先生が来ない日。……でも、宿題出てたな。先  
にやつとこうつと。あ、わたしもクオも、家庭教師の先生に勉強を  
見てもうつてているの。やっぱり、学校の授業だけだと不十分だから  
ね。一体一で教えてもらう方が、効率はいいし。

宿題を終わらせたけど、クオはまだ帰つて来ない。わたしは居間  
のテレビをつけて、音楽チャンネルにあわせた。あ、最近いいなと  
思つた人が出てるわ。

テレビを見ていると、クオが帰つてきた。

「あ、クオ、お帰り」

「おう、ただいま

「ねえクオ、今ね……」

わたしは見ていた番組の内容について、クオに話し始めた。でも、そんなに話さないうちに、クオがわたしをさえぎった。

「ミク、ちょっとといいか?」

「何?」

「お前、ガラスって言われて何を連想する?」

クオは、突然そんなことを訊いてきた。いきなりどうしたのかしら。うーん、ガラスねえ……。

「ガラスの靴!」

やっぱこれでしょ。

「それって『シンデレラ』だよな」

「決まってるじゃない」

他に何があるというのよ。それにしても、クオったら、なんでいきなりこんなこと言い出したのかしら。……もしかして。

ねえ、クオ。憶えてる?

「もしかしてプレゼントの話?」

期待を込めてわたしはそう訊いてみた。でも、クオの返事は……。

「……なんでそうなるんだよ」

だつた。しかも心底呆れた表情で。……何よそれは!

「クオのバカ!」

わたしはそう叫んで、クオにクッショーンを投げつけた。ぼふつという音がする。そのままわたしは居間を飛び出すと、自分の部屋に駆け込んだ。部屋のドアを閉めると、机に駆け寄り、ジュエリーボックスを取り出す。わたしは箱の蓋を開けた。三段重ねのジュエリー・ボックスの、一番下の層の、区切られたスペース。そこに入っているものを取り出す。

金色のチーンの先に、ガラスの靴が下がったペンダント。子供のお小遣いで買えるお値段のものだから、安っぽい。でも。

あれはわたしが小学生の時だった。ガラスの靴が欲しいって言つたら、クオがお土産屋さんで買っててくれたの。すごく嬉しくて、

ずっと大切にするつて言った。

「……バカ」

なんで、くれた方は忘れてるのよ。言つてくれたらこれ見せて「今でも大事に持つてるのよ」って、言おうつて思つたのに。クオのバカバカ！

## //クの茆立ち（後書き）

…………」ねって、//クとクホ、どうすこ問題があるんだね!。

## 目覚める必要

「……何だこりゃ」

俺は思わず呟いていた。目の前にあるのは、巨大な茨の藪。そして、道はその茨の中に消えている。

「ここの先に行けってか？」

目の前の茨には、鋭い棘がびっしり生えている。こんなのに触ったら手がズタズタになりそうだ……そう思いながらも、俺は手で茨に触れてみた。……あれ。

茨はあっさりと崩れて消えた。なんなんだ、いつたい。まあいい、先に行こう。進んだ先には、石を積み上げて作った建物があった。扉を開けて中に入る。がらんとした部屋の中には祭壇のようなものがあつて、何かが乗っている。俺は祭壇に近づいた。

「……ガラスの棺？」

祭壇の上に乗っていたのは、透き通ったガラスの棺だった。当然中が透けて見える。棺の中には花が敷き詰められていて、誰かがその中に寝かされている。

「巡音さん？」

棺の中に入っていたのは、巡音さんだつた。目を閉じて、全く動かない。これ……死んでるってこと？

俺は重い棺の蓋を持ち上げると、中の巡音さんを助け起こした。あ、死んでるんじゃない。眠ってるだけみたいだ。

「巡音さん、起きて」

揺すつてみたが、巡音さんは目を覚まさない。

「巡音さん、巡音さんつてば」

……なんで起きないんだろう？俺は巡音さんを抱きかかえたまま、途方にくれた。あれ、ちょっと待て。このシチュエーションって、確か。

「……キスしろってことか！？」

昔話がなんかでこうこう話なかつたつ。お姫様が死人みたいに眠つていて、王子様がキスすると田を覚ますつて奴。あれをやれつてか!? いくらなんでも意識の無い女子の子に勝手にキスできるかっ!

「巡音さん、起きてくれ」

頬を軽く叩いてみたり、強く搖わぶつてみたりするが、やつぱり目を覚まさない。俺は額を押された。……やるしかなか。

「…………」

一応詫びを入れておいてから もつとも、向こひは眠つてゐるんだけど 、俺は、巡音さんの唇に自分のそれを押し付けた。唇を離してから、しばりくして。巡音さんは、田を開けた。「キスする」が正解だつたのか……。巡音さんは、田を見開いてこっちをじつと見ている。や、罪悪感が……。

「えーと……今のは起こすためにやつたんであつて、別に変な氣を起こしたわけじゃないから……その……」

「どうして……?」

「うわ……今にも泣き出しそうだ。まよい。非常にまよい。

「いやだから、起こすためだつてば」

「どうして、わたしが起こしたの? ずっと眠つていたかったのに」

「え?」

予想外のことを訊かれて、俺は返事に詰まった。

「気がつくと、田覚まし時計がやかましい音を立てて鳴り響いていた。……ひめせい。起き上がりつて、田覚ましを止める。

あ……今のは夢だつたのか。そりやそつだよな。あれが現実だつたりしたら困るよ。しかし、何て夢だ。誰かに話したら笑われるのは確実じゃないか。なんであんな夢、見たんだりつ。

寝起きで半分ぼーっとした頭のまま、俺は洗面所に行って顔を洗つた。……ちよつとはさつぱりしたな。居間に行くと、姉貴が朝食

を食べていた。

「おはよっ」

「おはよっ。……レン、昨夜夜更かしでもした？ 起きたばかりにしては疲れてるみたいだけど」

「なんか……夢見が悪くて……」

答えながら、俺は冷蔵庫を開けた。ハムが入ってる。ハムエッグでも作るか。ハムと卵を取り出し、フライパンを火にかける。「夢ねえ……殺人鬼にでも追いかけられた？ それとも、誰か刺した？」

なんで姉貴の例えつて殺伐としてるんだろう。そんなことを考えながら、俺はトースターに食パンを入れた。

「そういうのじゃないよ」

「じゃ、家が火事にでもなった？ あ、でも、火事の夢つて縁起がいいのよね、確か」

姉貴、その手の迷信は信じてないんじゃなかつたつけ。

「違うつて。別にいいだろ、夢の話なんて」

あんな夢、話せるかい。一ヶ月はネタにされるに決まってる。あ、卵が焼けた。皿に移す。トーストとハムエッグと牛乳の朝食を支度すると、俺は姉貴の差し向かいに座った。

「……あ、わかった」

「何が」

「レン、正直に答えなさい。エッチな夢見たんでしょ？」

牛乳を飲んでいた俺は、思い切りむせた。いきなり何言い出さんだよ、姉貴っ！

「うわ……その反応。図星だったのね」

「違うよっ！」

キスはしたけど、断じてそういう夢じゃないってば！

「別に恥ずかしがらなくてもいいわよ。そのくらいの年齢だったら、むしろ当たり前だってば」

「だから違うって

「あ～はいはい、そういうことにしておいてあげるわ

姉貴はにやにや笑いながらそう言った。……完全に誤解されているよ。全くもう。これ以上否定しても、姉貴は益々そうだと思つただろうな。話を変えよう。

「ところで姉貴」

「何？」

「眠ってるお姫様を王子様が起こす昔話って、何だったつけ

小さい時に絵本かアニメでの手の話を見た記憶はあるんだが、タイトルが出てこない。姉貴は一応女だし、お姫様が出てくる昔話には、俺より詳しいだろう。

「何よ急に

「いいから教えてくれよ」

「『眠り姫』？ それとも『白雪姫』？」

そう訊き返してくる姉貴。「一つもあるの？

「どう違つんだっけ？」

『『眠り姫』』は、出産のお祝いに招かれなかつた妖精が怒つて、お姫様が十五になつた年に死ぬ呪いをかけるんだけど、別の妖精が呪いを弱めて、百年眠るだけにしてくれる。十五の年に眠りについたお姫様は、茨に取り囲まれたお城で百年間眠り続けて、百年目に王子様がお城を訪れて、お姫様にキスすると呪いが解けて眠りから目覚めるのよ。

『白雪姫』は、継母に美貌を疎まれたお姫様が捨てられて、七人の小人と一緒に暮らすんだけど、しつこい継母が白雪姫に毒の入ったリンゴを食べさせて殺そうとする。でも白雪姫は死んだんじゃなくて仮死状態になつただけで、ガラスの棺に入れて置いておかれて、そこへ王子様が通りかかって、白雪姫を目覚めさせてあげるのね「……混ざつてゐるな、さつきの夢。茨とガラスの棺の両方がでてきたぞ。巡音さんが『ガラス』なんて言つたからだろうか。

「まあこれは有名なパターンで、更に細かいバリジョン違いがあちこちに散らばつてゐるんだけどね～。例えば『眠り姫』だと、グリ

「童話に収録されている『いばら姫』っていうのが一番有名で、今喋ったのがそう。ペロー童話の『眠れる森の美女』だと、前半はほとんど一緒に緒なんだけど、えぐい後半が続いていたりする」

「えぐい後半って？」

「ん~確かに、王子の母親がイカれてて、王子が留守にしている間に、お姫様と王子の間にできた子供やお姫様を食べようとするのよ」「なんだそりや。そんな危ない母親持つて、王子大丈夫なのか？」

「血の繋がった孫を食うつて……」

「料理人が気を利かせてかくまつから、実際に食べられはしないんだけどね。昔話って、結構子供を食べる話があるのよね。中には実の息子を両親が殺して食べる話もあるつていうし」

「さらつと言わないでくれよ。

「それにしてもあんた、なんで朝から昔話の」となんか訊くのよ?」「……いや別に。なんとなく」

「もしかして、夢に眠っているお姫様でもてきたの?」

「俺はもう一度、盛大に咳き込む羽田になつた。

「あ……これまた図星か」

「いやだから……」

否定しようとして、俺は「夢に眠っているお姫様がでてきた」は事実だということに思い当たつた。お姫様っていうか、巡音さんだけ。そう言えば、夢の中ではドレスを着ていたような。

「ずいぶんとメルヘンな夢ねえ。で、あんたはお姫様が眠っているのをいいことに、着てるものを脱がせたわけか」

「……なんでそこまで話が飛躍するわけ?」

「キスしかしてないってのに……。姉貴は俺のことをなんだと思ってるんだ。

「夢見が悪かった、って言つたつてことは、あまりいい夢じゃなかつたつてことでしょ。だから、眠っているお姫様をみつけて、着ているものを脱がせて、いざ本番つてといひで田が覚めちゃつたのかなど」

微妙な年齢の弟の前で、そんな生々しい話は止めてくれ。

「違うって。っていうか、姉貴こそ、どうしてそういう発想になるんだよ。そつちこそこそ欲求不満なんじゃないの」

「実際にあるのよ。眠っているお姫様に王子様が襲いかかって、妊娠させちゃう昔話が」

昔の人の考えることはよくわからん。それじゃあ王子は犯罪者じゃないか。

「犯罪だろ、それ。どう考へても」

「そうしないとお姫様が起きないから仕方がないのよ。まー私も、こんな変態王子には、蹴りでも叩き込んでやりたいとは思つたけどね」

妊娠と田覚めにござつて因果関係があるんだ? あ…… そう言え  
ば。

「お姫様は、起きなくちゃいけないわけ?」

夢の中で巡音さんは「ずっと眠つていたかった」と言つていた。  
現実の巡音さんは「さう言われたわけじゃないけど、何だか引っかかる。

「は?」

「ずっと眠つていていたいとか思つたりしないのかな?」

俺がそう言つと、姉貴は呆れた表情になつた。

「あのねえ。ずっと眠つてることは、何も見えないし、何も聞こえない。美味しいものだつて食べられないし、すてきな人に会つて胸をときめかせることもないつてこと。そんなの、死んでるのと同じよ」

死んでると同じ、か……。

「レン、といろで」

「何?」

「考え込むのもいいけど、あんた、時間は?」

いけね。姉貴との話に没頭していく、時間のことを忘れていた。  
急がないといつもの電車、逃がしちまつ。俺は慌てて朝食の残りを

片付けると、  
席を立つた。

## 田覚める必要（後書き）

めーちゃんのシックニギがいろんな意味で容赦無かつたよ'うな。

作中で言及している「王子様がお姫様に襲い掛かる」昔話は実際に存在します。こちらのサイトに掲載されている「太陽と月とターリア」という話です。こんなのがくつづいて幸せになれるんだろうか……？（そう思っちゃう昔話って、結構多かつたりするのですが）  
<http://suwa3.web.fc2.com/enkan/minwa/sleeping/00.html>

このサイトには色々な昔話が掲載されていますが、これを見た感じだと「キスで田覚める」というパターンは意外と少なくて、実際のところは「眠らせている原因を取り除いてやる」と田が覚める、というパターンがほとんどなんですね。やっぱりアニメの影響が大きいんだろうなあ。

## 雪の中で咲くさくらの花

何とか電車には間に合ひ、遅刻もせずに済んだ。ああ良かつたと思ひながら教室に入る。……あ。

巡音さん、今日は来ているんだ。自分の席で、今日も本を読んでいる。もう大丈夫なんだろうか。

「おはよう、巡音さん」

声をかけると、向こうは驚いた表情でこっちを見た。弾みでぱたんと本が机の上に落ちる。……ガルシンの短編集ね。

「……おはよう、鏡音君」

そう言つて、巡音さんは視線を落とした。否応無しに今朝の夢が思い出されるが、俺は必死でそれを頭から追い払つた。夢の話なんかされても巡音さんが困るだらう。ましてやあの内容ぢや……。

「貧血は、もう大丈夫なの？」

「……ええ、もう平氣」

相変わらず下を向いていい。口に向いてくれないかな。

「この前は……その……『めんなさい』

謝られてしまった。

「あ～、気にしてないからこゝよ」

俺の方が、具合の悪かつた巡音さんを追々詰めのちやつたみたいだし。

「でも……」

巡音さんは困った表情で、やう咳いでいる。放つとくと堂々通りになるな。ここは……あ、でも、そろそろ先生が来る時間だ。

「それより巡音さん、今日、時間空いてる？」

「え？」

「良かつたら、放課後、ちょっと話せないかな」

今日は部活は無いから、俺の方は時間が取れる。こんな朝のあわただしい時間よりも、放課後の方が話がしやすそうだ。

「話すつて……何を？」

訊き返されてしまった。

「大したことじやないんだけど、巡音さんに訊きたいことがあって」

「……わたしに？」

「そう」

俺は頷いた。巡音さんは、相変わらず困ったような表情で、落ち着きなく視線を動かしている。悩んでいるみたいだ。

しばらくして、巡音さんは、こう口にした。

「多分、大丈夫だと思つ……」

「それ、いいつてこと？」

巡音さんは頷いた。えーと、じゃ、後はどこので話すかだ。人がうわうわしているようなところだと、落ちついて話せないだらうし……。

「じゃあ、放課後、屋上に来てくれる？」

あそこだつたらあんまり人は来ないはずだ。巡音さんが頷いたので、俺は自分の席へと戻つた。

うちの学校の屋上は、何故か鍵がかかっていなかつたりする。俺は一年の時、ふつと思いついて屋上へ続く階段を上がり、扉の取つ手を軽い気持ちで回したら、開いてしまつたのでひどく驚いた。それ以来、休みの時間なんかにたまに来てみたりするが、あれ以来、ずーっと開きっぱなしだ。無用心といえば無用心だが、俺がわざわざ注進することもないしな。なんでそんなこと知つてるんだとか、言われたら嫌だし。

もつとも、ほとんどの人は屋上といつのは上がれないものだと思っているらしく、ここはいつも來ても誰もいない。まあそんなわけで、巡音さんと話をする場所をここにしたんだ。

屋上に来てみると、巡音さんはまだ來ていなかつた。さつき、教室内で初音さんと話していたつて。もうちょっとしたら来るだろう。

俺は屋上のフェンスにもたれて、空を眺めた。いい天氣だ。

そんなにしないうちこ、扉が開く音がした。巡音さんだ。ちょっと

と辺りを見回してから、一いつ矢しだけしてくれる。

「鏡音君、話つて、何？」

俺としては色々訊きたいことはあるんだが、どうこう順番で話をもんかな……。一応考えといったはずなんだが、本人を前にすると出てこない。

「あ、えーと……」

俺は鞄を開けて、中から巡音さんが貸してくれた『ラ・ボエーム』のDVDを取り出した。

「まずはこれ、返しとくよ。どうもありがとう

巡音さんはDVDを受け取ると、自分の鞄に入れている。うつむいているので、表情はよく見えない。

「あの……巡音さん、一日前のことなんだけど

俺はやつぱり、気になっていることを訊いてみることにした。

「巡音さん、倒れる前に『ガラス』って言つてたけど、何のことだったの？」

巡音さんは顔を上げると、怪訝そうな表情になつた。

「わたし……そんなこと言つた？」

俺は巡音さんの顔を見た。とぼけているとか、嘘をついているわけじやなさそうだ。

「少なくとも俺にはそう聞こえたけど

巡音さんは考え込む表情になつて、それから首を横に振つた。

「『めんなさい……憶えてないわ』

貧血でふらついていた時だから、憶えてなくとも仕方がないかなあ。こだわった俺がバカみたいだけど、人間たまにはバカもやるさ。巡音さんは何か考えるような表情で、フェンス越しに外を見ている。

「ガラスって、透き通つているから外が見えるのよね。だから、ガラスの中に閉じ込められたら、すごく苦しいと思つ。外は自由に見

えるのに、自分は動けないから」

不意に、巡音さんはそんなことを言い出した。一瞬、曇つてガラスもあるよと言ったが、俺は口をつぐんだ。今は、茶化していく時じゃない。

ガラスの中か……今朝の夢で、巡音さんはガラスの棺に入っていた。

「その状態だと、眠っている方が楽だと思つ?」

巡音さんは、俺の言ったことに驚いたみたいだつた。ちょっと唐突すぎたかなあ。

「……多分、ね。眠つていれば、外は見えないから」

「何も見えないし、何も感じないんじやない?」

つて、姉貴は言つてたよな。そしてそれは死んでいるのと同じだつて。

「だから楽なのよ。見えるけれど動けないのとは違うから」

「でもそれだと、死んでいるのと一緒になんじやない?」

言いたいことはわからなくもないが……。

「……一緒に」

巡音さんは淡々とそう言つた。表情も無表情に近い。

俺が言つのもなんだけど、起きた方がいいと思つた。眠りっぱなしより。

あ、でも……。

考えてみたら、初めて、まともに巡音さん自身の意見といつものを聞いた気がする。

「ちょっとほつとした」

「…………え?」

「巡音さんの考えてること、初めてちゃんと聞いたから」

「何も考えてないわけじゃないんだ」

「どうして鏡音君がそんなことを気にするの?」

巡音さんの質問。どうしてって……なんだか、放つておけない気がするんだよ。でも、それをそのまま言つのもあれだしなあ。

「単なる好奇心だよ」

巡音さんは、また困ったような表情をしている。

「あ……それと」

俺は鞄から、もう一枚のDVDを取り出した。『ヨーロッパ・RENT』のDVDだ。

「良かつたら、これ、見てみない？ 残念ながら映画版だけだ」  
舞台版のDVDは出でていない（注）映画は曲が幾つかカットされたり、シーンが変更されたりしてて、話が多少わかりづらくなっているから、できれば舞台の方が良かつたんだが……こればかりは仕方がない。

巡音さんはDVDを受け取って眺めている。

「これ……鏡音君がこの前聞いていた曲の『ヨーロッパ・ボーグム』が原案の

「そうだよ」

巡音さんはもう一度、DVDに視線を落とした。そのまま、何やら考え込んでいる。……あれ？ なんか、変な表情してるけど、どうしたんだろう。

「……巡音さん？」

俺が声をかけると、巡音さんははつとこっちを見た。……何だろう。何かに怯えているみたいに見えるけど……。興味ないけど、それを直接口に出したら俺が怒るとも思つてゐんだろうが。そこまで了見狭く無いよ。

「こいつのには興味ない？」

「そうじゃなくて……」

視線が動いている。言いくることがあるみたいだ。

「言いたいことあるならはつきり言つてくれていいよ」

巡音さんはまだしばらく迷っていたが、やがて、意を決したように口を開いた。

「あのね……わたしとしては、これ、とても見てみたいんだけど……

……

だから貸してあげるつて。だが巡音さんが言に出したのは、意外なことだった。

「わたしの家……！」の手のもの、全部禁止なの……」

え？

「……全部つて？」

思わず訊き返す。

「漫画とか、アニメとか、ゲームとか……最近の音楽とか……」  
巡音さんは伏し顔がちに、小さな声でそう言つた。ちゅうと待て。  
何だその滅茶苦茶な禁止令は。じゃあ、巡音さんは普段どうしているんだ？

「えーっと……それ全部禁止なの？ 何か条件つこいとかじやなくて、最初から全部？」

一応確認。巡音さんは頷いた。……信じられない。

そりゃ俺だって「勉強するまでゲームはダメ！」とか言われたことなら、数え切れないぐらいある。でもそれはあくまで「勉強するまで」であって、やるこころをやつておけば、漫画を読むのもゲームをやめるのも自由だ。そのものを禁止される」とはすぐには無い。「そういうものは、悪影響があるつて……」

ゲーム脳がどつたら、とか変な理由になれる学者の本でも読んでるんだろうか。

「俺の本音を正直に言わせてもらつて、巡音さんの親つて、厳しくなるといつか、むしろ変だと思つ」

あ、結構きつい調子になってしまった。巡音さんが、視線を伏せてしまつ。参つたな。傷つけてしまつただらうか。

「…………やつぱりそう思つ？」

あれ。予想したのと違つ反応が来ただ。

「やつぱりつて？」

「わたしも……その、変じやないかとは思つたんだけど……。」  
クちゃんの家は、どれも禁止じゃないし……あまり話したことないけど、他の人もそうみたいだし……でも、ミクちゃんの家はミクち

やんの家だから……」「

「要するに、これが我が家ルールなんだからそれに従つてろつて、  
そう、言われているわけ？」

訊いてみると、巡音さんはまた頷いた。道理でいつもクラシックばかり聞いてたり、固い本ばかり読んでたりするわけだ。クラシックが好きだから、文学作品が好きだから、つてわけじゃなくて、それしか駄目だからか。しかし、巡音さんの親つてのも、よくわからぬ。巡音さんが今朝読んでたの、ガルシンの短編集だったぞ。あの作家、確か精神病院に出たり入ったりを繰り返したあげく、三十ちょいで自殺してるんだが……。正直、精神が不安定な時に読む本じゃないと思う。

「そういうわけだから……わたし、これ、借りて帰るわけにはいかないの。もし見つかったら、鏡音君にも迷惑がかかるし」

「迷惑つて？」

「…………わたしがまだ小さかった頃の話なんだけど、ミクちゃんに漫画を貸してもらつたことがあるの。そうしたら、それが見つかってお父さん、ひどく怒つて。ミクちゃんの家に電話をかけて……ひたすら苦情を……」

「これは巡音さん」と、口には悪い出したくない思い出なのか、話すにつれて、どんどん声のトーンが下がつていった。つてちょっと待てよ。そこまでやるのか、巡音さんの家。

# 「確か 小学校の一年生」

会つたことのない相手のことをどういふ言つのもなんだが、巡音さんの親つて、相当イカれているんじゃないだろうか。

しかし、さがると、これを貰うのは無理だから……。  
うーん、何か打開策は……。  
投げ戻すかい？

視聴覚教室には、再生機材があつたな。でも、生徒だけじゃ使わ

せてもらえないだらうし……。初音さんの家は……幾らなんでもこんなこと頼むのは、図々しそうぎるよなあ。

「あのわ……巡音さん。だつたら、いつそ俺の家に来る?」

結局俺が出した結論はこれだつた。幸い、我が家ならやかましいことを言つ人はいない。……姉貴にからかわれるかもしれないけど。「家つて……」

「うう言われたことがよほど意外だったのか、巡音さんは目を見開いていい。

「だから、俺の家。友達連れてきてどううう言われるような、うるさい家じゃないから。クオはよく遊びに来てるよ」

ここで俺は一つ、問題点に気づいた。俺の家には親がいない。つまり、下手をすると俺の家で、俺と巡音さんが一人つきりになってしまつわけで……。

……姉貴に頼んで、当口は家にいてもらおう。留守中に女の子と二人つきり、なんてことが後でバレたら、色々とややこしいことになる。やましいことが何もなかつたにしても。痛くもない腹を探られるのはごめんだ。

巡音さんは考え込んでしまつた。せかしてもじょうがなさそうなので、俺は巡音さんが結論を出すのを、黙つて待つことにした。  
……断られるかもしれないな。それはそれで仕方がないか。

しばらくして、巡音さんが顔をあげた。結論が出たらしく。

「……本当にいいの?」

「えーっと、これは、OKつてことだよな。

「来るつてこと?」

巡音さんはおずおずと頷いた。

「……日曜なら、なんとか、家を抜け出せると思つから……」

「日曜ね。姉貴に確認取つとかないと。」

「鏡音君の家つて、どこにあるの?」

俺は手帳を取り出して、自宅の住所と最寄駅、電話番号、それから俺の携帯の番号とメールアドレスを書いた。それからそのページ

を破つて、巡音さんに渡す。

「俺の家、ちょっとわかりにくいくらいにあるから、駅に着いたら電話して。迎えに行くから」

「……………ありがと」

「ついでに巡音さんの携帯の番号とアドレスも教えてもらえない? もしうちに不都合があつたら、連絡しないといけないから」

そう言つと、巡音さんはまた困った表情になつた。「えーと、もしやこれつて……」

「あの……教えるのはいいけど、なるべくかけないでもらえる?」「どうして?」

想像はついたが、一応訊いてみる。

「お父さん、わたしの携帯を調べる」とがあるから……見慣れないアドレスがあつたら、多分問い合わせると思つの」

巡音さんの親は、娘の一拳手一投足を監視しないと気が済まないんだらつか……。どんな親だよ。

「だから、教えてくれたのは嬉しいけれど、わたしの方から携帯とかにかけることは、多分ないと思つの……」「めんなさい」

いや、巡音さんが謝ることじやないと思つ。

巡音さんが自分の携帯番号とメールアドレスを紙に書いて渡してくれた。そんな事情があるんじやかける」とはあまりなさうだけど、一応自分の携帯に登録しておこう。

「それじゃあ、日曜日に」

「ええ……ありがと」

そうして、俺は巡音さんと別れて帰宅した。

(注)『RE:ZERO』は、現在、舞台版のDVDが発売されていますが、話の都合上、この作品の時間軸を「舞台版のDVDが発売される前」と「いつ」としてこまく

都合は……大したことじやないんですが、舞台版のDVDが発売されるちょっと前に、オペラ映画の『ラ・ボエーム』が公開されているんですね。DVDを貸してもらわなくとも、これを見に行けばいいじゃん！ となってしまったので、この話の時間軸は「映画版『RENT』公開後」～「映画版『ラ・ボエーム』公開前」ということになります。

この次はレンの家訪問記になるわけですが……話の構想のまとめ方で少々悩み中です。それに長くなりそう……。更に章タイトルが浮かばない……と、考えなくてはならないことが多いのでした。与太話ですみません。

## 来て一緒に歩け

巡音さんと話をしたその日の夜、俺は姉貴に日曜の予定について訊いてみた。

「日曜？ 出かける用事も無いし、家にいるつもりだけど」「それが、姉貴の返事だった。

「じゃ、その日は家にいるんだ。俺、日曜に学校の友達を家に呼ぼうと思つて」

「邪魔だから出かけてほしつつのこと？」

「逆。家にいてくれ」

俺がそう言つと、姉貴は怪訝そうな表情になつた。

「私がいない方が、気楽でいいんじゃないの？」

呼ぶのがクオならね。でも、巡音さんだもんな。

「その子、女の子だから。俺と一人つきりはまずいよ」

「女の子かあ。確かに二人きりは、まずいわね。……もしかして、新しい彼女？」

姉貴はそんなことを言つてきた。なんですかそういう発想になるんだよ。

「……ただの友達だよ。一緒に『RENT』を見よつひとつ話になつて」

姉貴は、今度は呆れた表情になつた。

「要するに布教活動の一環つてこと？」

布教つて……もうちょっとと言葉はないんだろうつか。

「『ラ・ボーム』を貸してくれた子なんだよ。『RENT』を見せるのはそのお礼。とにかくつーそういうわけだから、日曜は家にいてくれよ」

「いいわよ。どうせ家にいる予定だし」

姉貴のにやにや笑いが気になつたが、俺はそこで話を切り上げた。下手すると質問責めにされそだつたし。

つて、どのみち、日曜に巡音さんが来たら、やっぱり質問責めにされるんだろうなあ……仕方ないか。

日曜日。電話を受けて駅へ出向くと、巡音さんは見るからに緊張した様子で俺を待っていた。何もそんなに……と思ったが、この前聞いた話からすると、ろくに外に出たこともないのかも知れない。

「巡音さん」

声をかけると、向こうはほつとした様子だった。

「あ……鏡音君」

「大丈夫だった？」

「……なんとか。親に嘘ついちゃったけど」

巡音さんはそう言つて、視線を落とした。……嘘つかないと出でこれないわけか。

「俺の家、こっちだから。ついてきて」

俺は巡音さんを連れて、自分の家に向かった。距離はそんなに無いんだけど、ちょっと道がややこしい。巡音さんの話を聞く限り、一人で歩かせたら迷子になるのはほぼ確実だろう。

ちゃんと後を着いて来てくれているかを確認しながら、道を歩く。まだ緊張しているのか、周りを見ている余裕もないみたいだ。

「着いたよ」

鍵を開けると、俺は巡音さんが中に入れるよう、ドアを支えた。巡音さんが、「お邪魔します」と言つて、家中に入る。続いて俺も入り、鍵をかける。

「姉貴～、帰ったよ！」

奥に向かつてそう呼ぶと、姉貴が出てきた。

「レン、お帰り。そちらがお友達？」

他の人がいると、姉貴、普段と言葉遣いが微妙に違うんだよな。

「そうだよ」

「初めてまして、レンの姉のマイコです

姉貴はそう言つて頭を下げる。

「は……初めて。巡音リンです。鏡音君とは同じクラスです」  
思い切り緊張した声でそう言つて、巡音さんが姉貴に頭を下げて  
いる。

「……巡音？」

姉貴、え？ とでも言いたげだな。どうしたんだ。

「そうです……どうかしましたか？」

「昔の知り合いに同じ名字の人がいたから……もしかして、親戚か  
何か？ 巡音ハクって、いうんだけど……」

今度は巡音さんの方が驚いた表情になつた。

「姉を」存知なんですか？」

「へつ？ 今、巡音さん、姉つて言つたよな。姉貴、巡音さんのお

姉さんを知つてたわけ？ 淫い偶然だ。

「え、姉つてことは、あなた、ハクちゃんの妹なの？」

「あ……はい」

「やだ、嘘、信じられない。世間つて狭いのねえ。まさか弟が、ハ  
クちゃんの妹と同じクラスとは」

なんか妙に一人だけで盛り上がつてるな。巡音さんは微妙に引いてる。姉貴に怯えてるんじゃないといいけど。

「姉貴、巡音さんのお姉さんを知つてたの？」

「高校の時の部活の後輩なのよ。卒業してからずっと会つてないん  
だけど。懐かしいな。ハクちゃんはどう？ 元気にしてる？」  
「へーえ。姉貴は高校時代、バドミントン部だった。てことは、巡  
音さんのお姉さんもバドミントンやってたのか。

「つて、あれ？ 巡音さん引きつってる。

「あ……えーと、その……」

「どうやら、訊かれたくないことだつたらしい。困つてるわ。

「姉貴、お姉さんを玄関に立たせっぱなしにしていくの？」

俺がそう言つと、姉貴ははつとした表情になつた。

「ああ、『めん』めん。た、あがつてちょうどいい」

姉貴が脇にどいたので、巡音さんはもう一度「お邪魔します」と

言つて、靴を脱いだ。あがつてから、その靴をちゃんと揃えている。

「俺たちは予定どおり『RENT』を見るから、姉貴、邪魔しないでくれよ」

「はいはい、わかつたわ。じゃ、私は自分の部屋にいるから、用があつたら呼んでちょうだい。それと、お姫さんには失礼のないようにな」

姉貴はそう言うと、二階へと上がつていった。あ～、毎度のことながら疲れる姉貴だ。なんでいつも一言多いんだよ。

「巡音さん、こっち」

俺は巡音さんを連れて、テレビの置いてある居間へと入つた。

「適当に座つてて。今、お茶を淹れるから」

巡音さんが座つたのを確認して、俺はお茶を淹れに台所へと向かつた。

「緑茶でいい？」

「あ……うん」

普段あまり使わない来客用の急須と茶碗を取り出して、お茶を淹れる。お茶の入った茶碗を盆に乗せて、俺は居間へと戻つた。

戻つてみると、巡音さんは、居間のサイドボードの上の家族写真を見ていた。俺が小学校の時に撮つた奴。……家族全員が揃つている、最後の写真だ。

「どうぞ」

俺はそう言って、巡音さんの前にお茶を置いた。

「……ありがと」

【写真をまだ気にしてるみたいだ。何か引っかかることがあるんだろうか。

「俺と姉貴と両親と、前に飼つてた犬。確か、旅行に出かけた先で撮つてもらつたんだ」

「犬を飼つてたの？」

「ああ。去年死んじやつたけど」

あれ以来、犬を飼う気が起きない。

「巡音さんとこは、ペシトとかは？」

訊いてみると、巡音さんは暗い表情で首を横に振った。……ペシトも禁止かよ。

「あの……そいつれば、鏡音君のお父さんとお母さんは？ 家にいないの？」

あ、そういうや巡音さんには、うちの事情を説明してなかつた。今日は田曜だから、普通の家なら両親がいるよな。

「…………今、どっちもいないんだよ。あの写真を撮つたりよつと後に、父親が交通事故で亡くなつて……」

俺の言葉に巡音さんがショックを受けた表情になる。いや、そんな構えなくても。……ハードな話だから仕方ないか。俺も吹つ切るまでかなりかかつたし。

「…………それは…………」めんなさい。わたし、そんなことだとは思わなくて……」

巡音さんはうつむいて、聞き取れないぐらこの小さな声でさう言った。

「あんまり気にしないでくれ。実は……構えられるとこひが辛くて。で、話戻すけど、そういうわけで、俺のところは母子家庭なんだ。で、母親の方は、去年から仕事で海外に行つてて、この家は実質上、俺と姉貴の一人暮らし。あ、夏と冬の休みの期間には、母さんも戻つてくるけど」

巡音さんは黙つてしまつた。……状況が重い。気分を変えよう。うつぽいのは苦手だ。

「EJの話せりふまでにして、『RUMBLE』を見よつか」

## 来て一緒に歩け（後書き）

ルカ二十四、めーちゃん二十三、ハク二十一という年齢設定です。（めーちゃんとルカさんはバースティーがまだ来ていないので実際に生まれづつ下です）あれ、ハクって誕生日設定あるんでしたっけ……。

## あるのはただ、今日といひ田

『RENT』が始まると、巡音さんは真剣な表情で、画面に見入っていた。実を語つとちょっとばかり、巡音さんには刺激が強すぎるんじゃないかなあと心配していたんだが 何せドラッグやエイズや同性愛が題材の作品だ 杞憂だつたらしい。

『RENT』が終了した後、巡音さんは黙つて画面を見ていた。集中すぎて気が抜けたらしい。……こいついう時は、そつとしておこう。俺は立ち上がって、お茶のお代わりを淹れに行くことにした。……全部最初にこつちに持つてきておけば良かつたかなあ。今更そんなことを考へても仕方ないか。俺は急須にお湯を入れて、居間へと戻つた。

新しくお茶を入れた茶碗を田の前に置くと、巡音さんははつとした表情になつて、こつちを見た。

「……ありがと」  
「どういたしまして。で、どうだつた? 『RENT』」  
訊いてみると、巡音さんは考え込む表情になつた。  
「その……すゞぐ、力強い作品なのね」  
あ、巡音さんもさう思つたんだ。  
「そう思つ?」

「ええ」

『RENT』は、エネルギーに満ちた作品だと、俺は思つ。ラーンの最初の大掛かりな作品だから、ラーソンはこの作品に、ありつたけのエネルギーを詰め込んだんだろう。そのせいで、寿命が縮まつたのかもしれないけど。

「『ラ・ボーム』とは、同じようで全然違うから、ひょつと驚いたけど」

確かにさうとも言えるなあ。話の流れは基本的に一緒になんだけれど。

「『ラ・ボエーム』は恋愛だけに話を集中させていた感じがするけど、『RENT』では、生きていくことに焦点が当たってるから」

俺がそう言うと、巡音さんはまた考え込む表情になつた。

「でも、今日だけをみつめて生きて行くっていうのは、何だか悲しい感じがするわ」

「そうかな？」

それだけ、ラーソンが生きていくことに前向きだったんだと思うけど。

「だつて、過去も未来も見なくて、ただ、ここにある今だけを見つめて生きるんでしょう？ そうやって刹那の生に意識を集中させてしまえば、過去のことも未来のことも、思い煩うことはないわ。でも、そうしないと生きていけないっていう、その事実 자체が辛い気がするの。そうやつても結局、日々は過ぎて行くんだもの。積み重なつてできた過去という時間を、全部見ないようにしちゃつていいの？ 無かつたことにできるの？ その人を形作るのが、過去なんじゃない？ それを忘れて生きられるものなの？ 未来だつてそういう見えないようにしたって、いつかは来てしまうわ」

巡音さんがこんなに喋つたのつて初めて聞いた気がする。……それはさておき、俺は、巡音さんに言われたことを考えてみた。言いたいことはわからぬもないが……。

「確かにそういう側面もあるんだろうけど……ロジャーも//モモイズだし、ああいう『死が田の前にぶら下がっている』状態だと、それこそ、今、巡音さんが言ったように、その日一日一日だけに、意識を集中させていかないと辛いのかも」

自分の人生が終わる音が、聞こえてくるよつなもんぢつし。でも、それだけじゃないとと思う。

「でも、ローン あ、このミュージカルを作った人なんだけどが考えていたことは、それだけじゃないとと思うな。このフレーズは最初、部屋に閉じこもつてロジャーを//が誘いに来るシーンで使われるし。『悔やんではかりだと人生を逃す』という歌

詞にもあるとおり、過ぎた時間に囚われないことを訴えたかったんじゃないのかな」

「うう言つと、巡音さんはまた考え込んだ。それからじばりくして、

「巡音さんはほつんといつ言った。

「ロドルフォは、結局、見たくなかったのよね」

「何を?」

「ミミがもうすぐ死ぬつていう現実。ロジャーも、きっとわづ。自分もミミも、そんなにしないうちに死んでしまう。だからロドルフォは第三幕でミミと別れるし 春が来るのに別れるなんて、変だ

もの ロジャーはギターを売つてサンタフェに引っ越しすんだわ」

『ラ・ボエーム』のロドルフォは、ミミを想いながらも探し求めていない。一方、『RENT』では、ロジャーはミミこそが探し求めていた存在だと気づき、ニューイークに帰つてきてミミを探す。

ロドルフォは最後まで現実を見なかつたけれど、ロジャーは現実に向き合つたんだ。だから、一度握つたミミの手を離さうとしないロジャーに対し、ロドルフォはミミが死んでしまつたことに気づかない。

じゃあ、最後でミミが死なないのは、現実に向き合つたロジャーの為に、ラーソンが用意したハッピーハンドつてことか? そう考えると、つじつまがあつよくな気がする。

……こうやって、一つの あ、この場合一つか 作品について意見を交換しあえるのつていいな。

俺がそんなことを考えていると、階段を下りてくる足音が聞こえてきた。……姉貴だな。邪魔はしないんじやなかつたつけ。

「ちよつといい?」

部屋のドアを開ける前に、外からそつ訊いてくる辺り、氣は使つてくれてこるらしく。

「いいよ

俺がそう言つと、姉貴は居間に入ってきた。

「姉貴、何か用?」

「あんたたち、お皿はどいつもこもりのかつて訊きに来たのみ  
言われて俺は時計を見た。そういうやうつ十一時を回つてしまつて  
いる。

「何、姉貴、作つてくれる? でもいうわけ?」

「あんたねえ。まあ、そのつもりで下りて来たんだけどね。ス

ハケンテイでいい?」

「作ってくれるなんなら、なんでも」  
一の祭、警戒は無いがなー。

「巡音さんもそれでいい？」姉貴の飯、一応それなりに食えるから」

「あのねえ……それが、作つてもひひ側の言ひ台詞？」

呆れた声で姉貴がそう言つてくる。だつて姉貴の料理つて、下手すると野菜ばっかりどかーと入つてゐるし。姉貴の主張するといふによると「あんたが作ると動物性タンパク質ばっかりになるから、こうやってバランスを取つてゐるの!」だそ�だが……。

あ……わたし、自分の分はお弁当持ってきてたんですけど……」

「わね……」

姉貴は唐突に回想モードになつた。えーと、参つたな。巡音さんは、お姉さんの話はあんまりしたくないみたいなんだが……姉貴、察してくれよ。よくわからないけど、何か洒落にならない状況かも

「でも折角来たんだから、少しほはいて行ってちょうだい」

姉貴は台所に行つてしまつた。巡音さんは見るからにほつとした様子。やつぱり、お姉さんのことは話したくないらしい。

「遅音をさ、ひよつと待つて」

俺は立ち上ると、姉貴の後を追つて台所に行き、境の戸を閉めた。姉貴は、ちょうどお湯を沸かしているところだった。当然、換気扇がついている。……されなら、多分巡音さんには聞こえないな。

「姉貴」

「何？ 忙しいんだけど」

言いながら、姉貴は冷蔵庫からキャベツを取り出した。

「キャベツか。 キャベツならいいけど、ブロッコリーはやめてくれ  
「あんた、わざわざそんなこと言いに来たの？」

「あ……いけね。 こんなことに来たんじゃなかつた。」

「いや違つ。 今のはついで。 巡音さんのお姉さんのことだけじ、なんか話したくない事情があるみたいだから、あんまり詮索しないであげてくれる？」

一応、声を潜めて俺はそう言った。

「レンもそう思う？ どうも、何があるみたいよね  
なんだよ、気づいてたのかよ。」

「気づいていたなんなら、唐突にお弁当のこと持ち出さなくともいいじゃないか」

「あれは口が滑つた……といつか、別のことと言いかけたのよ。でも、それは訊くともっとまずいことになりそうだったから、咄嗟に違うことを言おうとして、そうしたら口から出てきたのが、さつきのだつたの」

キャベツをざぶざぶ刻みながら、そんなことを言つ姉貴。それにしたつて、もうちょっとどうにかならなかつたんだろうか。

「しまつたと思ったから、すぐに話を打ち切つたんだけど。とにかく、わかつたから、もう戻りなさい。お姫さんを一人にしておくもんじゃないわ」

へいへいと答えて、俺は居間に戻つた。 巡音さんがいつも見ている。

「とりあえずブロッコリーを入れるのは阻止した  
俺がそう言つと、巡音さんは首を傾げた。

「嫌いなの？」

「ああ」

正直、ビニが美味しいのかよくわからん。 何故か姉貴は好きなん

だよな……。

「緑黄色野菜は身体に良いはずだけど」

「姉貴と同じようなこと言わないでくれよ。不味いもんは不味い」一度料理にあれがでかいまま大量に入っていた時は、さすがに箸をつけるの躊躇つたぞ。姉貴がうるさいからなんとか食つたけど。

「パン粉とチーズをかけて、オーブンで焼くと美味しいと思うけど」「絶対にパス！」それ、姉貴に言わないでくれよ。聞いたら試すから

ら」

「そんなに嫌わなくともいいのに」

呆れられてしまった。

「巡音さんだつて、食べられないものの一つ一つぐらいあるだろ」

「それは、あるけど……」

「それと一緒に。ちなみに、嫌いなのって何？」

「納豆とか……オクラとか……」

「どうもネバネバ系が苦手らしい。オクラは俺もバスかなあ。姉貴が「雑誌に載つていた料理を試してみた」と言つて、オクラとトマトにスペイスをひとつさり入れて煮込んだ料理を作つた時は、何の嫌がらせかと思つたつけ。

「オクラは俺も苦手だけど、納豆は好き」

「あ、固まつてる。よほど嫌いらしい。納豆は美味しい」と思つんだが、嫌いな人つて多いよな。

「そんなに真面目な顔して考え込まなくともいいってば」それからしばらく、俺たちは食べ物に関する話をした。

「レン、こっち来て

台所から、姉貴が呼ぶ声がする。ジーせ支度を手伝えとか言つんだろうな。しょうがないか。

「ちょっと行つてくる」

立ち上がりつて台所に向かう。スペゲッティは茹で上がつたようであるの中で湯気を立てていた。

「何？」

「後ちよつとだから、テーブル拭いといで」

姉貴が台拭きを投げてよこしたので、受け止める。姉貴、この癖直らないな。行儀悪いって言われてんのに。

「で、それが終わったらフォーク出しといて。後、飲み物のことだけど」

「俺は何でも」

「あんたじやなくて、リンちゃんの話よ。あんたはどうせコーヒーでしじょうが。とりあえず選択肢は緑茶、紅茶、「コーヒーだから」はあ。……リンちゃんね。

「訊いてくる」

俺は居間に戻った。まずはテーブル拭きか……。でもって、飲み物の話ね。

「巡音さん、緑茶と紅茶とコーヒーと、どれにする?」

「あ……じゃあ、紅茶を……」

「紅茶ね」

台所に行つて、紅茶だと言ひ。姉貴に渡されたフォークをつかみ、俺はもう一度居間へと戻つた。そんなにしないうち、「姉貴が「お待たせ」と言つて、スペゲツティを盛つた皿を乗せた盆を手に、居間にやつてくる。

「はいどうぞ。飲み物を取つてくれるから、ちょっと待つてね」

皿をテーブルに並べた後、姉貴はそんなことを言つて、また台所に戻つて行つた。……キヤベツとベーコンか。まともな組み合わせで良かつた。

巡音さんは鞄からお弁当箱を取り出して、テーブルの上に置いている。

「はい、リンちゃんは紅茶ね。」

姉貴が戻つてきた。巡音さんの前に紅茶の入つたカップを置く。

俺と姉貴は「一ヒーだ。姉貴の分にはミルクが入つていて。

「あ、それがお弁当?」

「ええ」

「見てもいい？」

姉貴、幾らなんでも図々しくないか？

「…………」

巡音さん……別にOKしなくてもいいと黙つた。びしりと断つちやつても。とはいえ巡音さんが承諾しきやつたので、姉貴はお弁当箱を開け始めた。

「わ……美味しそう」

姉貴がそんなコメントを発したのと、俺はお弁当箱の中身に視線を向けた。小さめのお弁当箱の中に、お握りや色んなおかずが詰め込まれている。……確かに美味しそうだな。

「他所のお弁当見るのってなんというか、新鮮よね…………」  
「…………」  
「あんまりもんか？ 僕には姉貴の考えてることがよくわからん。

「あの……良かつたら、少し食べます？ これ、全部はひよつとすぐになくなっちゃう……」

「そんなどう言つたの姉貴、図に乗るよ」

「なんてこと言つてあなたはっ！」

姉貴にはたかれた。いや、はたかれたつつとも、軽くだけど。

「あの……本当に、食べてくれた方が助かるから。お弁当を残して帰ると、心配されちゃうしつ……」

「（ソレ）ちやんもこいつ言つてくれてることだし。シニアしまじょつか。取り置つてくるわね」

「だからさあ、姉貴……」

俺の言つひとと最後まで聞かずに、姉貴は台所へと行つてしまつた。……ああもづ。

「巡音さんとこ、残すとつるそこの？」

「つるむこというか……」  
「前の前貧血で倒れたから、お母さんがあくまつと過敏になつてゐるの」

やつこうことか。それは確かに心配するのも仕方ないかなあ。俺

も田の前で倒れられた時はびっくりした。

「鏡音君のお姉さんが作ってくれたパスタ、結構量があるし、これを食べるとお弁当を全部吃るのは無理だから。食べてもうつた方がわたしも助かるの」

確かに「少し」なんて言つていた割には結構量があるな。姉貴、これを見越して最初から普通の量に盛つたんだつたりして。……結構ずさんなどこがあるから、深い意味はないのかもしれないけど。そんなことを考えているところへ、取り皿を手に姉貴が戻つて来た。

「じゃ、食べましょっか」

とりあえずぐだぐだ考えるのは止めにして、飯に集中しよう。腹減つた。

あるのはただ、今日といつも（後書き）

めーちゃんとしては栄養バランスを考えながら料理を作るわけですが、レンには全然伝わってなかつたりします。まあ、この年頃の男の子なんてそんなもんです

巡音さんのお弁当箱の中身を、結局俺も分けてもらつたが、確かに美味しかった。姉貴が「美味しい」を連発したので、俺は何も言えなかつたけど。巡音さんのところつて、運転手さんがいるぐらいだから、料理も専門の人がいるのかもな。ああいう生活は、俺には想像がつかない。今度クオに訊いてみるか。

食事が終わると、姉貴は空になつた皿を下げに行つた

「鏡音君のお姉さんつて、いつもあんなに賑やかなの？」

巡音さんがおずおずと訊いてきた。

「姉貴？ まあね～。大体いつも、『うるさい』『ぐらぐら』よく喋るよ。」

それに詮索も好きだつたりするし……。今日はお客さん それも、後輩の妹 が来ているといふことで、ちょっとは皿重していくれているみたいだけだ。

そこへ、飲み物のお代わりを持つて、姉貴が戻つて來た。……やべ。今言つたこと、聞かれてないよな。

「はい、どうぞ」

「…………ありがとうございます」

どうやら、聞かれてはいなかつたらしい。助かつた。俺はほつとして、姉貴が持つてきてくれたお代わりのコーヒーを一口飲んだ。「ねえ、リンちゃんつて、今学校は、中学と高校、どっちから？」何故か、姉貴は巡音さんにそんなことを訊き始めた。……何だよいきなり。そういうや、うちの学校つて中等部もあるんだよな。俺は高等部からだから、あんまり気にしてことなかつたけど。

巡音さんは、多分中等部からだらうなあ。クオが前、初音さんは中等部からみたいなこと、言つてたし。

「中学からです」

あ、やっぱり。

「ふーん、知つてゐるだらうけど、レンは高校からなのよ。編入と持

ち上がりって、何か違いとかあつたりする？」

姉貴は、今度はそんなことを訊き始めた。我が姉貴ながら、何がしたいんだ一体。巡音さんはと言つと、姉貴の質問に首を傾げている。

「ちょっとわかりません……」

そりや、確かに答えづらいよな。俺だつて、こんなこと訊かれても返事しづらこよ。強いて言つなり、一年次は持ち上がり組と編入組は、違うクラスになるつてことぐらこか。

「中じこるとわからないものかしらね」

姉貴はそんなことを言つている。

「姉貴、何だつてそんなことを訊くわけ？」

「ただ的好奇心よ」

「そうか？ そつは思えないんだが……。

「あんまり質問責めにすると、巡音さんが困るだろ」

「リンちゃん、困つてる？」

「え……いっえ

ふるふると首を横に振る巡音さん。姉貴が胸を張る。

「ほーら、いっつてるじやない」

「それは、巡音さんが姉貴に対して『氣を使つてるんだつてば』……

巡音さん、姉貴に訊きたいことあるんだつたらなんでも訊いていいよ。巡音さんばかり答えるのは、フュアじゃないから」

さすがにちょっとこらつと来たので、俺はこいつてみた。あ、

でも、巡音さんの性格だと、姉貴を質問責めにするのは無理かな……。

俺にこいつされた巡音さんの方はとこつと、例によつて考え込んでいる。

「あの……」「うん、何？ スリーサイズと体重以外だつたら何でも訊いていい

しばくして結論が出たのか、例によつて巡音さんはずねずみと切り出した。

「うん、何？ スリーサイズと体重以外だつたら何でも訊いていい

わよ

姉貴の方は余裕たっぷりだ。そんなこと巡音さんが訊くわけないだろ。

「うーん、彼氏はいますか？ とか、訊いてくれると面白いんだけど。訊かないだらうなあ。

ところが、巡音さんが口にしたのは、違う意味で意外なことだった。

「……鏡音君から聞いたんですけど。お姉さんが、『ラ・ボエーム』のロドルフォのことを、ヘタレだって言つていて。それで……」「ちょっとあんた、リンちゃんになんてこと言つたの！？」

巡音さんを途中でさえぎり、姉貴は俺にそつ怒鳴った。いや……。

「話のネタにちようどよかつたから、つい……」

「ついじやないわよついじや！ 何考へてるの！？」

「だつて本当のことだろ。姉貴が酔っ払つたあげく、ロドルフォをヘタレの甲斐性なしつて怒鳴りまくつたのも、脚本にケチつけまくつたのも」

「だからってハクちゃんの妹にそんなこと、言わなくともいいでしょうがつ！」

「その時は、巡音さんのお姉さんが姉貴の後輩だなんて知らなかつたんだよつー わかるかそんなことつー」

ここまでやりあつたところで、俺と姉貴は、巡音さんが引きついた様子でこいつを見ているのに気づいた。どう見ても怯えてこむ。

……まあい。

「あ……えーと、その……」

「ああ、気にしないでリンちゃん。定例の姉弟喧嘩だから」

違うだろ。内心でそう突つ込みたいのを、必死でこらえる。そりや、この程度の言い争い、よくあるけど。

「で……『ラ・ボエーム』の話ね。確かに言つたし、今でもそう思うわよ。あの主人公はどうしようもないヘタレの甲斐性なしだつて。だって、生活力は無いし、つまんない理由で恋人を捨てるしく

だらないこと画策してゐる暇があるんなら、バイトして薬代の一つでも作ればいいのよ 最後の時は恋人の手すら握つてあげられないんじゃあねえ。ヘタレとしか言いようがないわ」

姉貴は開き直つたのか、そんなことを言い出した。……巡音さんは、まだ微妙に引いている。

「あの……すいません……」

「ああ、リンちゃんに怒つてるわけじゃないから、そんなに構えないで。怒つてるのはあの主人公に対するだから」

言いながら俺を横目で睨む姉貴。はいはい、俺にも怒つてゐつて暗に言いたいんだろ。

「……えっと……

「何?」

「そういうこと言うのって……怖くないんですか?」

巡音さんは、こんどは妙なことを訊いてきた。姉貴がきょとんとした表情になる。

「怖いって、何が?」

「その……プッチーって、もともとイタリアオペラを代表する作曲家ですし、その中でも『ラ・ボエーム』は、彼の代表作で、最高傑作だつて言う人もいるし、『泣けるオペラ』と評判だつたりするし……」

「え、あれつて『泣ける作品』だつたの」

姉貴、身も蓋も無いな。それにしても『ラ・ボエーム』つて、泣ける作品つて扱いなのか。そういう感じはあまり受けなかつたが……。あ、でも、『RENT』を劇場に見に行つた時は、劇場で泣いている人が結構いたから、『ラ・ボエーム』も発表当時は泣いてしまう人がそれなりにいたのかも。

「一応そのはずです……」

「うーん、でも、あれじや泣けないわねえ。何せ主人公がボンクラすぎむし」

本当に容赦ないな。

「泣けるとか何とか云々以前に、姉貴その手の作品じゃ泣かないだろ。人を死なせて泣かせのシーンを作るのはあざといって、ショッちゅう言つてるじゃん」

高校時代、『ある愛の詩』を授業で見る羽目になつて、すぐ疲れたとか言つていたし。

「レンは黙つてて。あんたが口挟むと話がわき道に行くから」

姉貴は俺を肘で小突いた。

「で、リンちゃんは何が気になつてこるの？」

「あの……だから……高い評価を受けている作品に対して、そういうことを言つちゃつていのかつてことが……」

「そう言われてもねえ……実際に見ていてしらけちゃつたわけだし。その、プツチー二つて人には悪いんだけど、もうちょっと話の組み立て方を考えてほしいわ」

あ、それは俺も同意かも。なんというか、話の展開が全体的に唐突すぎて、見ていてそれはないだろつて思えるところが結構あつた。『RENT』を先に見ていたのあるだろうけど。ラーソンは後発だから、問題点がわかつてそこを修正していつたんだろうな。

……その割に、名作映画のリメイクつてのは駄作ばっかりだよな。なんでだろ。

「そうねえ……じゃ、ちょっと話くけど、リンちゃんはあれ見て泣いたの？」

「……いいえ」

巡音さんは首を横に振つた。

「結局、そこに帰結していくと私は思うのよね。例え世界中の九十パーセントの人が認めた名作だつて、あわない時はあわないんだし。リンちゃんがその作品を見てどう感じたのか、どう思ったのかってことを、まずははつきり見極めないと」

姉貴は、らしくもなく真面目なことを言い出した。

「おかしくて笑つちゃうにせよ、逆に悲しくて泣いてしまつにせよ、自分がどう思うのかが大事でしょ。それがわからないんじゃ、自分

がどこにいるのかもわからないわよ。そして更に自分の立ち居地をはつきりさせて、自分の考えつてものを確立させて行く。そこが大事なんじゃないのかな」

明日は雨でも降るのかなあ。姉貴が喋っているのを眺めながら、俺はそんなことを考えていた。

「まあ、更に付け加えさせてもらうと、一言だけ『つまらない』だの『泣きました』なので、終わらせてしまつのも良くないと思うのよね。せめてどうしてそう思つたのかぐらい、自分でちゃんと説明できなくちゃ。少なくとも、私自身は、自分で自分の感情や考えを説明できるようにしておきたいの」

ま～確かに、映画とかの話をしていて「つまらない」や「泣きました」だけで終わられるど、そこから先の話が続かないんだよなあ。「なんか、らしくもなく真面目な長話しちゃったわ」

なんだ、自覚はあつたのか。

「いえ……色々と、ありがと『わざわざこました』

巡音さんは真面目な表情でお礼を言つてゐる。姉貴は嬉しそうだ。  
……なんだらう。

……なんだか、面白いない。

「あの……もう一つ、いいですか？」

巡音さんはそう言って、鞄からDVDを一枚取り出した。

「もしよかつたら、これを見てもらいたいんですけど……」

姉貴がDVDを受け取る。俺は身を乗り出して、姉貴の手元のDVDを見た。ドレスを着た女性がパッケージに映つてゐる。

「……『タイス』ね。これもオペラ?」

「はい。このオペラの主人公のことを、どう思つのが知りたくてわたし、どうにもよくわからなくて」

なんで姉貴に訊くんだ？ 妙な意見を聞かせてもらえるサンプル扱いなのか？

「巡音さん、『タイス』って、どういう意味？」

話題が変わつたので、俺は口を挟んだ。

「ヒロインの名前なの。このパッケージの女性がそう。彼女は遊女というか、高級娼婦というか、吉原の花魁みたいな人なのね。で、主人公はアタナエルという男性で、修道士。オペラの舞台は四世紀のエジプト」

さすがというか、巡音さんはすらすらとオペラの情報を喋った。  
修道士と高級娼婦……どういう話だ、それ。

「変わった設定だな」

「でも結構面白そうじゃない。今見てもいい？」

姉貴はそんなことを言い出した。

「わたしは構いませんが……」「……」

巡音さんがちらつとこっちを見た。

「俺もいいよ」

話の中身、気になるし。さすがの姉貴も昼間つから飲む趣味はないから、この前みたいなことは起きないだろう。

「じゃあ見ましょうか」

姉貴はそう言って、DVDをプレーヤーに入れた。オペラが始まると、今回は劇場の外観は出てこず、抽象的な映像が映って、それからメニュー画面になつた。

オペラが始まると、砂漠の中（例によつてセットが凝つてる）で、黒ずくめの修道士たちが歌つている。そこに、主人公のアタナエルとやらが帰つて来て、ヒロインのタイスが都市を堕落させている。幾らなんでも、女一人で都市そのものが堕落するわけないと思うんだが、とか、怒りをぶちまける。態度のでかい奴だな。でもつて、この人は、タイスを改心させたいらしい。それは余計なお世話のような気がするんだが。

主人公は思いつめすぎているのか、眠ると夢にタイスがでてくる。主人公はそれを、「彼女を改心させよ」という、神の啓示だと受け取る。大体その辺りまで見た時だつた。突然、姉貴が笑い出した。

「あ、あの……？」

巡音さんがびっくりして姉貴を見た。そりや驚くよな。どう考え

ても今のは笑うシーンじゃないだろ。

「あ、ああ、ごめんごめん……気にしないで……」

言いながら姉貴は相変わらず笑っている。それで気にしないでって無理があるだろ。

「姉貴、何がそんなにおかしいわけ？」

「だつて……この主人公、あまりにもわかりやすすぎるので……るんだもの。これが笑わずにいられますか」

訊いてみると、姉貴はそんなことを言つた。確かに態度でかいけど、バカなのか、この主人公。

「バカって……」

姉貴、巡音さんがびっくりしてるよ。まあ、酔っ払つてクダ巻かれるよりは遙かにマシだけど……。

「バカって、どの辺が？」

俺は代わりに訊いてみることにした。宗教的盲信さをバカって思つてるのかもな。なんといつても俺の姉貴だし。姉貴はリモコンの一時停止ボタンを押して画面を止めると、説明を始める。

「いやーだつて、この主人公、アタナエルだつけ？ 要するにただ単にタイスのことが好きなのよ。タイスが墮落してから救つてあげなければとか言つてるけど、結局のところ、彼女が自分以外の不特定多数の男と寝てるのが気に入らないってだけ。なのに、自分が身体売つてる女に恋をしてることを認めたくないから『タイスを救うのが神の与えた我が使命！』だなんて、必死こいて言い訳作つて、そうやって自分の体面を保つてるの。いやー、本当、笑えるわ～」

そこまで話すと姉貴は笑い崩れた。容赦なくバッサリやつたなあ。巡音さん、ショック受けてないといいけど。

「周りの態度を見る限り、結構ランクが上の人みたいなんだけど、だから余計認められないんでしょうね。この立派な俺様が、あんな穢れた女なんか！ って感じで。援助交際やりまくつてる女の子に恋をした優等生みたいなもんつて言つたら、わかりやすいかしら

？」

「うーん、わかるようなわからんような……。

「大体、たつた一人の女のせいで、都市全体が堕落するわけないでしょ。この男はそういう理屈でも作らないと、自分を騙せないのよ。でも、そうやって自分に嘘ついてごまかしたところで、どこかで限界来るわよ。まあ続きを見ましょうか？」

姉貴は余裕たっぷりにそう言つと、一時停止を解除した。オペラの続きが始まる。

主人公はアレクサン드리アに行き、貧乏くさい格好のせいでの乞いと間違われたりしながら、これは、作者流のギャグなんだろうか。旧友のニシアスとかいう、遊び入っぽい男と再会する。この人は相当タイスに貢いでるらしく、タイスは現在彼の館に滞在中なんだそうだ。主人公は身なりがあまりにも汚いので、ニシアスの着替えを貸して貰い、宴の席でタイスと会つて、改心せよと説き始める。冷静に考えると、かなりイタい行為のような気がするぞ。タイスはまともに相手をしていないが、色々あって、場所を変えることになる。ここで、第一幕終了。ちなみに姉貴は、女性陣を見て「わ、衣装が素敵」と喜んでいた。一応アパレル業界にいるからなあ、姉貴。

第一幕では、舞台はタイスの館になつてゐる。一人になつた彼女は、今の生き方が空しいとか、年を取つたら自分は誰にも相手になれなくなるだろう、とか、そんなことを一人で歌つてゐる。……なんか生々しいな。そこへアタナエルがやってきて、信仰による永遠の幸せを説くと、タイスは段々その気になつてくる。えーっと……神経すり減らすような今的生活より、信仰による穏やかな生活を選ぶとか、そういうことなんだろうか？ この辺りで、一度幕が下りてしまふらぐ間奏曲のようなものが流れます。

「あれ、この曲つて……？」

「どこかで聞いたことがあるような。

『『タイスの瞑想曲』』といつて、これ単独で演奏されることのある

有名な曲なの」

「へーえ。多分どこかで聞いたんだな。喫茶店とかのBGMにでも使われていたんだろう。ヴァイオリンの響きが特徴的な曲だ。この瞑想曲とやらの後で、タイスは唐突に改心を決意する。極端から極端に走つてゐるような気もするが……。アタナエルはタイスに不淨にまみれた身を浄化する為に、全財産を焼き捨てると命令する。本当に態度でかいな、こいつ。大体勿体無いだろ、それ。売つてお金に変えてどこかに寄付でもした方がいいんじゃないかな？」

タイスはそれを承諾するが、これだけは誰かにあげられないか、と小さな象牙の像を見せる。なんでも以前、ニシアスから貰つたらしい。瞬間「ニシアスからの贈り物だと！？」と騒ぎ出すアタナエル。あっちゃん。姉貴の言つた通りだつたよ。姉貴を見ると、盛大に爆笑していた。

「ね？ 言つたとおりでしょ？」

「これは……確かにヤキモチ以外の何物でもないな」  
しかし、十代ぐらいでこれをやるならまだわからんくもないけど、この人かなりいい年だよな？ 色んな意味でイタイぞ。

「相手が自分の友達だから、なおさら許せないんでしょうねえ。でも、それを自分で自覚してない辺り、始末が悪いのよね……ああ、おかしい……」

確かにまあ。宗教という言葉でくるんでしまつてゐる分、余計厄介な気がする。

「あの……そうなんですか？」

巡音さんが姉貴に訊いている。姉貴は即答した。

「ニシアスからのプレゼントだつて聞くやいなや、即激怒する辺り間違いないわ。それまで割と落ち着いて聞いていたのに、急にふつつんしたでしょ。どう見てもこれは嫉妬ね」

巡音さんはまだよくわかつていないので、首を捻つてゐる。オペラはまだ続く。ニシアスが、博打で儲けたから一遊びしようぜーとか言って、人を大勢連れてやってくる。タイスが改宗したこ

とを知らされて、騒ぎ出すその他大勢。下手すりや暴動が起きて二人とも殺されかねない大ピンチだつたが、ニシアスが金貨をばら撒いて一人を助けてやる。……いい奴じやないか、ニシアスつて。こんなにひどく嫉妬されてるのに、こいつを助けるのか。第一幕はここで終わる。

第三幕では、アタナエルとタイスは砂漠を渡つて旅をしている。ハードな旅に音をあげるタイスに、アタナエルは厳しい。このおっさん、もしかしてサディストの氣でもあるんだろうか。結局タイスは倒れてしまい、アタナエルは慌てて介抱に走る。最初からそうしてやれよ。ここでちょっととい雰囲気になる。が、結局タイスは尼僧院に入つて行き、アタナエルは淋しげに彼女を見送る。……例によつて姉貴はくすくす笑つている。内心でバー・カバー・カとでも思つてゐるんだろう。

最初の砂漠に戻つてきたアタナエルだが、相変わらず夢にタイスが出てきて眠れない。……これが、姉貴が言つていた「限界」つて奴か？ 相手が神様じや嫉妬するわけにもいかないもんな。姉貴は「遅いって！」と突つ込みを入れている。とかなんとかやつていううちに、タイスが死にかけていると知らせ 何があつたんだ、いつたい が入つて、アタナエルはタイスの許に駆けつける。

結局、二人はすれ違つたまま 何せ、アタナエルがようやく自分の気持ちを認めて「お前を愛している！」とか叫べるようになつたのに、タイスは「あなたのおかげで天国に行けるわ、ありがとう」としか言わないから タイ스は死んで、オペラは終わる。うーん、なんというか……。最初から最後まで派手に主役二人がすれ違つて終わったよ。すんごい皮肉に溢れたシナリオ。『ラ・ボエーム』とはえらい違いだ。誰だよこの話書いたの。

「ああ、おかしかつた……オペラがこんなに面白いとは思わなかつたわ」

結局、姉貴は最後まで笑つていた。……えーと、いいのかその反応。巡音さんが困つてるよ。多分これ、一般的には「悲劇」に分類

されるんだろうし。

「姉貴、今日は主人公がバカ入ってる割に怒らなかつたね」  
反応としてはこっちの方が楽だけど、相手するのに。

「ん~、ここまで道化に徹されると、笑えて来ちゃつて怒るビンゴ  
じゃなくなるわね。かなり主人公を突き放した作りになつてる辺り、  
作つた人もわかつてやつてるんじゃない? それにしても救いよ  
うのない主人公だわ。傲慢と嫉妬のあわせ技抱えてる人が、神の道  
を説くんだから。まず自分を振り返りなさいって」

まーだ笑つてるよ。そんなにウケたのか。でもってあいかわらず  
容赦ない。けどなあ……。

「俺は、その辺りが皮肉だとと思うんだよね。だつてこの主人公、自  
分に嘘ついて誤魔化しまくつているのに、そんな奴の行動が、ある  
意味ではタイスを救つてしまふんだから」

途中の「壊せ今すぐ!」で、嫉妬のぐだりは実にはつきりして  
る。自分を騙すためにやつたことが、結果的に彼女を自分の入れない世  
界に向かわせてしまうというのは、皮肉以外の何物でもないだろう。  
「タイスは……幸せだったのかな」

巡音さんは、ぼつんとそう言った。……巡音さんはアタナエルよ  
りも、タイスの方に思うところがあるらしい。

「俺は宗教の話はよくわかんないけど、幸せではあつたんじゃない  
?」

本人が満足なら、それでいいんじゃないだろうか。

「自分の心に素直に向き合つた分、アタナエルよりは幸せな結末と  
言えるんじゃない? 死ぬまでの日々は穏やかだつたんじゃないの  
かな」

と、姉貴。巡音さんはしばらく考え込んでいたが、やがて姉貴に  
向かつて「あの……ありがとうございました」と頭を下げた。えー  
と……。

「そんなかしこまらなくていいわよ。かなり言いたい放題だつたし  
かなり? 無茶苦茶の間違いじゃないのか?」

「面白い作品見させてくれて、」J.J.たちにありがとうございました。  
結局そういう感覚なんだな。

「『ラ・ボエーム』と『タイス』だったら、どっちが好きですか？」

「当然『タイス』ね」

即答してますよ。まあ、姉貴の好みからいつたら『タイス』だらうなあ。ひねくれた話好きだから。でも、こんなこと言つたらほほ確實に「レン、あんた人のこと言えるの?」って、返ってくるな。やめとこうつと。

巡音さん、なんか嬉しそうだな。……俺はちょっと複雑だ。

「あの……お話するのは楽しいんですけど、わたし、そろそろ帰らないと……」

巡音さんは時計を見た後で、申し訳なさそうにそつ言い出した。あ、結構遅い時間になつていてる。確か門限あるとか言つてたよな。

「そう? ジャあ、気をつけてね」

姉貴はプレーヤーからDVDを取り出してケースに入れると、巡音さんに手渡した。巡音さんはDVDケースやお弁当箱を鞄に仕舞うと、もう一度丁寧に頭を下げた。

「それでは、失礼します。今日はありがとうございました」

「駅まで送つてくれよ」

俺はそう言つて立ち上がつた。一人じゃ駅まで行けないだろつ。  
「……ありがとう」

俺たちは連れ立つて外に出た。姉貴が玄関口まで見送りに来た。

## 悲劇か喜劇か（後書き）

作中で上手に補足できなかつたのでここに書きますが、『タイス』の原作者はアナトール・フランスという人で、ノーベル文学賞の受賞者だつたりします。

ちなみに、オペラは原作に比べるとややマイルドな仕上がりになっています。原作はもつと皮肉で、主人公（原作ではパニフィスという名前ですが）に対してもつと突き放した、容赦のない描写がされています。まあ……バカにしか見えない側面もあつたりしますが……。どう受け止めるかは読む人次第ですね。

## トウルー・カラーズ

駅までへの帰りの道。巡音さんは来た時よりは落ち着いた様子だつた。行きはがちがちに緊張していたもんなあ。何にせよ、打ち解けてくれるのはやっぱり嬉しい。

「姉貴の言つ」とは、あんまり真に受けない方がいいと思つんだよね」

歩きながら、俺は巡音さんにそつと言つた。

「どうして?」「

「ん~、滅茶苦茶言つ人だし、思つたこと全部言わないと気が済まないようなところあるし、言い回しに容赦が無いし……巡音さん、びっくりしたんじゃない?」

巡音さんは歩きながら、軽く首を傾げた。髪と髪につけたリボンがあわせて揺れる。

「驚きはしたけれど……鏡音君のお姉さんは、嫌いになつたら、はつきり『嫌い』って、言つてくれそう」

「まあ、そりやなあ……」

巡音さんがどうしてそんなことを思つたのかはよくわからんが、姉貴はあんまりお世辞を言わない。まあ、あれで社会人だから、多少の建前は使つてるだろうけど。とこつか、使えないとまずいだろ。あ、駅に着こちやつたよ。巡音さんは帰りの切符を買つて、こっちを向いた。

「送つてくれて、ありがと!」

なんか照れるな。

「これくらい大したことじやないから」

「送つてくれたことだけじやなくて……今日のことを全部、本当にありがとう。とても楽しかった」

巡音さんはそう言つて、にっこりと笑つた。あ……。

……巡音さんが笑つたとこ、初めて見た。今まで、表情が和らい

だり嬉しそうにしていたりすることは 回数は少ないけど あつたけど、こういう、満面の笑顔というのは初めて見る。俺はついまじまじと、巡音さんの顔を見てしまつた。向こうがこっちの視線に気づいて、怪訝そうな表情になる。

「……鏡音君、どうかした？」

「あ、いや……なんでも」

元に戻っちゃつたか。残念だ。……もつと見ていたかったのに。

「それじゃあ、わたしはこれで。また明日、学校で」

「ああ、気をつけてね」

巡音さんは大きく手を振ると、改札を抜けて駅のホームへと去つて行つた。なんで……淋しく思つんだろ。帰るのなんて当たり前のに。

「ただいま」

「あ、お帰り。ちゃんと駅まで送つてつた？」

「当たり前だろ」

帰宅すると、姉貴は居間で何かを見ながら難しい顔をしていた。どうしたんだ、一体。俺は姉貴が見ているものを覗き込んだ。

「……アルバム？」

姉貴が見ていたのは、自分のアルバムだつた。制服姿の姉貴が映つていて。あ……てことは、もしかして。

「姉貴、これって」

「これ見て」

俺の言いたいことを察したのか、姉貴は俺が言う前に、[写真]一枚を指差した。ユニフォーム姿でラケットを抱えた姉貴の隣に、同じユニフォームを着た、髪の長い大人しそうな女の子が立つていて。

「この人が、巡音さんのお姉さん？」

「そう、ハクちゃん。私が三年の時に一年だったの」

姉貴は俺より六つ上だから、巡音さんとは四歳違いか。……それ

にしても。

「あんまり似てないね」

大人しそうなところは共通してゐるけれど、顔立ちは全然似ていな  
い。

「兄弟だから似るつてもんでもないしねえ。私とあんたも全然似て  
ないし」

と、姉貴。まあ確かに俺らははつきりきつぱり似ていない。

「そりゃあ、俺は母親似で姉貴は父親似だし。じゃ、巡音さんとこ  
もそうなのかな」

「うーん、どうかしらね……お母さんの方しか知らないし。リンち  
ゃんにちょっと似てたような気がするけど」

ふーん。……つて、あれ。

「会つたことあるの？」

「一度だけね。試合の応援に来てたの。リンちゃんも一緒だつたわ  
「え、じゃあ、姉貴は巡音さんとは今日が初対面じゃないんだ。そ  
れ言わなかつたね」

向こうも気づいてないみたいだつたけど。

「あのねえ、会つたといつても、五年も前にたつたの一度、それも  
ごく短い時間よ。それにリンちゃんは、あの時まだ小学生だつたの  
よ。私のことなんて、憶えてるわけないでしょ」

姉貴が高三だと、俺は小六か。確かにそれで憶えてるつていうの  
は無理があるな。

「それはそれとして、何だつて姉貴、アルバム引っ張り出してため  
息ついてんの？」

「社会に出て働くようになるとね、この時代をしみじみ懐かしく思  
うようになるものなのよ。ああこの頃は良かつたなつて……。あん  
た、今ちゅうどんの最中なんだから、今のうちにじっかり楽しんど  
きなさいよ」

姉貴はそんなことを言つ出した。……はつきり言つて、似合つて  
ない。

「そんなんもんなの？」

「そういうものよ。最中だと、わからないものだけだね」

相変わらずしみじみそんなことを言つ姉貴。……本当にそれだけか？ どうもそれだけじゃないような気がするんだが、……。とはいえ、詮索しても答えてくれそうにないしなあ。他のこと訊くか。

「巡音さんのお姉さんってどんな人だったの？」

「ハクちゃん？ ん~、大人しいけど、根気のある子だったわね。バドミントンって軽く見えても本格的にやるとハードだから、軽い気持ちで入つて音を上げて辞めてく子つて多いんだけど、ハクちゃんは頑張つて続けてたし」

やつぱり大人しいタイプなのか。

「でもリンちゃんとは少し感じが違うかな？ ハクちゃんはなんていうか、ちょっとピリピリしたところがあつたのよね。とはいえ、綺麗な子だったから、共学だった男の子からモテたかもしれないけどねえ」

姉貴の卒業した高校は女子高だ。高校時代、バレンタインデーにはチョコレートを幾つも抱えて帰つて来たのを憶えてる。なんで女同士あげたがるのか、俺にはよくわからないけど。巡音さんのお姉さんからも貰つたのかなあ。

「バレンタインデーにはチョコレート貰つたりした？」

「貰つたわね。ま~部活の子のほとんどがくれたんだけど」

あ、やつぱり。姉貴は引退後もちょくちょく部活に顔だしして、後輩の面倒見ていたからなあ。受験しなかつたから暇もあつたし。

「リンちゃんは、学校ではどんな感じ？」

「真面目で大人しくてよく勉強してる。趣味は読書と音楽鑑賞だつて前に聞いた。人と話すのが苦手」

今日はよく喋つてくれたけど。ちょっとは慣れてきたのかな。

「なんか本当にいいとこのお嬢さんつて感じね……ところで」

姉貴は不意に真面目な顔で、俺の方を見た。……なんだよ。

「何？」

「コンちゃんのことばいわう」

「どうしてそういうことを訊きたがるんだよ……。訊かれるだらう」とは思つてたけど。

「どうひて……友達だよ」

「本当にただの友達?」

しつこいなあ。どうしてこの手の詮索が好きなんだ。

「なんでそんなこと訊くわけ?」

「リンちゃんとは中途半端なつきあいをしてほしくないから」「だから～ら～、やうこいつ関係じゃないって言つてるの!」。わかる

ない姉貴だな。

「別につきあつてないつてば」

「でも、友達でしょ?」

「そりゃあ」

友達なのは確かなので、俺は頷いた。

「友達づきあいもつきあいのうちよ。リンちゃんみたいな子は色々と難しいの。中途半端に構うのだけはやめてちょうだい」

……なんだよそれ。俺には姉貴の言つことがわからぬからなかつた。大体、なんで俺がそんなこと、言われなくちゃならないんだ。「なんだよ。姉貴、俺がコイとつきあつてた頃はそんなこと言わなかつただろ」

節度のある年齢相応のつきあいにしておけ、とは言わたし、それについてぐどいぐらいの説明も受けたが、つきあいそのものは反対しなかつた。なのになんで友達である巡音さんに對して、こんなことを言つてくるんだ?

「コイちゃんはリンちゃんとは違うから。それに、コイちゃんとは全く接点がないけれど、リンちゃんはハクちゃんの妹だから間接的とはいえ、関わりがあるしね。傷つくるを黙つて見てるわけにはいかないのよ」

「俺が巡音さんを傷つけると思つてるわけ!?」

そんなことするもんか。やつとまともに話せぬよつになつてきた

のに。

「あんたにその気がなくても、軽い気持ちで構っていたら、いつかはそういうことになるの。あんたも傷つくし、リンちゃんも傷つく。その場合、リンちゃんの方が傷が深くなるの」

いらっしゃいたぞ。今は姉貴が俺の保護者かもしれないが、こん

なことを言われる筋合はない。

「俺の交友関係に口出さないでくれよ！」

「あんたにさつきのオペラの主人公みたいになつてほしくないのよ  
むかつ。何だよその言い草は。

「それこそ余計なお世話だろ！ というか、あのバカと俺と一緒に  
しないでくれよ！ ああなるわけないだろ！」

完全に頭に来た俺は、そう叫ぶと部屋を出て行つた。これ以上姉  
貴の相手なんかしてられるか。何なんだよ、全くもう。

## トゥルー・カラーズ（後書き）

レンが出てつちゃつた後のめーちゃんの独り言。

「うーん、例えがまずかつたかしら……」

いやそういう問題じやないですが。とにかく完全に誤解されました、はい。

## 暗い表情の君を見たくない

折角巡音さんとまともに話せたと思ったのに、帰宅後に姉貴が余計なことを言い出したせいで気分がぶち壊しだ。その日の夕食の際、俺は姉貴と全くといつていいほど口をきかなかつた。大体、この状況で話せることがあるわけない。姉貴も一言も喋らなかつたので、おそらく寒々しい食卓となつた。

そして翌日。姉貴の方は前日のことを忘れたのか、普通に「おはよう」と言つて来だが、俺はそれを無視して、朝食を食べると学校に出かけて行つた。

学校に着いて教室に入る。多分もう来ているだらうなと思いながら巡音さんの席の方に視線をやると、予想通り、そこに座つていた。珍しく本を広げていない。考え方でもしているのだろうか。

姉貴に言われたことが頭を過ぎつたが、俺にそんなことに従う理由はない。そもそも、姉貴にあんなこと言われる筋合いでつてないんだし。

「おはよう、巡音さん」

声をかけると、巡音さんは振り向いてこいつちを見た。

「おはよう、鏡音君」

あれ、元気が無いな？ 一瞬こいつちを見た視線は、すぐに下へと向けられてしまつた。

「何があったの？」

そう訊くと、巡音さんはしばらくためらつていたが、やがておずおずと口を開いた。

「あの……鏡音君。ちょっと訊きたいんだけど

「何？」

「昨日……わたしが帰つた後で、お姉さんから何か話を聞いた？」

俺は冗談抜きでその場に固まつた。なんでわかるんだよそんなこ

と。

「話つて、例えれば？」

「その……わたしの姉のこととか」

あ……そつちか。ちょっとほつとした。「巡音さんとの友達づきあいは考え方」と、姉貴に言われたことを感づかれたのかと思つたぞ。

「ちょっとはね」

「どんなこと?」

えーと……とりあえず、無難そうなことひるだけ話しどくか。

「姉貴が高校時代のアルバム引っ張り出してきて、巡音さんのお姉さんと映つてゐる写真を見せられた。姉貴が言つには、今が一番いい時代なんだつて。姉貴、まだ、過去を懐かしむような年でもないと思つんだけどね」

なるべく、なんでもないような口調で喋る。

「そうなんだ……」

巡音さんは、それを聞いて安心したようだつた。……何が引っかかるつているんだろう? 巡音さんのお姉さん、姉貴の一いつ下つてことは、順当に行つてれば今は大学生か。外国に留学でもして音信不通にでもなつてるとか? でもお姉さんのことは訊いてほしくないみたいだし、こちらから突付くのは気がひける。

「もう一つ訊いてもいい?」

「いいけど」

巡音さんがそう言つてきたので、俺は頷いた。

「鏡音君は、お姉さんがひどく酔っ払つた時つてどうしてるの?」

……また姉貴の話か? なんで巡音さんは姉貴のことなんか気になるんだろう。気にしてつてしまふがないじゃないか、俺の姉貴のことなんて。

「放つとく」

と思いつつ、律儀に答えてる自分が何だか悲しい。

「放つとくつて……」

「だつてあんな状態の姉貴の相手なんてしてられないよ

「うちの話なんて聞こえてやしないし。下手すると意味不明なこと言い出すし。

「酔っ払いって理屈通じないし、そんなになるまで飲む方が悪いし。まあ、姉貴も年がら年中そうなるわけじゃなくて、年に一度か二度ぐらいだけど。寒い季節で寝てしまつたつてんなら、毛布ぐらいはかけてやるけど、後は放置」

バケツで冷水でも浴びせたら田が覚めるかなと思うこともあるが、実行したら後が怖い。よつて思うだけで実行はしていない。

「それでいいの？」

「姉貴は別にアル中じゃないから、次の日になれば、酔いも醒めて正気に戻つてるしさ。なんか話があるつてのなら、その時にした方が早いし」

酔っ払い相手に道理を説くほど、無駄なことはないと思つ。いや本当に。

「誰か潰れでもしたの？」

「こんなことを訊いてくるといつ」とは、昨日家に帰つた後で、誰かが酔っ払つてたんだろうか。

「……ええ、まあ」

酔っ払いの対処には慣れてないのかな。……つて、慣れてるのも、それはそれで問題あるよつた。

「ありがとう」

「お礼なんかいいよ、別に。これぐらいのことだ」

そう言つた後で、俺は、酔っ払つたのはお姉さんかもといつとに思い当たつた。四つ上ならもう成人してるわけだし、順当に行つていれば大学生だから飲み会ぐらいあるだろつ。

「巡音さん。もしかして、酔っ払つたのつてお姉さん？」

「あ……」

巡音さんは固まつた。……図星だつたようだ。

「え、ええ……」

昨日巡音さんが家に帰つた後で、酔っ払つたお姉さんが帰つて来

たのかな。普段あまり飲まない人なら、巡音さんがびっくりして混乱するのも無理はないかも。

「心配なら、なんで飲んでたのか後で訊いてみたら? うそばらしとかなら問題だけど、単に楽しくて飲みすぎたってんなら、放つといて大丈夫だと思つ」

「う、うん……ありがとう……色々と」

そんな話をしていると、教室に初音さんが入ってきた。真っ直ぐこっちにやつてくる。

「リンちゃん、おはよう」

「おはよう、ミクちゃん」

「じゃ、俺はこれで」

邪魔になつてもあれなので、俺は自分の席に引き上げることにした。それにしても、巡音さんのお姉さん、家にいるつてことは行方不明とか入院してるとかじゃないんだな。じゃあ、一体何なんだろう? 考えれば考えるほどわからなくなる。

来週から中間テストなので、部活は休み。授業が終わると、俺は真っ直ぐ家に帰ることにした。

家に帰りつく。姉貴は仕事なので、当然誰もいない。窓を開けて家中の空気を入れ替え、担当の家事をやつてから、俺は机に向かつてテスト勉強を始めた。

しばらくそうやって勉強に集中していると、不意に携帯が鳴り出した。かけてきたのは……クオだ。何の用だろ。この時期だから部活の連絡事項とかは無いはずなんだが。

「もしもし」

「もしもし、ちょっとといいか?」

「ああ」

なんか、普段と声の調子が違つ氣がするなあ、こいつ。

「来週、中間テストだよな」

そんなことを言つクオ。わかつてゐよそんな」とは。実際テスト 勉強中なんだし。

「……だから勉強中だよ。クオ、お前も勉強しといた方がいいぞ」 電話の向こうでクオが沈黙した。……どうしたんだ？

「クオ？」

そう言つと、クオはよつやく用件とやらを切り出した。

「……お前、中間明けに暇あるか？」

「あるナゾ。お前、遊びに行こうつて誘いなら今じゃなくともいいだろ」

つーか、このタイミングでそんな用件で電話していくか？

「じゃ、暇はあるんだな。つきあえ」

一気にクオの声が不機嫌そうになつた。……ん？ なんか変だな。

「つきあえつて、どこへ」

「遊園地」

「……お前と一人で？ 悪いけどそれはバス」

「俺とお前の一人のわけないだろ！.. ミクと巡音さんが一緒だつ！」

「あ～、そういうことか……。面倒くさい奴だなあ。

「今度はお化け屋敷に誘つてあわよくば抱きついてもらおうとか、そういう魂胆？」

またクオの首が絞まつしそうだな、その場合。

「んなわけあるかあつ！.. ミクが絶叫マシンに乗りたつて言つて んだよつ！..」

電話の向こうでクオが叫ぶ。ふーん、初音さんは絶叫マシン好きなのか。クオも好きだったよな、絶叫マシン。なら尚のこと一人で行けよ。

「遊園地に行きたいなら、初音さんと一緒に行ってくればいいじゃん」

「何も俺や巡音さんを巻き込まなくていいだろ？が。

「ミクが先に巡音さんを誘つたんだよつ！」

「三人で行こうねって？」

確かに今日もずっと話をしていたし、本当に仲がいいんだろうが……。

「そんな感じだ。女一人に男一人だとバランスが悪いだろ。そういうわけだから、お前も来い」

三人でねえ……初音さんがそう計画してるんなら、俺がついつてたら邪魔になりそうな気が。でも、自分とクオだけでもなく、自分と巡音さんだけでもなく、三人で行こうっていう意図は何なんだろう。

もしかして、初音さんは巡音さんとクオをつきあわせたいのか？自分の従弟なら信頼してるだろうし、親友を任せられるって思つてんのかな。けどクオが好きなのは、初音さんで巡音さんじやないわけで……。

巡音さんは、クオのことどう思つてるんだろう。そういうや聞いたことがなかつたな。クオの方が巡音さんのことを快く思つてなぐても、向こうは違うという可能性もある。

うーん……たまには、クオに協力してやるか。

「いいけど

「は？」

気の抜けた声をあげるクオ。……ちょっとからかいすぎたか。

「だから、遊園地の件。俺も一緒に行くよ」

「そ、そうか……ありがとよ。恩に着る」

「いいつて。それじゃ、俺はテスト勉強あるから

「ああ、頑張れよ。俺も勉強しなくちゃな」

俺は通話を切つて携帯を置くと、勉強に戻つた。

暗い表情の君を見たくない（後書き）

レンの誤解が妙な方向に進んでしまいました。  
……まあいいか。

次回はクオとミクのパートです。

## ミクの奔走

月曜の朝、わたしが教室に入ると、リンちゃんが鏡音君と話をしていた。見た感じだと、前よりもリンちゃんは打ち解けてきているみたい。……やつたわ！ クオにはお前の作戦全然効果なかつたじやないかとか言われたけど、なんだかんだで距離は縮まつていたのね。

わたしがリンちゃんにおはようと声をかけると、鏡音君は自分の席に戻つて行つた。もう少し話をさせておいてあげた方が良かつたかな。でも、声をかけないと、それはそれで不自然に思われちゃうしね……。さてと。

「リンちゃん、鏡音君と何話してたの？」

多分まだ世間話の類だろうけれど、一応確認しておかなくつちや。

「あ……えつと……オペラの話」

リンちゃんからは意外な答えが返つてきた。オペラかあ……わたしは、バレエは好きだけど、オペラは苦手。出てる人が、やたら年くつてたり太つてたりするのが、ちょっととね。バレエの方が見ていて綺麗なもの。やたら横幅のあるおじさんが王子様つてのは、わたしには受け入れがたい。そのおじさんが、愛の苦悩を切々と歌うとなるともつと……。

「オペラ？ 鏡音君つてオペラに興味あつたの？」

少なくともクオは、わたしがバレエを見ていても全然興味を示さない。だからこの答えは、わたしにはびっくりだつた。

「鏡音君が好きなミュージカルが、オペラを現代劇に翻案したものだつたの。だから、ちょっとその話を……」

「ふーん、そうなんだ……」

共通の話題があるのはいいことだわ。あ、そうだ。次の作戦、ここで実行しちゃえ。まずは怪我の状態の確認だわ。

「あ、ねえ、リンちゃん。そういうえば、足はどうなの？」

「一週間後には全快するでしょうって、言われたわ」

一週間後ね。そういえば、一週間後には中間テストが控えている。

ふむ、タイミングとしてはなかなかね。

「一週間後があ…… 中間テストよね。勉強してる?」

頷くリンちゃん。リンちゃんはなんだかんだで、いつも学年一番以内には入っている。すごいと思うのだけれど、リンちゃんはそう感じていない。中間ビックのわたしとしては、そうは思えないのだけれど。

さてと、作戦実行よつ。いい時はいい流れを引き寄せるものだから。

「ねえ、リンちゃん。考えたんだけ?」

「何?」

「中間テストが終わったら、ビックにぱーっと遊びに行かない?」

リンちゃんと遊びに行くのは、実はかなり久しぶりだ。八月に、二人でバレエの公演を見に行つて以来。もちろん、家にはもつとちょくちょく遊びに来ているんだけどね。リンちゃんのお父さんはやがましいので、行き先にも難癖をつけてくるのだ。

でもね、思うんだけど、黙つていればバレないわよ。まず、わたしの家に来てもらつて、それからお出かけすればいいんだわ。お父さんには、一日わたしの家にいましたつて言つておけばいい。仮にわたしの家に電話で確認を取つたところで、わたしのお父さんもお母さんも「一日、じつちで娘と一緒にいました」と言つてくれるわ。

「遊びに行くつて、ビック?」

「わたしは遊園地がいいな」

リンちゃんが訊いてきたのでそう答える。リンちゃんは困った表情になった。……このままだと断られる。そう思つたわたしは、リンちゃんの手をつかんだ。

「ねえ、行こう。きっと樂しいって」

「えーっと……」

リンちゃんは悩んでくる。じついう時は、押すに限る。

「わたし、リンちゃんと一緒に遊園地に行きたいなあ」

「…………」

リンちゃんは困った表情で視線をさまよわせているけれど、断りの言葉は口にしない。……つまり行きたいんだわ。もう一押し。「高校生活の思い出作りにことわりの。リンちゃんは行きたくない?」

「あ……あの…………ひょっと、考えさせて……」

それが、リンちゃんの答えだった。もう少し言葉をかねようとした時、始業のベルが鳴る。ああもう、邪魔しないでよ。わたしはリンちゃんに「考えておこうね」と強く言って、自分の席に戻った。

昼休みや放課後、言葉を飛ばして説得してみたけれど、リンちゃんから承諾の返事を引き出すことはできなかつた。とはいえて、「一旦考えさせて」と言ったところには、諒があるということ。わたしは家に帰ると、おやつを食べながら自分の部屋に戻つた。テスト前だから、勉強しなくちゃ……。

勉強を始めてすぐ、携帯が鳴つた。手に取る。あ……リンちゃんからだ。

「もしもし、リンちゃん?」

「あ、ミクちゃん。あのね……遊園地のことだけ、行くことになりたから。お母さんが、行つてもいいって」

リンちゃん、お母さんに相談したのか。でもまあ、行つてくれる気になつたのはいいことだわ。やつたやつた。

あ、そうだ。リンちゃんの着る物をどうにかしなくせ。

「良かったあー。じゃあリンちゃん、中間が終わつたらまず服を買ひに行こうね」

「え……ミクちゃん、服つて?」

電話の向こうから、リンちゃんのびっくりした声が聞こえてくる。だって、リンちゃんのワードローブって確か、そろそろ長こ服ばかり

りだつたはず。可愛いことは可愛いのだけれど、はつきり言つて機動的じゃない。

「リンちゃんの外出用の服つて、動きやすいものが一枚も無いでしょ？ 特にボトムはスカート系しかなかつたわよね？ 遊園地みたいなところに行くのは向いてないの…」

……あのお父さんのことだから、きっとリンちゃんのスカート丈も規制してるんだわ。

「心配しなくても、最近はパンツやジーンズだつて、おしゃれなや可愛いのがたくさんあるから。あ、靴もいるわね」

結構歩くから、しつかりした靴じゃないと辛い。ブーツかタウンウォーカー用か。幸い、どちらも可愛いのが最近はたくさん出ている。「上から下までゼーンぶ選んであげるから心配しないで。パンツ類よつ///ースカートにタイツかレギンスの組み合わせの方がいいかな？」絶対可愛いわよ

一度くらい、リンちゃん///ースカート履かせてみたかったのよね。

「あの……ちょっと、それは……」

リンちゃんの引きつった声が聞こえて来た。そんなに固くならないでよ。絶対似合つから。

「わかつてるつて。それはさておき、中間テストが終わつたら、その足でショッピングに直行よつ！」

テストの日は午前だから、最終日なら買い物に行く時間はたっぷりある。わたしは明るくそう言って、電話を切つた。最大の関門である、「リンちゃんを誘う」はクリアしたわ！ 次に進まなくちや。

わたしは自分の部屋を出て、クオの部屋へとダッシュした。「作戦はうまく行つたわつ！」と叫びながら、ドアを開けて中に飛び込む。机の前に座つていたクオが、びっくりした顔でこっちを見た。

「作戦つて、なんの？」

『氣のない声でわう言つクオ。ちょっと、忘れたとは言わさないわよ。

「もちろん、例の遊園地作戦よつ！ 今日リンちゃんに持ちかけてみたら、中間テスト明けと一緒に遊びに行くことで話がついたわつ！」

クオは「で？」とでも言いたげな表情でわたしを見ている。自分の役割忘れてないでしょ？ う。

「そういうわけだからクオ、鏡音君を誘う方お願ひねつ！」

こういう時は、はつきり言つに限るわ。クオ、時々鈍いから。

「そうかそうか。わかつたから、それじゃあな」

クオはやる氣のない口調でそう言つて、こつちを追い払う仕草をした。もづー これは、今すぐわたしの田の前でかけさせないと。

「クオ、今すぐ鏡音君に電話かけてつてば」

「はあ？」

「だつて、鉄は熱いうちに打てつて、昔から言ひづやない」  
思い立つたらすぐやらないとね。

「お前、俺が今何やつてんのかわかる？」

クオはそう言つて、机の上のノートや教科書を指差してみせた。  
あ、クオも勉強してたのね。

「テスト勉強？」

「わかつてんじゃねえか。あのな、俺はテスト勉強で忙しいの」

そう言つてまたしつしつと手を振るクオ。うー、それはそうだけど、でも、電話かけて予定確認するのなんて数分で済むじゃないの。それにさつきも言つたけど、クオの勉強が終わるまで待つていたら、クオは頼まれたことを忘れてしまつわ。

「えー、だつてクオ、やるつて言つときながら、やつてくれなかつたりするし」

「俺がいつそんなことをした」

むつとした表情で、そう言つてくるクオ。ちょっと、それも忘れてるわけ？

「一の前、クオが本屋に行つてくるつて言うから一緒に雑誌頬んだら、『OK、買つてくるよ』って答えておいて、結局自分の分だけ買つて来たじゃないの」

次の日に、自分で本屋に行く羽田になつちやつたわ。  
「だから今度は田の前でやつてもうつの！ でないとクオ、やらないでしょ？ そういうするうちに、鏡音君が他に予定入れちゃつたら困るし」

「あ～わかつた、わかつた！ カケリヤいいんだろ、カケリヤ！」  
クオは携帯を取り出して、電源を入れた。乱暴な言い方がちょっと引つかかるけど、かけてくれる気になつたんだからいいか。そんなことを考えながらわたしがクオを見守つていると、クオは不意に携帯を操作する手を止めた。

「ミク、ちょっと出ててくれ

「え～、なんでも？」

「お前が聞いてると思うと話しつらいんだよつ！」

わたしは廊下へと追い出されてしまった。……クオ、意外と神経質だつたのね。変なこと鏡音君に言わないといいけど。

しばらく廊下でクオの電話が終わるのを待つ。部屋の中からクオの「んなわけあるかあつ！ ミクが絶叫マシンに乗りたいって言つてんだよつ！」って絶叫が聞こえてきたけど、何言われたんだろう。ちゃんと誘い出してよね、クオ。

やがてドアが開いて、クオが出てきた。

「それでクオ、結果は？」

「OKだとさ。その代わり、四人で行くことは事前に説明したぞ。男一人で遊園地なんざ行きたかねえつて言われたから

よしつ！ 作戦成功つ！

「それはいいのよ、来てくれれば！ これで絶対上手く行くわ！  
クオありがとうつ！」

わたしは感謝の意を込めてクオに抱きついた。あれ……クオ、赤くなつてゐる。力が強すぎたかしら？

さてと、服のことも考えておかなくちゃね……わたしとしてはミニスカートをお薦めしたいところだけど、リンちゃんの性格を考えると難しいかなあ。下にタイツかレギンスでも履けば、下着が見えるようなことはないんだけどね。そもそもこの季節、何も履かなかつたら寒くて歩けないわよ。

わたしはあれこれと頭の中で計画を考えながら、自分の部屋へと戻った。

## ミクの奔走（後書き）

ミクは、どうやらこれを見たらしいです。

<http://www.youtube.com/watch?v=VOFltOX8iEc>

最初に映ってる人が「愛に苦悩する王子」です。え？ そう見えないって？ うーん、まあ、オペラ（特にイタリア物）だとよくあることなんですね。

ちなみに王子役をやっているのは、お亡くなりになられた世界一大テノールの一人、ルチアーノ・パヴァロッティ氏です。

## 自分の道を行けばいい

姉貴との冷戦は、結局次の日にはなし崩しに無かつたことになつた。……いや、仕方がないよ。同じ屋根の下に住んでいるんだから、そつそりいつまでも険悪ではいられない。色々と不都合も多いし。とはいえ、あれ以来、一人の間で巡音さんの話題が出たことはない。要するに、お互にまた険悪になるのが嫌だから、意図的に持ち出さないようにしているってことだ。だから普段どおりに戻つたといつても、なんとなく不穏といつか、張り詰めた空気はあつたりする。

そうこうするうちに時間が過ぎて、中間テストがやつてきた。姉貴と突っ込んだ話をしたくない、という理由で部屋にこもつて勉強していたため、今回のテストはいつもよりも出来がいいぐらいだった。ちょっと複雑だ。

「中間テストも終わつたことだし、俺、今度の日曜は出かけるから」テスト最終日の晩飯の席で、俺は姉貴にそう言つた。さすがに出かけるとなると、一応報告しておく必要がある。

「出かける? どこへ?」

当然、姉貴はそう訊いてきた。

「クオと遊びに行つてくる」

……嘘は言つてないぞ。クオと遊びに行くのは本当だ。それに初音さんと巡音さんも一緒つてだけで。

「気をつけて行きなさいよ。それと、日が落ちるのが早くなつてきているから、あんまり遅くならないよつにね」

出かける時は大体いつもこんなことを言われる。多分、姉貴が今の俺ぐらいの年齢の頃に言っていたんだろうけど……俺は女の子じゃないつてば。

「……あ、そうだわ」

「何だよ

「その日は私も出かける用事があつて、遅くなるかもしねないのよ。レン、夕食は一人で適当に食べてくれない？」

飲み会でも入ったのかな。たまにこうこうことがある。姉貴も社会人だからつきあいとか、色々あるんだね。

「わかった。それじゃ、日曜はそういうことだ」

そんなわけで、俺は姉貴に本当のことは言わなかつた。いいんだよ、嘘はついてないから。全部話さなかつたってだけで。

日曜日。俺は支度をして、クオの家に出かけた。何度見てもでかいな、この家。インター ホンを押すと、しばらくして、クオが出てきた。

「よつ、悪いな

「別にいいよ」

「巡音さんがまだ来てないんだ。中でちょっと待つてくれ」

「」の前とは違う部屋に連れて行かれる。置いてある家具からすると、ここが居間らしい。この部屋には初音さんもいた。

「鏡音君、こんにちは」

「こんにちは」

そういうや初音さんとともに喋つたことって、ほとんど無かつたな。同じクラスではあるんだけど。

とりあえずソファに座つて待つ。そんなにしないうち、「またインターホンが鳴つた。初音さんが立ち上がって誰が来たのか確認する」と、そのまま出て行く。どうやら巡音さんが来たようだ。

しばらくすると、初音さんが巡音さんを連れて戻つて來た。今日はスカートじゃなくてズボンなのか。まあ遊園地だしな。巡音さんがこっちを見て、驚いた表情になる。ん？ どうかしたんだろうか。「じゃ、そろつたことだし、出かけましょ

初音さんの言葉を聞いた巡音さんは、初音さんの袖を引っ張つた。

「何？」 リンちゃん

「あの……」

「四人で行くつて、言つてなかつたつけ？」

ちょっと待て。なんか妙な方向に話が行つてないか？ 巡音さんの困惑した表情を見る限り、俺とクオが一緒にすることは聞いてないようだ。

「人数多い方がああいつといひは楽しいのよ。や、行きましょ」

そんなことを言いながら、初音さんは巡音さんを引っ張つて出て行つた。……初音さんという人が、わからなくなってきた。

「なあ、クオ」

「なんだよ」

「お前……初音さんと一緒に絶叫マシン乗りたいんだよな？」

一応確認。

「……そうだよ、文句あるか」

「なаけど、疲れそうだなと思つて」

「つるせえ。それより行くぞ。出発が遅れると、ミクに怒られるからな」

クオのこともわからなくなってきた。……まあいや。人の趣味にあれこれ口を出すのは止めておいつ。

初音さんのところの車に乗つけてもらつて、俺たちは遊園地に向かつた。便利だな、こうこうのつて。クオには悪いが。

巡音さんはまだ混乱しているのか、車内ではほとんど喋らなかつた。俺とクオ、一緒で大丈夫だったんだろうか……。といふか、初音さんの意図はどこにあるんだろう。やっぱり、クオのことはただの従弟としか思つてないのか？

とかなんとか考えていると、遊園地に着いた。一日フリーパスを買って、中に入る。

「中間も終わつたことだし、今日は思いっきり楽しむわよー。まずはやつぱり、あれに乗らないとね

「元気よくそつと言つて、初音さんはジョット「コースターを指差した。

……本当に好きなんだな、絶叫マシン。」

「遊園地の華つて言つたら、やっぱあれだよな」

初音さんの隣で、クオがうとうと頷いていた。「どうせ、クオの言つたことは事実だつたようだ。映画の趣味は違つても、じつちの趣味は一緒らしい。」

「//ミクちゃん。あれに乗るの……？」

あれ？ 巡音さんが、こわごわとそんな声をかけていた。

「うん」

初音さんが「れまた元気よく頷いていた。一方、巡音さんは引きつっている。……もしかして、絶叫マシン苦手なのか？」

「わたし、あの手のはちょっと……怖くつて……」

「えーっ、折角来たんだし、乗りますよ」

ねべおどとそういう巡音さんに、初音さんが無茶な注文をしてくる。……お、おい。それはないだら、さすがに。

「いぬんなさこ、//ミクちゃん。わたし、コースターは無理……」

「うーん、でも……」

初音さんが残念げに「コースターを見やつている。クオはちひつとじつちを見た。えーと、クオに協力してやるつて決めたんだよな。「じゃ、初音さんはクオとあれに乗つて来たら？ イと巡音さんはじいじ待つってるよ」

巡音さんが驚いた表情でじつちを見た。一方で、クオが俺の言葉を後押しする。

「なんなら、じぱりく別行動にしねえ？ 折角だし、俺は色々と絶叫系乗りたい」

初音さんと一緒に、だろ。

「俺はいこよ。初音さんは？」

「リンちゃんさえよければ、わたしもそれでいいわ

あれ……意外なことに、初音さんはあつさり承諾した。そんなに絶叫系乗りたいのか？ それとも、俺の推測は外れていたんだろう

か。

「え……ええ」

そんなことを考えている傍で、巡音さんが頷いている。まあとにかく、そういうことで、ここから先は「手に分かれて行動することになった。

「じゃ、決まりっ！」

「そんじゃ、俺とミクは絶叫マシン連続記録作つてやる」

初音さんとクオは、嬉々としてジェットコースター乗り場へと向かつて行つた。俺と巡音さんが残される。

「あの……いいの？」

巡音さんが、おずおずと訊いてきた。

「何が？」

「コースター乗らなくて」

だつて、クオと約束……はしてないけど、協力することになつてんだよ。

「俺は別にいいよ。クオの邪魔はしたくないし」

とりあえず今日のところは初音さんと楽しんできてもらおう。本当に楽しいのかどうかはよくわからないけど。

「それより巡音さん、何に乗りたい？」

「えーっと……」

巡音さんは遊園地内を見回した。

「わたしは、あれがいいんだけど……」

巡音さんが指差したのは、メリーゴーラウンドだった。……ああ、こういうのが好きなのか。

「じゃ、行こうか」

俺たちは、連れ立つてそつちへと向かつた。

巡音さんは最初のうちは緊張していたのか表情が硬かつたが、段々落ち着いてきて、笑顔を見せてくれるようになった。……いいこ

とだよな、これって。姉貴の言つたことは当分忘れよう。大体、そんなにあてになりやしないんだよ、姉貴の考えなんか。

大人しめのアトラクションに幾つか乗った後、巡音さんはためらうがちにこう言い出した。

「あの……鏡音君」

「何？」

「わたし、ちょっとお手洗いに行つて来るから、待つてくれれる？」

生理現象は仕方がないだろう。俺が頷いたので、巡音さんはトイレのある方へと行つてしまつた。しばらく、その場でぼーっと待つ。そんな時だつた。不意に強い風が吹いた。その風で、誰かの帽子が俺の足元に転がつてくる。深い考えもなく、俺はそれを拾つた。持ち主は……。

「あ、すみません。それ、あたしの……え？ レン君？」

聞き覚えのある声に、思わず相手を見る……え？

「ユイ……？」

そこにいたのは、ユイだつた。ユイの他に、女の子がもう二人いる。片方は中学の時の同級生で、チカつて子だ。確かユイとは仲が良かつたつけ。もう一人の背の高い子は知らない。多分、高校に入つてからの友達だらう。

「久しぶり……」

ユイはそんなことを言つと、俺の手から帽子を受け取つた。確かに、一年前に別れてからずっと会つてなかつたしな。ユイの家は学校を挟んで俺とは逆方向だつたから、近所でばつたり、なんてのも無かつたし。

「……そうだな」

何をどう話したらいいのかよくわからず、俺はぶっきらぼうにそう言つた。というか、何を言えばいいんだこの場合。ユイはユイで、氣まずそうな表情でそこに佇んでいる。

「ねえユイ、知り合いで？」

背の高い子がそんなことをユイに訊いている。

「鏡音レン君。中学の時の同級生」

まあ、元彼とは言い難いか。ユイの方から俺を振ったわけだし。

「へえ、結構かっこいいじゃん」

声に出して言つなよ。俺にも聞こえてるだろ。ユイは困っている表情で、視線を明後口に向けている。

「ね、ねえ……ユイ、マナ、もつ行こうよ」

ユイの袖をチカが引っ張つた。……そういうや、チカは俺とユイがつきあつてたことを知つてるんだっけ。当然、別れたことも知つてるよな。確かにこの二人は同じ高校に行つたはずだし。

「え、なんで？」

マナという名前らしい、背の高い子がそう言ひ。怪氣読めないのか、こいつは。

「どうか、そつちは一人なの？」

「はあ？ 一人でこんなところ来るわけないだろ。

「連れがいるよ。今ちょっと外してるだけで」

早く戻つて来ないかな。混んでるんだろうか。女子トイレつて異常に混んでる時があるんだよな。前に姉貴がぼやいてた。

「実はユイ、失恋したばっかりなんだよ」

マナって子が、俺に向かつてそんなことを言い出した。え？ 失恋？

「おいユイ、お前、他に好きな奴ができるとか言い出して俺と別れたのが、大体一年前だろ。それなのにもうそつちも駄目になつたわけ？」

あまりにびっくりしたので、俺はユイに向かつて思わずそう訊いてしまつた。ユイがびくっとした表情になる。あ……しまつた。口が滑つた。

「あ……悪い」

「ううん、いいの……」

「ううん、いいの……」

げつ、泣きそうだ。参つたな……ややこしくなってきた。

「え？ 一人つて、前につきあつてたの？」

「だ～か～ら～、空氣を読めと言つてんだらうが。

「うん。一年前にハル君のこと好きになつちやつて、レン君とは別れたの」

コイがマナとやらにそつ説明している。ハル君というのが、コイが俺と別れた後につきあつていた奴らしい。

「へえ～。それがこんなところで再会するなんて、何か運命を感じるよね」

はあ？ 何を言い出すんだこいつは。

「二人にもう一度つきあえつていう、神様の思し召じじゃないの？」

「なんだそりや。何をどう考えたらそついう理屈が出てくるんだ。

「そんなん……レン君に悪いよ。だって、あたしが振ったんだよ」

「コイ、失恋の特効薬は新しい恋つて言つでしょ？ まあこの場合新しくはないけど、いい機会じゃないの。結構いい男だし」

「あのなあ……思い切りこつちに聞こえてるんですけど。というか、コイ、友達選べよ。なんだよこの団々として生き物は。

「といつわけで、一緒に回らない？」

「俺、連れを待つてるところだつて、さつき言わなかつたつけ？」

大体、人見知りの強い巡音さんを、全然知らない人たちと一緒に連れ回せるかい。特にこんなのが混じつてちゃ。

「その人も一緒でいいし。ねえ、コイのこと可哀そうだと思わない？」一度はつきあつた仲でしょ？ まだ未練とかないの？」

ある意味賞賛に値するのかもな、この団々として。どうやつたらこんなのができるんだるつ。けどな、コイとチカがお前の隣で困つてんのに気づけよ。それにしても巡音さん、まだ戻つて……あ。少し離れたところに、巡音さんがいた。戻つて来たものの、俺がこいつらと話しているせいで、声をかけるタイミングを失つたらしい。そこで遠慮なんかしないでくれよ。……巡音さんの性格じゃ無理か。……あ、そうだ。

「リン、遅い！」

俺はそう叫んで、巡音さんの方へと駆け寄った。巡音さんが驚いた表情になる。

「「」めんなさい、お手洗いがひどく混んで……」

俺は巡音さんの手を握った。

「じゃあ行こうか」

「……その子、誰？」

空氣の読めない子がそう訊いてきた。コイとチカの一人は、察したのが困っている。

「誰つて、見りやわかるだろ？」「

思い切って巡音さんの肩を抱き寄せる。巡音さんが、驚いたのか、びくっと身をすくませるのがわかつた。……「」めん。後でちゃんと説明するから。

「だから誰？」

「あ～の～な～、「」までわれたら普通は察するつてのー。なんなんだこの子。」

「あの……鏡音君、「」ちらは知り合いなの？」

「げつ、巡音さんの方まで訊いてきた。「」や、不審に想つのはもつともなんだが……。」

「中学の時の同級生だよ。……それじゃ、俺たちは「」れで」

俺はそれだけ言つと、巡音さんを連れて立ち去つとしたが、空氣の読めない生き物はしつこかつた。

「ねえ……冷たいんじゃな」「」の？」

「なんでこんなに鈍いんだ」「」つは。

「マナ……もうやめてよ。気持ちは嬉しいけど、レン君は迷惑してるよ。だって……「」テートの最中なんでしょう？」

「コイがそんなことを言つ。巡音さんが「え？」とでも言つたげな表情でこつちを見た。さゆと肩を抱き寄せ、その耳に囁く。

「悪いけど、今だけ話あわせてくれ」

……巡音さんが耳まで赤くなつてゐる。悪いことをしてしまつた。そう思いつつ、コイたちに向かつて「」づ。

「そういうこと。だから、邪魔しないでくれ  
俺は巡音さんの肩を抱いたまま、ユイたちを残してその場を離れ  
た。

## 自分の道を行けばいい（後書き）

この作品のレンは、頭がいいという設定ですが、意外と自分のことはわかつていなかつたりします。

まあ、一から十まで最初から全部わかつているようだと、小説にならなかつたりするのですが。

なお、レンの元カノと友人二人はオリジナルキャラです。

例のしつこい子も、それ以上後を追いかけてくるよつなことはなかつた。まともな感性の持ち主なら、この後はむしろ逆方向へ行くだろう。しつこい子はともかく、コイとチカはまともなはずだし。充分距離を取つた辺りで、俺は巡音さんの肩を抱いた腕を外した。巡音さんはまだ顔が赤い。

「……ごめん、変なことに巻き込んでじゃって」

「ね、ねえ……何だつたの、今の？　あの子たち、中学の同級生つて言つてたけど……それに、わたしとトーク中つて、ビーチしてそういうことになつたの？」

巡音さんは、軽いパーカになつていた。えーと……。

辺りを見回すと、すぐ近くにジュースとかを売つているスタンドがあつた。テーブルと椅子も何組か置いてある。

「ちょっと座ろうか」

俺は巡音さんを引っ張つて、椅子の一つにかけさせた。なんか飲む物でも買つか。スタンドの方へと向かう。

「巡音さん、何飲みたい？」

「あ……じゃあ、オレンジジュースを」

俺はスタンドでオレンジジュースとコーラを一つずつ頃つて戻ると、巡音さんにオレンジジュースを手渡した。

「……ありがとう」

受け取つてから、巡音さんはほつとした表情になつた。

「あ……お金……」

「いいよ、これぐらい。迷惑料つてことで」

そう言つと、俺は巡音さんの向かいの椅子に腰を下ろした。

「でも……」

「だからいいって。で……やつきのことだけど」

ジユース代”ときでもめるのが嫌だった俺は、強引に話を先に進

めることにした。

「さつきの子たちは、俺の中学の時の同級生。で……まあその、なんていいうか……そのうちの一人と、俺、前につきあってたわけ」  
巻き込んだじゅつた手前、ちゃんと説明はしようと思つてたんだが  
……いざ話し始めてみると、非常に話しにくかつた。なんでだろ。

「さつきずっと喋つてた、背の高い子？」

「いや、それじゃないよ。髪を垂らしてた子の方」

言つてから、「それ」は無いかなと思つた。……いやいいか、どうでも。

巡音さんは視線を落としている。また考え込んでいるらしい。こうこう時はせかさい方がいいので、俺は黙つて巡音さんがもう一度話し出すの待つた。

「どうして……わたしとデートをしている振りをしたの？」

ようやく口を開いた巡音さんは、こんなことを訊いてきた。

「一緒に回らないか、つて言われちゃつてしま。コイ　あ、俺の前の彼女の名前ね　は嫌がつてたけど、あの背の高い子、しつこくつて。デート中だつて振りをしたら、諦めてくれるだらうと思つたんだよ」

異常に察しが悪くて苦労したけど。あれだけやつたら、大抵はデート中だと思うだらうな。

「え……別れたのに？」

怪訝そうな表情で、巡音さんが疑問を口にした。まあ、確かにそう思つだらうなあ。

「そうだよ」

「それなのに、どうして？」

えーと……多分、最初から全部話さないとわからないだらうな。はあ……気が重いけど、やるしかないか。

「長い話になるけど、いい？」

巡音さんが頷いたので、俺は前提となる事情を話した。コイとつあつていたことや、別れた理由についてだ。別れてからはずっと

会つてなかつたのに、こんなところで再会してしまつたことも。

「俺も氣まずかつたし、コイもそうだつたと思うんだけど、あの友達の子がえらく空氣が読めなくてさ。なんかコイ、新しい彼氏とも最近馴れになつたらしくて。話の流れで俺たちがつきあつていたことがわかつちやつたもんだから、どうも、よりを戻させようと必死になつちゃつたみたいなんだよね」

あの変な生き物につきまとわれたせいで、妙に疲れた気がする。

……まだ午前中だつてのに。

「鏡音君の方は、それでいいの？」

「何が？」

「コイさんのこと、まだ好きだつたりとかしないの？ マルチエロやマークは、別れてもまだ相手を想つてしたりするけれど、そういうのは？」

いや、幾ら俺が『REN-T』が好きだからって、そこまでは……。正直言うと、ここしばらくは思い出しすらしなかつたんだよな。一年経つてるし。

「別にそういうのはないよ」

巡音さんは暗い表情で俯いている。……余計な気使つてんのかな、これは。

「大体、うまく行くとは思えないんだよ。俺とコイは、高校入つてからぎくしゃくしただけで。問題原因がそのままなのに、勢いでより戻したつて、また同じことの繰り返しになるだけだと思う」歯車が噛みあわないような感じが、ずっとあった。何がいけなかつたのかは、よくわからないけれど。だからコイから「他に好きな人ができた」と言われた時も、むしろ「仕方ないか」と思ったのを憶えている。

「でも……」

「あのね巡音さん、俺、あの場から逃げるのに巡音さんを利用したわけ。未練があつたら逃げるなんて行動取らないってば。むしろ俺に怒つていいくらいだから、そんな風に思いつめた顔しないでほし

いんだけど

何でこんなことになつたんだよ。これもあの空氣の読めない生き物のせいだ……多分。

巡音さんはまだ思いつめた表情をしてくる。「えーっと……そもそも俺が巻き込んだわけだから、「この話はもう止めよう」って言つわけにも行かないよなあ。どうしたもんか……。

「あの……鏡音君」

俺が頭を悩ませてこると、巡音の方が口を開いた。

「何?」

「恋をするのって、どんな感じ?」

「この上なく真面目な表情でそう訊かれ、俺は返事に詰まつた。……といふか、それを俺に訊くか!?

「オペラにもバレエにも、恋を扱つたものってたくさんあるんだけど……わたし、実感が無いからよくわからないの。恋をするのがどういう感じかって」

まあ、そりゃあ……映画だって恋愛を扱つたものは多いし。それ以外の映画でも恋愛が出てくることが多いし。ついでに言うなら学祭でやつた舞台にも恋愛シーン、あつたし。けどなあ……それを俺に訊かれても困るぞ。

「初音さんはそういう話をしないの?」

女の子同士である話じゃないのかなあ、そういうのは。初音さんは女の子らしい趣味だし、その手の話題が日常的に出てこなうだけだ。

「ミクちゃん? 少しあるナビ、ミクちゃんもまだ誰かとつきあつたことはないから……」

ふーん、そうなのか。じゃあ、クオにもチャンスはあるのかな。あれ、ちょっと待て。

「初音さん、つきあつた経験ないわけ?」

あんなにモテるのに。少なくとも、クオに「初音さんとの仲を取り持つてください」と頼みに来た奴が大勢いたのは確かだ。全員ク

オに「自力で告白できな奴に、ミクとつまみうつ資格はない…」って、断られたけど。

「ええ」

「告白されたことなんてしようぢやないの？ ほら、初音さんって田立つだろ。確か去年も今年も、学祭のミスコンで一位だつたし」

巡音さんは首を横に振った。え？

「ミクちゃん、告白されたことなんて一度もないはず。前に言つていたもの。一度くらい、ドラマか漫畫みたいな告白をされてみたいがあつて」

うーん、初音さんの周りで何が起きているんだろう。まさかとは思うが、クオが影で何かやつてるんぢや……。

「そういうわけだから、わたしの周りに、現実に恋愛した人つていなくつて……」

俺が初音さんの周りの状況について考えている間に、話は元に戻つてしまっていた。

「お姉さんは？」

姉貴は恋愛に興味が無いのか、今のところ男の気無しの生活を送つていて。が、コイとつきあつていた当時、俺の方が相談を持ちかけたことならあつた。お姉さんから、何か聞いたりとかはしないんだろうか。

「ハク姉さんは女子高だつたし……ルカ姉さんは婚約してるし……」  
巡音さんのところはお姉さん、二人いるのか。一人だから上に名前つけて呼んでるんだな。

「婚約者がいるんなら、恋愛したつてことじや？」

「ルカ姉さん、お見合いなの」

「…………」

ひょっとして家と家の結婚つて奴か！？ 今時、そんなことをやつていいところが現実にあるとは……。

「で、でも、婚約したつてことは、相手の人気がに入つたんだろ？」

「ひょっとして家と家の結婚つて奴か！？ 今時、そんなことをやつていいところが現実にあるとは……。

「で、でも、婚約したつてことは、相手の人気がに入つたんだろ？」

「お父さんが強く薦めてたから……わたしのところは三人姉妹だから、長女のルカ姉さんは婿を取つて会社を継がせるつて、神威さんなら、申し分ないって」

もはや俺は話についていけない……。といつか巡音さん、そういうことをなんでもないみたいな口調で話さないでくれ。いや、巡音さんのせいじゃないけど。

「繰り返しになるけれど、わたしの周りには現実に恋愛をした人っていないの。だから、こうこういうことを訊ける人がいなくつて……恋つて、どんな感じなの？」

巡音さんは相変わらず真剣なまなざしで、こっちをじっと見ている。参ったな……。どう答えたもんか……。

そもそも、俺はなんでコイとつきあつてたんだっけ？

「うーん……俺とコイは中三の時に委員会が一緒で、それで仲良くなつて、秋頃にコイが『好きでした』って言ってきて、それでつきあおうかつて話になつたんだけど、何せ中三の秋だろ。受験に追われてろくにデートする暇もなかつたんだよね」

「デートできないと恋つてできないものなの？」

「うつ……。悪気は全然無いんだるうけど、なんだか痛いとこを突かれた気がする……。

「できないつてことはないだろうけど、継続に響くんだよ……多分。俺はともかく、コイは淋しかつたのかもしないし。同じクラスだったから毎日顔はあわせてたけど、話題の半分は受験だつたからなあ。出かける時も三回に一回は図書館で一緒に勉強してたし」

思い返してみると、コイとの会話は勉強のことばかりだった。コイはもつと違うやりとりがしたかったのかな。

「受験が終わつてからは？」

「……それが問題でさ」

俺はため息をついた。考えてみると、あれがケチのつきはじめだったのかも。

「俺とコイ、志望校が違つたんだよ。偏差値に差があつたから仕方

がなかつたんだけど。コイの奴、無理して俺と同じ高校受けて、で、落ちたわけ

巡音さんは一瞬目を見開いて、それから伏せた。

「……コイさん、きつとすじく辛かつたんでしょうね

「ん……？ えらく声が暗いな。

「大泣きされたよ。……学校の先生にも塾の先生にも『無理』と言っていた勝負ではあつたんだけど、コイは奇跡を信じたかったみたいで。春休みの間は、一緒に高校に行きたかったのに、つて、そんな話ばかりされてた」

「なんだか……悲しい話ね……」

しみじみとそう言われてしました。……『めん巡音さん、本音を言わせてもらひと、俺としてはそこまで悲しくないんだが。過ぎたことだし。

「鏡音君は、悲しくないの？」

真面目な表情で巡音さんが訊いてくる。『、うーん……。

「『めん、俺はそんなに……』

「自分の恋が終わったのに？」

「巡音さん、現実の恋はオペラとは違うんだよ」

オペラの見すぎなんぢやないだらうか……。

「けど、鏡音君はコイさんのことが好きだつたんでしょう？」

言われて俺は考え込む羽田になつた。コイのことか……。

「まあ、嫌いじやなかつたけど……」

嫌いだつたら告白された時に承諾はしない。

「あの……鏡音君。『好き』と『嫌いじやない』って、イコールで結べるものなの？」

……へつ？ 思つてもみなかつたことを訊かれたので、俺は呆気に取られた。巡音さんは、俺をじつと見ている。

「えーとね……例えば、『クッキーは好きですか？』って訊かれたとするわよね。その時『嫌いじやない』て答えるのと、『好き』って答えるのと、何だか同じとは思えないの……」

言葉が足りないと思つたのか、巡音さんは説明を始めた。

「わたしの手元にクッキーがあつて、誰かにあげるとしたら、『嫌いじゃない』って言う人より、『好き』って言ってくれる人にあげたいし……」

「うーん……確かに、そう言われるとその言葉は、イコールで結べない感じがするな……」

……じゃ、俺は、コイのことが好きじゃなかつたつてことか？いや待てよ、好きじゃない奴とつきあうほど、俺も暇じゃないぞ。じゃあ、俺はやっぱりコイのことが好きだつたのか？あれ？あれ？

変だよな、これつて。つきあつてた相手のことを、こんな風に思うのは。俺がそんなことを考へていると、不意に賑やかな声が割つて入つた。

「あ～っ！ 鏡音先輩だっ！」

「あ～っ！ 鏡音先輩だっ！」  
「あ～っ！ 鏡音先輩だっ！」  
「あ～っ！ 鏡音先輩だっ！」

「あ～っ！ 鏡音先輩だっ！」  
「あ～っ！ 鏡音先輩だっ！」  
「あ～っ！ 鏡音先輩だっ！」

「グミヤ先輩、見てくださいっ！ 鏡音先輩が女の子と一緒にいますよっ！ もしかして先輩方もテートかも！？」

相変わらず声が大きいなあ……俺はため息混じりに振り向いた。少し離れたところに立つてゐるのは、演劇部のグミヤとグミだ。「も」つてことは……ここからトーント中か。結構、つきあつことになつたらしい。

「鏡音君、あの一人は……」

「演劇部の子たちだよ。躍音グミヤと、活音メグミ」

巡音さんに訊かれたので、俺は簡単に説明した。グミヤとグミが連れ立つて、こっちにやってくる。

「あ～、レン、すまん。俺は声をかけない方がいいと思つたんだが

「いいよ別に。で、お前、グミとつきあうことにしてたの？」

グミヤは明後日を向いて、頭を搔いた。顔が少し赤くなっている。

「そりでーすっ！」

「これはグミの方だ。グミヤの腕に抱きついている。

「それで鏡音先輩、そっちは先輩の彼女さんですかっ！？」

……頭が痛くなってきた。あの空氣の読めない生き物も困るが、

グミみたいなものも困る。男と女が一人でいたらカツブルなのか！？

巡音さんの方を見ると、例によつて困つた表情をしている。

「初めましてっ！ 演劇部一年の活音メグミ、みんなにはグミって呼ばれますっ！」

俺が内心で頭を抱えている傍で、グミが巡音さんに自己紹介をしている。

「あ……初めまして。巡音リンです。鏡音君と同じクラスなの」「そしてこっちが、演劇部部長の躍音グミヤ先輩ですっ！ あたしの彼氏なんですよっ！ 彼氏……いい響きですよね」

グミヤをみつめながら、グミはそう言つた。俺としては、ため息しか出でこない。なんか、今まで以上にテンションが上がつてないか？

「あの……活音さん……」

「あ、グミでいいですよ。みんなそう呼んでますし。『活音さん』なんて呼ばれると、あたしじゃないみたいで」

そういうやこいつ、演劇部に入部して初日には、全員に自分のこと

「グミ」って呼ばせてたよな。ある意味すごい。

「あの……でも……わたしたち、初対面だし……」

「そんな他人行儀な呼ばれ方は嫌いなんです」

……他人だろ。はつきりきつぱり。

「じゃ、じゃあ……グミちゃん」

「はいっ、何ですか？」

グミを呆れつつ眺めている俺の傍で、巡音さんがグミに疑問を投げかけている。

「グミちゃんて確か、学祭の舞台で、愛に田覗めたロボットの役をやってなかつた？」

あ、あの時の舞台、見てたのか。初音さんも一緒にたんだろ？

な。クオも出てたし。

「そうです、あれはあたしです。そして、あたしの相手役をやつたのがグミヤ先輩です」

グミヤがやつた役は、出番多くないから本当は一年の部員がやるはずだったんだよなあ。それなのにグミが「グミヤ先輩と舞台の上でラブシーンやりたい」とか、無茶なこと言ひ出して。なぜか演劇部の女子部員全員がグミに同調して、グミヤの役は変更になってしまった。本当はもっと出番の多い役をやるはずだったのに。そして……グミヤがやる予定だった役、よりもよつて俺がやる羽目になつたんだっけ。何なんだよみんなして、「ジジイの役は嫌」つてのは。

「舞台の上でもそういう役回りで、現実でも恋人同士なの？」

「恋人同士……いい響きですよね、グミヤ先輩」

あ……またトリップしてるよ。大丈夫なのか。

「あの……グミちゃん……」

「えへへ……あの時はまだあたしの片想いだったんですけど、学祭が終わってしばらくしてから、グミヤ先輩があたしとつきあうことをしてくれたんですよ。あの舞台がきっかけなのかも！」

楽しそうにグミはそう言ひている。グミの頭の中で、あれは「ロマンティックな恋愛物」という位置づけになつていてるようだ。社会への警鐘を含んだ「ラックな話のはずなんだが……」。

「それで、巡音先輩と鏡音先輩は、いつからつきあつているんですか？」

え、という感じで固まる巡音さん。ああもひ、訂正しかないと、

明日には学校中に噂が広まりかねないな。

「別につきあつてないって。一緒に遊びに来ただけで」

「こんなところに一人で遊びに来て、それでデートじゃないんですねか？」

「二人じゃないし。クオと初音さんも一緒。一人とも絶叫マシンに

乗りに行つてゐるから、今ここにいないだけで

そういうやあの二人は、まだ絶叫マシンを堪能してゐるんだろうか。変な遭遇のせいで、二人のことを忘れかけていたぞ。

「あれ、クオの奴も来てんの？」

グミヤが訊いてきた。

「ああ。さつきも言つたけど、絶叫マシンの連続記録作つて、初音さんと一緒に行つちやつたよ」

俺がそうグミヤに言つてゐる傍で、グミヤは巡音さんを興味深そうに眺めている。……嫌な予感。

「巡音先輩は、鏡音先輩のことなどをどう思つててるんですか？」

「え？ な、なにが？」

「だから、鏡音先輩のことをどう思つてゐるのかって話ですよ。鏡音先輩、割とお得だと思ひますよ。もちろんグミヤ先輩には負けますけど……」

割と、つてのは何なんだよ。そりゃこいつの頭の中が、グミヤ一色なのは知つてるが……。俺は横目でグミヤを睨んだ。グミヤが申し訳無さそうな表情で、グミを引っ張る。

「グ、グミ。そろそろ行こうか」

「えへ、あたしまだ話してたいです」

おーい、グミヤ。お前、彼氏なんだからどうにかしらよ。俺の気持ちが通じたのか、グミヤはグミを引き寄せ、何やら耳に囁いている。グミは顔を赤らめ、急に大人しくなった。

「それじゃ、邪魔して悪かったな。俺とグミはもう行くから」

「それでは、失礼します。先輩方も楽しんでくださいね」

グミヤとグミは去つていった。……やれやれ。

しばらく脱力していると、今度は携帯が鳴り出した。あれ？ 俺のだけじゃないぞ。巡音さんのも一緒に鳴つてゐる。

とりあえず自分の携帯を取り出す。クオか。「ミクが宣は一緒に食おうつて言つてゐるから、合流しよう。いつちは観覧車の近くにいるのか。もうそんな時間なのか。

「ミクちゃんが、お腹（はら）はんにしないかって」

自分の携帯を確認した巡音さんは、そう言った。

「（ひ）ちもクオから、同じ内容」

メールを送るのはどちらか片方でいいような気がするんだがなあ。そんなことを考えていると、巡音さんが口を開いた。

「ねえ、鏡音君」

「何？」

「一緒に鳴るのがって、『RENT』にあつたわよね。携帯じゃないけれど」

そう言って巡音さんはくすっと笑った。ANTブレイクのシーンか。ロジャーとミミのつけてるタイマーが同時に鳴り出して、それで一人ともエイズだつてわかるシーンだ。

やっぱり笑つてた方がいい。けど、巡音さんの笑顔はすぐに消えてしまった。

「……巡音さん？」

「あ……ごめんなさい。ちょっとと考えちゃったの。ロジャーとミミを結びつけるのがエイズだつていうのは、何だか悲しいなって」『RENT』のストーリーを思い出して、しんみりしてしまつたらしい。一人を結びつけたのはエイズ……か。そういう風には、考えたことがなかつたな。

「どうしてラーソンは、両方ともエイズにしちやつたのかな。先が無くて、悲しいのに」

「ラーソンの周りにはエイズで亡くなつた人が大勢いたし……それに、両方がエイズだつたから、あのラストに繋がるんじゃないのかな。多分、ロジャーとミミの間にある絆は、ロドルフオとミミにあつたものより強かつたんだよ」

巡音さんは真面目な表情で、また考え込んでいる。いつもやつてこつちの言つことを、一つ一つきちんと受け止めてくれるのが、なんだか嬉しい。

「悲しいことと嬉しいことが、たくさん同時にあつた人だったのか

「な  
だ  
う  
ひ  
う  
ね

## 青春の光と影（後書き）

全員横並びに同じ年というのもちょっと淋しい気がしたので、グリは一つ下にしてみました。

レンの方も今回はあれこれ悩んでいますが、まあ、悩んで人は成長するものだと思うのです。……ある程度まではね。

## 「ここにいるよ忘れないで

昼は初音さんとクオと合流して、四人で取つた。一人とも午前中ず一つと絶叫マシンに乗つていたらしく、なんというか、ハイになつていた。人はあの手のものでもハイになれるらしい。

ついでなので、クオにグミヤたちと会つた話もしておぐ。クオもあの「人がつきあつていたのは初耳らしく、驚いていた。

「へえ、グミヤとグミがねえ……今度グミヤに会つたら、これをネタにからかつてやるか」

……俺がそれをやつたら、巡音さんとはどうなんだつて訊かれて藪蛇になるな。クオと初音さんは従姉弟だから、一緒に遊びに行つても誰も変に思わないだろうけど。まあ、そのせいで、クオは初音さんに「ただの従弟」としか思われてないわけだが……。

「お前、午後はどうするの？」

「もちろん、絶叫マシン連続記録更新に挑むに決まってるだろ」

そうですか。何なんだその記録。まあいいか。俺はちらりと隣に目を向けた。初音さんと巡音さんが、楽しそうに話をしている。話題は……あれ、あつちもグミヤとグミのことみたいだ。

「初音さん、巡音さん。午後はどうする？ クオは絶叫マシンの連續記録更新に燃えているみたいだけど」

俺は念のために、二人に声をかけてみた。女の子たちがこっちを向く。

「ミク、お前、当然逃げたりしないよな」

初音さんに向かつて、クオが言つ。何やつてんだお前。

「受けて立つに決まつてるじゃないの。クオこそ、途中で音を上げないでよね」

賭けでもやつてんのか、この二人は。……まあいいか。それが楽しいって言つんなら

あ……ことは、俺は午後も巡音さんと一人つきりか。巡音さん

の方に視線を向けると、向こうも同じことを考えていたのか、視線があつてしまつた。巡音さんはそのまま、下を向いてしまつ。……一応、確認しておこう。

「巡音さん、午後も俺と一緒にでいい？」

「断られたら嫌だなあ。状況的に断られたりはしないだろうけど。

「わたしはいいけど……鏡音君は、それでいいの？ わたしと一緒にだと、コースターとかには乗れないし……」

それを気にしてたのか。大したことじやないから構わない。

「別にいいよ。コースターだけがこうこうとの楽しみじやないし  
れ」

俺がそう言つと、巡音さんは見るからにほつとした表情になつた。そこまで気を使わなくともいいのにな。

昼を食べ終わると、クオと初音さんはまたしても絶叫マシン巡りに行つてしまつた。食後三十分ぐらいはあの手のものは止めた方がいいと思うんだが。まあ、食べ終わった後も、しばらくあそこで喋つてたから、大丈夫か。

俺は巡音さんと一緒に、大人しめのアトラクションを回つていた。午後はこのまま、何事もなく過ぎてほしいもんだ。間違つても、また、妙なのに遭遇するという事態だけはやめてほしい。

遊園地の中を移動中、ショッピングの前を通りかかった。巡音さんがその前で立ち止まる。

「鏡音君、ちょっとショッピングに寄つてもいい？」

「いいよ」

俺たちはショッピングに入った。巡音さんは棚に並ぶお土産を、手に取つて眺めている。……長くかかるかな、こりや。大体、女の子の買い物は長いと相場が決まつてゐる。うちの姉貴ですら、かなり長い。コイはもつと長かつた。……まあいか。今日はこっちにつきあつて決めたんだから。

巡音さんは、ピンク色をしたうさぎのぬいぐるみを手に取って、じっと眺めている。……何だか淋しそうな顔してるけど、あのぬいぐるみがどうかしたんだろうか。

「買つの？」それ？「

気になつた俺は、声をかけてみた。

「…………ううと、いい」

巡音さんは首を横に振ると、ぬいぐるみを棚に戻して、レジに行つてしまつた。そんなにしなこうとに、戻つて来る。

ショップを出て、また歩く。すぐ近くに、ミラーハウスがあつた。

「入つてみる？」

お化け屋敷みたいにびざつくないから、多分平氣だらう。巡音さんが頷いたので、俺たちは一緒に中に入つた。

このミラーハウスは外の光が入つてこない作りなので、中は全体的に薄暗い。あちこちに色のついた明かりが点つ正在ので、歩くのに支障があるわけじゃないけど。幻想的というか、そういう感じを出したいんだろう。

「綺麗ね…………」

巡音さんはそつ言つて、鏡に映る光を眺めている。ここが気に入つたようだ。

そういうや『鏡』つて映画あつたな。映像は独特で綺麗だつたけど、話の中身は難しすぎてよくわからなかつたつけ。

「巡音さんは、鏡つて言わると、何を思い出す？」

「子供の頃に読んだ童話かな」

それが巡音さんの答えだつた。童話か…………。

「『鏡の国のアリス』とか？」

さすがにこれくらい有名な作品だと、読んだことぐらいはある。

「それもあるけど、真つ先に思い出すのは、わがままなお姫様の出でくる話」

お姫様とか、その手のが出でくる話は守備範囲外なので心当たりが無い。巡音さんはそういうのが本当は好きなのかな。

「卵みたいな形の部屋が出てくんだけど、鏡と良く似た何かでできてるの」

鏡でできた球体の部屋？一瞬『鏡地獄』が頭に浮かんだが、そのイメージを頭から追い払う。多分そういうのじゃないだろう。

「鏡と良く似た何かって？」

「どうか、鏡じゃないわけ？」

「そうとしか書かれてなくって……」

具体的に何なんだろう。ただのガラスってわけでもないみたいだし。ファンタジー系の童話みたいだから、「とにかく不思議な素材」ってことなのかな。

「何か見えたりするの？」

「……怖くて恐ろしい何か」

悪戯っぽい笑顔を浮かべて、巡音さんはそう言った。こんな表情、することもあるんだ……。巡音さんのことが、わかるようだわからない。

「あ……わかりにくかった？」

つい無言になってしまったのを、勘違しされてしまったようだ。

何か喋らないと。

「いや、そうじゃなくて……巡音ちゃんって、そういうふうな話をみたいのが好きなんだ」

「……本当はね。オペラだつて、ピッチャーーやゴヨウティよりも、ロッティーの方がずっと好き」

前にこういう質問をした時、巡音さんは黙り込んでしまって答えてくれなかつたつけ。巡音さんが口を開ざしていた理由はよくわからぬけれど、喋ってくれるよつになつたのは嬉しい。

「……ありがと」

不意に、巡音さんはこつちを真つ直ぐに見て、そう言った。

「急にどうしたの？」

「色々、してもらつちゃつたから」

「えーと……そんな大したことじゃないんだから、かしこまらなく

てもいいんだが。

「そんな気にしなくていいよ。友達だろ？」

俺がそう言つた時だつた。急に室内の明かりが消えて、真っ暗になつた。何だ？ アトラクションの演出……なわけないよな。停電だろ？ 停電なんて珍しいな。遊園地全体つてことは考えにくいから、この建物のブレーカーでも落ちたのかな。

「え……？ な、何！？ 何なの！？ 何が起きたの！？」

すぐ近くから、巡音さんのひどく慌てた声が聞こえてきた。

「巡音さん落ち着いて。多分停電か何かだと思う。しばらく待つてればまた明るくなるって」

配電盤でも壊れていたら別だが、その場合にしたつて、係員が懐中電灯でも持ってきて誘導を始めるだろ？ 向こうだつて大事は避けたいだろ？

「なんで真っ暗なの！？」

「だから、停電……」

「いや……暗いの怖いの！」

まことに……パニックを起こしかけている。何がそんなに怖いのかよくわからないけど……真っ暗闇つてのが駄目なのかな。今の世の中、どこも街灯だの何だので、完全な闇つてのに遭遇することそんなに無いし。それにしてもちょっと激しそうな気がするけど。

とにかく落ち着かせないと……俺は巡音さんのいる方向に手を伸ばした。手が温かい何かに触れる。……肩かな、こりや。

「巡音わ……」

俺がそつ唐をかけよつとした時、巡音さんが俺に抱きついてきた。

「えつ……」

驚きのあまり、声が途切れる。いや、そりゃ驚くだら、誰だつて！ 何が一体どうなつているんだ。

「…………」

俺にじがみついた状態の巡音さんは、がたがたと震えていた。ひ

べく法えていたことだけは確かにようだが……震えを止めるには、どうしたらいいんだろ？

どうしたらいいのかを考えていたはずだったが、気がつくと、俺は自分の腕を巡音さんの背に回して、ぎゅっと彼女を抱きしめていた。……腕の中の身体は、温かくて柔らかい。

「……大丈夫だから」

答えはなかつたけれど、そうしてみると、少しづつ巡音さんの震えは治まってきた。それでも、こちらにしがみつく力は緩まない。どれだけそうしていたのかは、よくわからない。時計とかが見えるわけじゃないし。ただそやつて巡音さんを抱きしめていて……気がつくと、明かりが戻っていた。それもさっきまでのよがな幻想的な雰囲気じゃなくて、いわゆる普通の明かり。遊園地側が照明を変えたらしい。暗くてはつきり見えない状況では気にならなかつたことが、明るくなると急に気になりだす。俺と巡音さんは抱き合っている状態だということだ。

「あ……」

すぐ近くに、巡音さんの顔があつた。至近距離で、一瞬瞳と瞳があつ。我に返つた巡音さんは、真っ赤になつて俺から離れた。

「『ごめんなさい……わたしつたらなんてことを』

「いや……その……」

腕の中の温もりが無くなつたことが、妙に淋しい。ずっとこのままで、良かったのに……て、俺は何を考えているんだ！？

「……出ようか、ここ」

氣恥ずかしくなつた俺は、何とかそれだけを言つた。巡音さんが無言で頷く。俺たちは連れ立つて、ミラーハウスを出た。なんか、明かりが消えた原因を解説するアナウンスみたいなのが流れていたが、かけらも耳に入つて来ない。

外に出ても、巡音さんはまだ赤くなつて下を向いていた。全くこつちを見ようとしてくれない。参ったな……。何でこんなことになつた。

「巡音さんて……暗いところ駄目なの？」

「へんと巡音さんが頷いた。やっぱり顔は上げてくれない。

「苦手なものなんて誰にだつてあるしれ……あんまり気にしなくていいよ」

相変わらずうつむいたままだ。

「もしかして……俺に怒ってる？」

今度は勢い良く首を横に振った。どうやら、嫌われたとかじやないらしい。単に恥ずかしがっているだけか。

「じゃ……行こうか」

俺たちは連れ立つて歩き始めた。巡音さんはいつもを見ないうまにしているせいか、歩き方が微妙におぼつかない。妙なところにそれが行きそになる。俺は巡音さんの手をつかんだ。巡音さんがびっくりした様子で顔を上げる。

「え……」

「そつちじやないって」

俺は巡音さんの手を引いて、歩き続けた。巡音さんはまた下を向いてしまったけれど、繫いだ手を離そうとはしなかった。

それから帰るまで、俺たちはずっと気まずいままだった。なんでこんなことに……つて、停電のせいか。しかしあつた一田の間に、どうしてこんなに色々なことが起きなくちゃならないんだ？  
折角近くなった巡音さんとの距離がまた開いてしまつたようだ、で、俺は面白くなかった。

車でまた初音さんの家まで送つてもうつた後、初音さんと巡音さんは、家の中に入つてしまつた。俺とクオが、家の外に残される。「なあ……お前、どうかしたのか？」

クオが訊いてくる。

「……何が」

「だつて……なんか変だぜ、お前ら」

ちなみに、クオは今日一日絶叫マシンに乗り倒したらしく。……  
実に満足そうだ。良かつたな。

「何でもない」

「嘘をつけ。…… なあ、もしかして、巡音さんと何かあったのか? 变なところで鋭い奴め。とはいって、クオに話すには内容に問題がありすぎる。…… もう退散するか。色々ありすぎて疲れた。」

「俺はもう帰るよ。じゃあな、クオ」

クオがなんか「ちやー」と言つてたけど、俺はそれを無視して、家に帰ることにした。

飯を作るのが面倒だったので どうせ一人だしな ロンビニで弁当を買って帰宅する。当然、家には誰もいない。姉貴は遅くなるって言つてたもんな。洗濯物は姉貴の担当だけど、取り込むところまではやっておいてやるか。いつまでも下がってるのもみっともないし。

買ってきた弁当を食つて風呂に入り、明日の時間割をチヤックして必要なものを通学鞄に入れる。やつとくべきことはこれで終わつたが、寝るにはまだ時間が早い。いつもなら何か読むかネットでもやるんだが、今日はどれもやる気になれない。

ベッドに寝転がつて、天井を見上げる。頭に浮かぶのは巡音さんのことだ。…… 同じクラスだし、当然明日になればまた顔をあわせるわけだが、果たしてともに話せるんだろうか。

巡音さんの身体、柔らかかったな…… 柔らかくて温かくて、なんだかよくわからないけどいい匂いがした。女の子って、抱きしめるとなんな感じなのか。…… ユイとはせいぜい手を握るぐらいのつきあいだつたしな。…… しょうがないだろ。つきあいだした時はまだ中学生だったし、高校入つてからはぎくしゃくとしてそんな雰囲気じやなかつたんだから。

これじゃ『ラ・ボーム』のロドルフオを笑えない。暗闇で手と

手が触れ合った後、ロドルフォは手を離そうとしなくて、図々しい奴だなって思つたけど。正直あの時、俺は巡音さんを離したくなかった。

はあ……それにしても、明日からまたしたもんか。巡音さんと話すのは楽しいし、関係が以前に逆戻りとことになるのは嫌だ。けど、今日のことを無かつたことにはできないし……。

## ここがみんなで（後書き）

5500円なので、このちはなんとか一つのファイルに納まりました。やれやれ。

今回のHPSOードを書きながら、デフォルトの”Count On Me”を聞いていました。

<http://www.youtube.com/watch?v=CD0JYpDbiJ4&amp;ob=av2e>

なんとなくこの章のイメージというか。ちなみに”Count On Me”といつのは「頼りにしてくれ」という意味です。

いい曲だと思つただけど、マイマイ人気がないような……。

わたしの立てた作戦は、概ね成功したと言えるわ。リンちゃんも鏡音君も、遊園地に行くことをOKしてくれたし。クオは相変わらず「上手くいくわけないだろ」って態度だけど、それは教室の一人を見てないからよ。ちゃんと仲良くなってきたるんだから、後もうちょっとで、いい感じになれるわ。間違いない。

リンちゃんの服を買うっていう名目で、わたしは久しぶりにリンちゃんとショッピングに出かけた。ミニスカートも薦めてみたけれど、残念ながらこれに関してはOKしてもらえなかつた。うーん、残念。可愛いのに。

日曜日、わたしは支度をして 髪は今回は全部結い上げた。機械とかに絡まつたら危ないしね リンちゃんたちが来るのを待つた。ちなみに、リンちゃんにクオと鏡音君が一緒ということは話していない。だって、事前に話したら逃げられかねないもの。

やつてきたリンちゃんは、鏡音君とクオが一緒にという事実にびっくりしていたけれど、混乱している間に、わたしはリンちゃんの手をつかんでさつさと車に乗り込んだ。鏡音君とクオも後からやつてくる。さ、行くわよ。

遊園地に着くと、わたしは予定どおり、ジップトコースターに乗ると言い出した。リンちゃんはおそらく嫌がるだろうから あの手のものは苦手なのだ そうしたら、クオにコースターに乗りたいと、強く主張してもらうことになつていて。え？ クオを悪役にするなつて？ だって、クオが言った方が威圧感が出ると思つづのね。わたしが言つよりは。

でも、結局、クオが主張するまでもなかつた。鏡音君の方が早々と、リンちゃんと一緒にいると言い出してくれたおかげで……思つたよりも事態は進行しているみたい。いいことだわ。

というわけで、首尾よくわたしたちは別行動をすることになつた。

……お一人さん、楽しんできてね。

「予想以上に上手くいったわ」

コースターの列に並びながら、わたしはクオにそう言った。クオは面白くなさそうな表情をしている。ちょっと、作戦が成功したんだからもつと喜んでよね。

「……良かったじゃねえか」

仮面のまんまでそう言うクオ。ねえ、わたしと一緒に喜んでくれる気はないの？ まあいいわ。

「本当は一緒にコースターでも乗ってくれるともつといいんだけど、リンちゃん、絶叫系ダメなのよね。せめてお化け屋敷でも入つてくれないかしら」

緊張で胸がドキドキするような体験をすると、恋が加速するって、前に読んだ本に書いてあったのよ。だから仲を進展させたいカップルは、絶叫系に乗るのがお薦めなんだって。でもリンちゃんは、さつきも言ったように絶叫系がダメ。となると、後、緊張でドキドキしそうなところって言つたら、お化け屋敷よね。鏡音君ホラー好きみたいだし、リンちゃんを連れてつくれないかしら。

あれこれ考えていると、順番がやつてきた。クオと並んで座席に座つて、安全バーをセッターする。いよいよだわ。作戦も上手くいつことだし、思い切り楽しみましょ。

「うーん、わくわくするわね」

クオも楽しくなってきたみたいで、前より明るい表情になつている。

「とりあえず、コースターは全部乗るぞ」

「賛成！」

ここ、「コースターだけでもたくさんあるのよね。まずは順繰りにコースターに乗つて行きましょ。それが済んだらフリー・フォールがいいな。遊園地つて本当、幾つになつても楽しいわよね。

ずっと放つておきっぱなしというのも良くないので、クオと相談の末、お昼だけは合流して一緒に食べることにした。午後の予定を訊かれたら、午後も絶叫系に乗る予定だと答えるつもり。多分、これで鏡音君は、リンちゃんと午後も一緒にいるだろ？

リンちゃんは何だか落ち着かない様子だつたけど、鏡音君と揉めたりとか、そういうのではないみたい。なんでも、演劇部のカツブルに遭遇しちゃったんだそうだ。もしかしたらわたしたちも会つかもね。

話は予定どおりに運び、午後も一手に分かれて行動することになった。わたしとクオは二人で、遊園地をたっぷり楽しんだ。うーん、この作戦は大当たりだわ。ずっと絶叫系に乗つていたけど、さすがにちょっと疲れたので、最後は観覧車にした。

「今日は楽しかったわね」

観覧車の中で、わたしはクオにそう言つた。クオがにっこり笑う。

「……だな」

なんだかんだで、クオも今日は楽しんだみたい。

「クオは、絶叫系だつたらどれが好き？」

「やっぱ、ジェットコースターだな」

絶叫系の王様って言つたら、やっぱりあれよね。

「ミクは？」

「わたしもジェットコースター」

観覧車はどんどん登つていぐ。じきに日が暮れるから、空の色も変わつてきている。

「あ、そろそろ一番高い位置に来るわよ」

わたしは、窓から下を見下ろした。クオが隣に来る。

「おー、みんな点にしか見えないな」

そんなことを言つクオ。もうちょっと色氣のある言葉、無いの？  
正直不満だけど、ここは我慢してあげるわ。

観覧車が下に下りるまで、わたしとクオは黙つて外を眺めていた。外に出ると、名残惜しいけれど、待ち合わせ場所のゲート前に向か

う。

リンちゃんと鏡音君はもう来ていて、わたしたちを待っていた。  
……あら? なんだか、雰囲気がおかしいわね。並んで立っている  
けれど、一人とも全然視線をあわそとしない。かといって、険悪  
つてわけじゃない。何というか……上手く説明できないわ。  
帰りの車の中でも、二人は全然喋らうとしなかった。ますますも  
つて気になるわ。これは追求の必要があるわね。

家に帰ると、わたしはリンちゃんと一緒に家の中に入った。リン

ちゃんの家からのお迎えが来るまでは、まだ少し時間がある。

「ミクちゃん、今日ははじめんね。折角誘ってくれたのに、一緒に回  
らなくて」

リンちゃんはそんなことを言つている。それは別にいいのよ。作  
戦どおりなんだから。

「わたしの方も絶叫マシンに夢中になりすまひやつたから、お互  
様よ」

まあまあいり言つておぐ。さてと、何があつたのか聞かねなくち  
や。

「ねえ……といひでリンちゃん、今日、何かあつたの?」

「……何かつて?」

「せつきから様子が変だから」

いつこつ時は、すぱっと訊くに限る。リンちゃんは、わたしの目  
の前で悩み始めた。

「鏡音君に、迷惑かけちゃつたから……」

俯き気味に、リンちゃんはそう言つた。迷惑ねえ。

「迷惑つて、今日リンちゃんにつきあつたこと? あれは鏡音君の  
方から言つて出したんだから、リンちゃんが気にすることないわよ  
はつきつきぱぱりそつぱつする。リンちゃんは、まだ困った表情  
のままだ。

「いえ、それじやなくて……」

そうよね。それだと、鏡音君の方の様子がおかしいことの説明が

つかない。リンちゃん、何かやつちやつたのかしら。えーと、服は汚れてなかつたから、転んでジュースかけちやつたとかじやなさそうね。喧嘩したとも思えないし。うーん、何だろう。

「ねえ、リンちゃん。まさかとは思うけど……」「何？」

「お化け屋敷とかで、びっくりして抱きつきでもしたの？」「わたしの前で、リンちゃんが固まつた。え？ そうなの？」

「え……今、正解？ うわーっ……びっくり……」

リンちゃんは真つ赤になつて下を向いている。まさか本当にそうなるとは……。って、ものすごく美味しいシチュエーションじゃないの！

「それなら全然迷惑じゃないって！」

「え……だつて……いきなり抱きつかれたら……その……」「リンちゃん、わかつてないなあ」

クオも前に言つてたものね。「きやーつ怖いって抱きつかれたら、どんな男だつて悪い氣はしないっ！」って。

「それは絶対、向こうは迷惑だけは思つてないって。驚きはしただらうけど、迷惑じゃないことだけは確かだから」

リンちゃんみたいな可愛い子に抱きついてもらえるなんて、むしろ喜ぶべき状況だものね。肝心の本人はわかつてないみたいだけど。とにかく、作戦は上手くいきすぎるぐらい上手くいつてるわけだわ。これから祝杯 未成年だからジュースだけどね あげようつと。

リンちゃんが帰宅した後、わたしは自分の部屋にジュースを瓶ごと持ち込んで、祝杯をあげることにした。ジュースつてのがちょっと締まらないけど、まあ、仕方がないわ。

わたしがジュースを飲んでいると、クオがやつてきた。わたしを見て、驚いた表情になる。何？

「……どうしたんだお前。ついに壊れたのか？」

「あ……相変わらず失礼ねえ。どこが壊れたのよ。まあいいわ。

今はとても機嫌がいいから、見逃してあげる。

「あ、クオ！ 作戦大成功を祝つてるとこらなの。クオも飲む？」  
クオは理解できないという表情になつたけれど、自分の分のコップを取りに行つた。コップを取つて戻つて来たので、ジュースを注ぐ。

「かんぱ～いつ！」

わたしがそう言つてコップを掲げると、クオもコップをあわせてくれた。そしてジュースを一口飲むと、クオはこんなことを訊いてきた。

「なあ、おい。何が大成功なんだ」

「今日の作戦」

クオの質問に答えるわたし。クオがむすつとした表情になる。

「おい、あれのどこが大成功だ。二人とも帰りの車の中で、一言も喋らなかつたぞ」

あら……こんなことを訊いてくるつてことは、クオの方は、鏡音君に全然情報をもらつてないのね。ダメじゃないの。

「それがねえ……クオ、聞いたら驚くわよ」

「もつたいつけてないでさつさと喋れよ」

こういう時はノリとか余韻とか、大事なものがあるのに……クオつたら、せつかちなんだから。

「もう……いい話なのに。まあいいわ。あのねえ……リンちゃん、お化け屋敷で鏡音君に抱きついちゃつたんですつて」

クオが啞然とした表情になる。まあねえ。ここまでの大成功は、わたしとしても予測してなかつたし。あ、そうだわ。クオに釘刺しとかないと。

「あ、この話、鏡音君にしちゃダメよ」

「なんでだよ」

「クオは鏡音君から何も聞いてないんでしょう？ 自分が喋つてな

い」ことが知られている、つていうのは、気持ちのいいものじゃないの。最悪信頼関係が壊れるし、今後の作戦に支障が出るわ」

喋つてない事情が駄々漏れなんてバレたら、色々とややこしくなになっちゃう。

「まだ続ける気か！？」

「当然でしょ。一人がちゃーんと名実と共にカッフルになるまでやりますからね」

「なあ、ミク。余計なお節介って言葉、知ってるか？」

「何言つてんの。これは余計なお節介なんかじゃないわ。わたしの使命よ」

クオはわたしの前で大きなため息なんかを、これ見よがしについでいる。……悪いけど、これだけは譲れないのよ。絶対にね。

## 遊園地でのミク（後書き）

ミクの認識が微妙にズレてますが、「抱きついた」のは事実なので、  
その辺りはいいのです。

## 真実はいつも少し苦い

四人で遊園地に行つた翌朝、俺は落ち着かない気分で目覚めた。今日は月曜だ……。そういうや、『憂鬱な月曜日』って歌、あつたなあ。断つとくけど、死にたいわけじやないぞ。

ベッドから抜け出して一階に下りる。洗面所に行つて顔を洗い、居間へ行く。台所では、姉貴が朝食の支度をしていた。

「おはよう、姉貴」

「おはよう、レン」

そういうや昨日は姉貴が帰つてくる前に、寝ちゃつたんだよな。姉貴、何時頃帰つて来たんだろう。

「姉貴、昨日の帰宅はいつだつたの？」

「ん~、確か午前様だつたかしら……」

いいのか、若い女がそんな遅い時間に出歩いて。俺より、姉貴の方が心配だよ。

「姉貴、あんまり遅くならなによつてしてくれよ。世の中物騒なんだから」

「わかつてゐるわよ。ただ、昨日はけよつと色々あつて……」

そんなことを言つ姉貴。……多分飲んでたんだろうな。やれやれ。俺は台所へ行こうとして、サイドボードの上に置いてあつたノートを引っ掛け落としてしまつた。……朝から何やつてんだ、俺は。ため息混じりにノートを拾おうとしゃがみこむ。

あ……これ、何かと思つたら姉貴がつけてる家計簿じやないか。挟んであつたレシートが、落ちたばずみに飛び散つている。まずいな。これ全部拾い集めとかないと。

「レン、何やつてるの？」

台所から姉貴の声が飛んできた。

「家計簿を落としちまつたんだよ。わかつてゐる。俺の不注意。元に戻しとくから」

「ちゃんとレシート全部拾つといてよ。挟んである奴、まだ整理しないんだから」

へいへいと答えつつ、レシートを拾つ。近所のスーパーにコンビニに……珍しくもないな。あれ? このレシート……。俺は手にしたレシートを、見間違いかともう一度確認した。しかし間違いないく、それは……。

「ラブホテル?」

田付を見る。昨日の田付だ。ちよつと待て。昨日? 姉貴……昨日、どこで何してたんだよつ!?

「レン、何か言った?」

「……いいや何も」

俺は家計簿に拾い集めたレシート ラブホテルのも一緒にを挟むと、サイドボードの上に戻した。見た時はさすがにぎょっとしたが、考えてみたら姉貴は成人した社会人なわけだから、そういうところに行くのも別に変じゃない。何かあつたって、自分で責任ぐらい取れるだろうし。

ただ姉貴のそういう面は、考えたくない。姉貴はあくまで姉貴なんだ。

俺が居間で混乱していると、台所から姉貴が声をかけてきた。

「レン、あんたもツナトースト食べる?」

「ああ、うん。食べる」

珍しく作ってくれるらしい。我が家のルールでは、基本的に朝食は各自で、となっている。……賞味期限が切れかけてて、使っちゃいたい材料もあるんだろう。まあいいや、作ってくれるんだから。

姉貴がツナトーストを出してくれたので、それと牛乳とバナナで朝食を取る。メニューは姉貴も同じだ。量は俺の方が一倍ぐらい多いけど。

「あ、そうだ。

「姉貴、ちょっといい?」

「何よ?」

「『好き』と『嫌いじゃない』って、イコールで結べると思つ? 『どうせだから姉貴にも訊いてみよつゝと。何か面白い答えが返つてくるかも。」

「変なこと訊くわねえ……」

言いながら、姉貴は考え込んだ。

「私の見解だと、イコールで結ぶのは無理ね」

あ、そうなるんだ。

「なんで?」

「『嫌いじゃない』ってのは、逃げを打つ時に使う言葉だから。本当に好きなら、ストレートに『好き』って言えるだろ? 『好き』という本音を言うのが恥ずかしくて』まかしたいが、本当は好きではないけれど、嫌いと明確に言つのは棘が立つか、あるいはそこまでの悪感情は抱いてない、けれど、『好き』というほど感情もない……そういう時に使う言葉が、『嫌いじゃない』」

えーと……なんだか、トドメを刺されたような気がするぞ……。

姉貴に悪気が無いのはわかってるが……。

「レン、あんた、なんでそこで固まるわけ?」

「……なんでもないよ」

つまり、俺のコイに対する感情は最初から「その程度」だつたつてことか? 参つたな……。言われてみれば納得できるものがあるような無いような……いやいや待てよ。

俺が頭を抱えていると、姉貴が突っ込みを入れてきた。

「嘘おつしゃい。なんかあつたんでしょう?」

どうしてこういう時だけ勘が働くんだろうなあ。ああ、面白くな

い。

「……実は昨日、出先でばつたりコイに会つて」

しううがないので、一部話すこととする。巡査さんのことは伏せておかないと。

「コイちゃんに?」

「そう。で、クオにまあ、当時のことをひとつと訊かれたりして……

で、思わず『嫌いじゃなかつた』って言ひちゃつて、そこをクオに突つ込まれたわけ。『嫌いじゃない』と『好き』って同じなのかつて

昨日はクオと遊びに行つてた 実際、遊びには行つたんだよ。ほとんど一日巡音さんと一緒にだつたとはいへ ことになつてゐるで、訊いてきた相手はクオということにしておく。幸い、姉貴はその辺は疑つてないようだつた。

「で、それからその言葉の意味を考え続けて、今に至る」と  
「そんなとこ」

姉貴のにやにや笑いが、微妙に癪に障るなあ。

「コイちゃんとのつきあいは軽いものだつたつて、やつと『気がついたわけか』

「だから、嫌いじゃなかつたんだよつー」

あ、これじゃ余計ドツボにはまるだけか。言つてから『気がつく』。姉貴は俺の前で笑うのをこらえてる。もつといつづくから、やめてくれ。

「まあ、別にそんなに深刻になることはないわよ。あんたまだ若いんだし、当時はもつと若かつたわけだし。つまあつついどいついうことなんか、わかつてなくても仕方がないしね。そういうミスを何度か繰り返して、人は成長していくの。これに懲りたつて言うんなら、次につきあう相手は『明確に好き』って思える子にすればいいんだし

正論なのはわかってるが、非常にいらつぐ。

「姉貴に言われても信憑性つてもんが全く無い

「あのねえ、これでもあんたより六年長く生きてるんだけど?」

「たつた六年じやん

だから嫌なんだよ、弟つて立場。いつも偉そうな姉貴の態度に耐えなくちゃならないし。

「じゃあ、お母さんに報告しておいてあげるから、やつからアドバイスをもらおうか?」

「やめてくれっ！」

「そんな恥ずかしい」とされてたまるか。……ああもう。

「……恥のかきついでに、もう一つ説くけど」

「何？」

「俺、コイに謝った方がいいと思う？」

その程度の好意で、つきあいなんぞを承諾したのがまずかったのかもしね。ちゃんと話して、謝った方がいいような気がしてきました。

「……私が見たところ、コイちゃんの方はあんたより先にそのこと理解してるわよ。自分の恋が、おままでレベルだったってことをね。終わつた恋のことなんて、もう昔のことよ。女の子って、そういうものなの。だからそつとしきなさい。大体、謝つたってあんたの自己満足にしかならないわよ。あんた、コイちゃんを今の彼氏から引き離してまでやり直す気、ないでしょ？ そんなことされても向こいつは迷惑なだけ」

かなりグサツと来たぞ……。確かに、コイとやり直したいという気には全くれない。別に俺の方が捨てられたからとかそういうことじやなくて……「うーん、何だろつ。

「なんで、俺たちうまく行かなかつたんだろつ……」

そんなに喧嘩とかしなかつたよな。それなりに普通のつきあいだつたはずだし。ぎくしゃくはしてたけど、原因がわからぬ。

「あんたたち根本的にあわなかつたのよ。あつていたら、最初はずかな好意でも、時間と共に大きくなつた可能性もあつたんでしょうけどね」

「はあ？」

「だから、いろんな意味で違ひすぎたの。違つても上手くやれる人もいるけど……あんたには、無理でしょうね」

姉貴が何を言いたいのかさつぱりわからない。違ひすぎると言われても……。

「ところでレン」

悩んでいる俺には構わず、姉貴は唐突に話を変えた。

「何だよ」

「あんたが持つてたSF小説、貸してくれない?」

「どれ?」

SF小説だけでわかるわけないだろ?が。何冊も本棚に並んでるのに。

「それがタイトル思い出せなくって」

「わかるかつ!」

それでどの本かわかる奴、いたら超能力者だよ。姉貴、時々こういうよくわからないボケ、やるんだよな。

「えーと……確かに『敵のゲートは下だ』って決め台詞が出てくる奴さすがにまずいと思つたのか、そんなフォローを入れる姉貴。……ああ、あれか。オースン・スコット・カードの傑作だ。

「……『エンダーのゲーム』?」

「ああ、そう、それ」

どうやら間違いなかつたらしい。ま、「敵のゲートは下だ」なんて台詞、そつそつ出てこないし。でも。

「姉貴、カードは嫌いつて言つてなかつた?」

前に「面白いから読んでみて」と渡した時、かなり手厳しいこと言つてたような気が。

「嫌いだけど、読みたくなる時もあるの」

相変わらずわけのわからん理屈だ……まあいいか。

「ふーん……別にいいけど。読みながらむかついたとか言つて、本当に当り散らさないでくれよ。俺のなんだから

「するわけないでしようがそんなこと」

……まあ、幾ら姉貴でも、酔っ払つた状態で読書はしないか。朝食を食べ終わつたので、俺は「『いちそうさま』と言つて、学校へ行く支度の為に自室に戻つた。あ、そうだ。『エンダーのゲーム』出しておかないと。

姉貴に『エンドラーのゲーム』を渡して、俺は学校へ向かった。学校に着いて教室に入ると、いつものように自分の席で本を読んでいた。巡音さんの姿が目に入った。……どうしたもんかなあ。向こうは本に集中しているので、俺のことには気づいてない。けど、ここで声をかけないのは、それはそれで「昨日のことを気にします」って言つてるようなもんだし。

「おはよう、巡音さん」

結局、俺は声をかけることにした。巡音さんが驚いて硬直し、本を取り落とす。……えーと。

「……何もそんなに驚かなくても」

俺の目の前で、巡音さんは下を向いた。頬が微かに赤くなっている。参ったな……。何をどう話す。やっぱり、このまま戻った方がいいんだろうか。

だが俺が次の行動を決める前に、巡音さんは向きを変えて、身体の方はこちらへ向けてくれた。視線の方は下を向いたままだけど。「「めんなさい」……それと、おはよう」

どうやら、話をする意志自体はあるらしい。……良かつた。

「あの……巡音さん」

俺は、そんなにかしこまらなくていいことだけ續けよつとして、止めた。巡音さんだって、それくらいわかっているはずだ。

「……昨日のことだけど」

だから、そこじで固まらないでくれよ。……俺だつて恥ずかしいんだよ、ミツーハウスでのことは。

「例の『好き』と『嫌いじゃない』はイコールで結べるのかつて話」

巡音さんは少し身体の力を抜いたようだった。俺はそのまま話を続けることにする。

「今朝姉貴にその話題振つてみたら、姉貴、それをイコールで結べはしないってや。姉貴が言つこは、『嫌いじゃない』ってのは、逃げるための言葉なんだって。好きということを『まかしたいか、好

きではないけど明確に嫌いとは言いつらい時か、無関心に近い感情の時に出てくる言葉なんだって。……俺もまあ、それでなんとなく、納得はしたんだけど」

そのせいで、俺は自分のユイに対する感情が「その程度」だったことを認識してしまって、一人頭を抱える羽目になつたりもしたが……。いや、少しは好きだったと思うんだよ、多分。

巡音さんは、ちょっととこっちが怖くなるくらい真剣な表情で考え込んでしまった。え、えーと……所詮は俺の姉貴の見解に過ぎないんだから、そこまで真剣に受け止めなくてもいいんじゃないかな？ そういう考え方もあるんだ、ぐらいでさ。

「鏡音君のお姉さんってすごいのね」

しばらくしてから、巡音さんは感心した口調で、そんなことを言った。確かに姉貴の答えは鋭いところを突いてると思うが……なんだか面白くないぞ。……なんで姉貴のことばっかり。

「……ねえ、鏡音君」

あ、ようやく顔を上げてくれた。

「何？」

「『好き』って感情が無い人って、イメージできる？」

「こっちを真っ直ぐ見てくれるのは嬉しいんだが……急にどうしたんだろう。とはいえ、こんな真剣な瞳で訊かれると、真面目に答えないといけない気になつてくる。「好き」という感情が無い人間か……うーんうーん、イメージしづらい。だって、大抵の人は何かしら好き嫌いあるだろ。食べ物とか、娯楽とか。……それ、人間か？ 人間じゃないよな？」

「……巡音さん、学祭の舞台見たって言つてたよね。あれの最初の方に出てくるロボットみたいな感じになるんじやない？」

あれは労働の為に作られたロボットだから、そういう機能は最初から無い。感情も何もなく、命令に従うだけだ。

つて、巡音さん、青ざめてるけど……大丈夫なんだろうか。

「巡音さん、大丈夫？」

「うん……平気。考えすぎて、ちよつと怖くなつただけ」

あんまり真剣に考え詰めるのも良くないんじゃないかな。といふか、何を考えていたんだら。そう考える俺の前で、巡音さんはやや無理した笑顔になつた。

「『好き』って感情が無い人は、『嫌い』って感情も無いのかな?」

なんだか謎々みたいになつてきたな。

「無いんじゃない? 口ボット状態なのだとすればね 生れる」

とに執着せず、楽しむことを知らず、雑草以下の存在

俺は台詞を一部引用した。この台詞は、俺のやつた役じゃないけどね。台本に手を入れたから、メインの台詞は何となく憶えている。しかし改めてこの台詞見ると、自分たちで作つていて「雑草以下」は無いだろ?って気がしてくる。

巡音さんは、また考え込んでしまつた。一体、何をそんなに悩んでいるんだ?う?

俺が巡音さんのことで頭を悩ませていると、初音さんがやつてきた。……えーっと、初音さんの邪魔は、しない方がいいよな。俺は巡音さんに「あんまり悩まない方がいいと思つ」とだけ言って、自分の席に戻つた。

……なんだかよくわからないことになつたけど、さつきの話題で、巡音さんとは話すことができた。気まずさもそんなに感じなくなつたし……。これ、やつぱり、姉貴に感謝しないといけないのかな。したくないけど。

今日は部活の活動日。部室に行つてみると、グミヤとグミが女子のほぼ全員に取り囲まれて「おめでと~」と言われていた。結婚式はいつ? とか訊いてる奴もいるが、幾らなんでも気が早すぎるだろ。俺らまだ高校生だぞ。ちなみにグミヤは真っ赤になつていて、訊かれることにろくに答えられずにいる。

「……心の底からグミヤに同情したくなるな

思わずクオに向かつてそう言つてしまひ。何の罰ゲームだよ、これ。ほとんどさうじ者状態じゃないか。

「同感」

クオは頷いて、グミヤを氣の毒半分、面白がつてゐる半分といつた表情で見やつた。

「ところで、クオ。お前、他の奴らにグミヤとグミのことを喋つたの？」

「いや、俺じゃない。どうもグミが自分から、昨日アートしたつて喋つたらしくて。俺が来た時は、もうこんな感じだった」

グミのことだから、グミヤがいかに素敵だったとか、延々喋り倒したんだらうなあ……そんな話、されても困りそうな気がするんだが。

しばらくそんな様子をクオと、一年の男子部員たちとで眺めていたが、ちなみに、演劇部の一年男子は俺とクオとグミヤの三人だけである。やがて、グミヤが我慢の限界を超えた。

「お前らしい加減にしろっ！ 活動を始めるぞっ！」

さすがに女子連中も悪ノリしすぎたと気づいたのか、大人しくなつた。そんなわけで、普段通りの部活が始まった。要するに体力づくりやら筋トレやらストレッチやら発声練習やらつてことだけだ。

「ねえ、鏡音君」

ストレスチをやつてゐる最中に、一年の女子部員である、蜜音リリが俺に声をかけてきた。

「何だよ」

「グミちゃんから聞いたんだけど、鏡音君が昨日女の子連れて遊園地にいたつて……」

「あ～い～つ～は～つ～！ 何余計なこと喋つてんだよ～！」

「言つとくけど、アートじゃないぞ。俺とクオと、クオの従姉の初音さんと、初音さんの友達の巡音さんで遊びに行って、クオと初音さんが絶叫マシン乗らないと我慢できないとか言い出すから、俺と巡音さんが一人でクオたちを待つてたつてだけ！」

「……そうムキにならなくともいいじゃない」

蜜音は呆れ果てた様子でそう言った。……はつ。俺は何をやっているんだ。

「いや、昨日グミに散々『データですか』って訊かれたもんだから、つい過剰反応を……」「めん蜜音」

「別にいいけど」

蜜音はあまり氣にしていないようだった。助かった。

「どうかグミの奴、そんなことまで喋り倒してんの？」

「ええ」

うげ……後でグミヤに言つとこ。既に手遅れのような氣もあるけど。巡音さんの耳に入つたらどうしてくれるんだ。

その後の部活は滞りなく終わった。終了後、グミヤに話をしようつとすると、驚いたことに、グミヤの方から俺に声をかけてきた。

「レン、ちよつといいか？」

「何だよ」

グミヤの表情を見る限り、グミとのことじやなさそうだな。

「そろそろ、来年の四月の公演の演目を決めようと悩つんだ」「

四月……新入生歓迎公演か。まだ先のような気がしてたけど、確かにそろそろ作品を決める時期だ。けど、なんでこんなところで俺に言つんだ？ ミーティングで決める話だろ、それ。

「そういうわけだから、レン、適当な作品探しておいてくれ」「俺に丸投げかよっ！」

グミヤの言葉に、俺は思わず叫んでしまった。

「だつてこの前の、お前のアイデアだぜ」

「俺のアイデアって……」

確かにあれをやろうつゝて言い出したのは俺だけ。最終的にはかなりの奴が賛成したじゃないか。

「俺、文学なんて普段読まないんだよ。他の連中にも聞いてみたけど、みんなそんなの読まないって言つしね」

頭を抱える俺の前で、グミヤはそんなことを言い始めた。あのな

あ。

「……俺だつて別に詳しくないぞ。まともに読んだことがあるのは、  
チャペックとシェイクスピアぐらいで」

後は何読んだっけ？ 縛つか読んだのはあるけど、ぱっと出でてい  
やしない。

「あ、そうだ。顧問がチャペックはやめてくれってさ」

「チエコを代表する偉大な作家に喧嘩売つてんのか顧問は……」

そもそも顧問が「文学作品をやれ」なんて言い出すから、こんな  
ややこしいことになつたんだが。大体、チャペックは禁止。シェイ  
クスピアには無理がある（衣装とかセットとか）のに、どうじろつ  
て言つんだ。

「SFは顧問のお気に召さないんだろ。まあとにかく、そういうわ  
けだから任せたぞ」

チャペックはSFだけの作家じゃないぞ。

「グミヤお前部長だろつ！ 僕に丸投げするなよつ！」

「うん、俺は部長だよ。部長として、この役目はお前がベストだと  
判断したから、頑張つてくれ。ああ、それと、できたら明るい奴に  
してくれ。新入生歓迎公演だからな。新入生がこの舞台に参加して  
みたって、思えるような奴じゃないと。じゃあな！」

俺が何か言う前に、グミヤはさつさと背を向けてしまつた。そん  
なグミヤの腕に、グミヤがしがみついて「一緒に帰りましょう」と  
か言つている。……全く、あいつらは。

ため息つきつつ、俺も帰り支度をする。なんか最近、妙に色々あ  
るな……。それにしても、次回作の決定か……グミヤの奴、何が任  
せただ。いっそできないような難しいのを「これがお薦めだと思つ  
とでも言つてやろうか。ゲーテの『ファウスト』とか。

……でもそんなことをしたら、新入生歓迎公演がお流れになちま  
うよなあ。やつぱりちゃんとした奴、選ばないと。うーん……。

大体顧問が「文学作品をやるよつ」なんて言い出すから、やや  
こしくなるんだよ。普通に図書室に置いてある、高校生用の戯曲集

使えばいいだろ。何が「格調の高いもの」を……」だ。格調って言葉の意味、わかってるのか。

で、どうするか。チャペックは駄目って言われた、シェイクスピアは演出が大変。ゲーテは論外。あんな面倒くさい脚本、やれるかってんだ。

……こんなの、俺一人で決めるのは無理だ。誰か相談に乗ってくれる相手、探さないと。

## 真実はいつも少し苦い（後書き）

『憂鬱な月曜日』と『暗い日曜日』が、『じちや』になつてないか？ちなみに『暗い日曜日』は、それを聞いた人が大勢自殺したという口くつきの曲です。いや、なんばなんでも都市伝説だと思いますが……。

蜜音リリー・リリイさんです。名字は例によつて私の創作です。

## ショウジョウ素敵な商売はない

「巡音さん、ちょっとといい?」

水曜日の放課後、俺は巡音さんにさう声をかけた。

「……鏡音君、どうしたの?」

「とりあえず、また以前のよひに話せるよひにはなつていてる。……これでいいんだよ、これで。……多分ね。

「実はちょっと相談に乗つてほしことがあつて」

「え……わたしに?」

心底驚いたといった表情で、巡音さんはさう訊き返してきた。何もそんなに驚かなくてもいいと思うんだが。

「そうだよ。多分、巡音さんが一番適任だと思つ」

俺が答えると、巡音さんは軽く思案する表情になつた。

「それ、長くかかる?」

「……かもしれない」

「わかつたわ。……少しだけ待つてて」

携帯を取り出すと、巡音さんはメールを送信し始めた。俺は手もち無沙汰の状態で、メールを送信する巡音さんを見ていた。

「お迎えを遅らせてもらつたから、しばらくは大丈夫」

メールを送信し終わつた後、巡音さんはそう言つた。……もしかして分刻みでスケジュール、決められているんだろうか。ありそつな話だ。

「それで、相談つて何?」

「あ~、うん、それなんだけど……巡音さん、文学に詳しいだろ。だつたら、戯曲とかも詳しかつたりする?」

顧問やらその他の先生に相談するのは真つ平だし どうせわけのわからないことを言われて、趣味を一方的に押し付けられるに決まっている。姉貴は趣味がズレすぎくて相談するのには不安が残る。演劇部の連中は頼れないし……結局、巡音さんしかいない。

「少しあは……詳しいつてほびじやないけど」

「例えば、どんなの読んだ?」

「ショイクスピア、チヨーホフ、メーテルリンク、カルデロン、イプセン、ブレヒト……あ、後ギリシア悲劇とかも読んだけど、それくらいよ。それに全部の作品に目を通したわけじゃないし……代表作ぐらいしか読んでないわ」

俺よりずっと色々読んでるじゃないか……知らない名前も混じってるし。

「それだけ知つてりゃ充分だよ。少なくとも、俺よりずっと詳しいだろうし」

ああ助かった。俺と同じぐらいのレベルだったからひみつとかと思つたぞ。

「実は今、演劇部の来年四月の新入生歓迎公演でやる作品探してんだよ。グミヤの奴、部長のくせに俺に全部任せたとか言つてやがって俺は相談の本題を話し始めた。巡音さんが首を傾げる。

「そういうのって、専門のあるんじゃなかつた? 図書室で見かけた記憶があるんだけれど」「……誰でもそう思うよなあ。

「普通はね。だけど顧問が、『どうせやるなら文学作品を』って、無茶なこと言い渡してきてや」

「なんだか大変そつ……」

しみじみとそう言われてしまつた。いや、全くもつてそのとおり。

「実際、大変だよ」

ため息の一つも出でへるつてもんだ。なんでこうなつたんだか。

「ねえ、鏡音君。学祭の時の公演は? あれ、未来のお話でしょ? 巡音さんはそんなことを訊いてきた。うーん、あれ、そんなに文学に見えないのか。

「ああ、あれは作者がチャペックのことと、強引に押し切つたんだよ。チャペックなんだから充分文学のカテゴリに入るだろ。噂じやノーベル文学賞の候補になつたこともあるつていうし」

「え……あれ、チャペックだったの？ チャペックって、『ダーシエンカ』や『長い長いお医者さんの話』書いた人よね？」  
びっくりした表情で、巡音さんはそう言い出した。チャペックの作品、ちゃんと読んだことがあるんだ。

「あ……知つてたんだ。そうだよ」

「小さい頃、『郵便屋さんの話』好きだったの……同じ人が書いたとは思えないわ」

「ああ、まあ、そうかもね」

かたや童話、かたやSF戯曲だもんない。他にも色々書いてるけど。俺からするとチャペックって古典SF作家なんだけど、巡音さんからすると童話作家なのか。

「あ、でも、『マクロプロス』を書いたのもチャペックよね……」

「よくそんなの知つてるなあ……」

どう考へても『ロボット』より『マクロプロス』の方がマイナーダだ。

「見たことはないの。ヤナー・チエクの作品リストに入つてたから知つてるだけで」

そんなことを言い出す巡音さん。また聞いたことのない名前が出てきた。誰だろう。

「ヤナー・チエクって誰？」

「チエクの有名な作曲家。『マクロプロス』をオペラにしたの」

「ああ……なるほど」

巡音さん、オペラ好きだもんな。それにしても、チャペック作品つてオペラになつてたのか。結構意外な感じがする……つて、話がズレてるよ。

「チャペックについて語りだすと際限無くなりそつだから、話戻すよ」

巡音さんが頷いたので、俺は話を続けた。

「とまあ、そういうわけで戯曲を探しているんだけど……巡音さん、好きな戯曲とかある？」

やれそんなら巡音さん的好きな奴にしてしまおう。どうせみんな文学には詳しくないんだし。

「……メーテルリンクの『青い鳥』」

それが、巡音さんの答えた。え……『青い鳥』？

「兄妹が幸せの青い鳥を探しに行く話だよね？」

巡音さんは頷いた。『青い鳥』って、小さい時に読んだ記憶あるけど……何せ昔のことなんで細かい部分はほとんど忘れてしました。探していた青い鳥は、結局自分の家にいたつてのは憶えているんだがなあ。

「それ、絵本だか童話だかじゃなかつたっけ？」

「絵本としてリライトされたものが出てるけれど、もともとは子供に見せるための戯曲として書かれたものなの」

巡音さんはそんな話をしてくれた。確かに、大人向けの本を子供向けに直したものって結構あるよな。

「メーテルリンクという人は、なんでもない日常から宝石を見つける人だったと思うの。『青い鳥』を読むと、細かい描写からそういうことを感じられるの。それとね、この戯曲は衣装の設定一つ一つにも夢があるのよ。光の精や水の精の衣装が『ロバの皮』つていつ、別のおどぎ話の衣装だつたりするの」

すまん、そのおどぎ話は聞いたことがない。といふか、光の精に水の精ね……。衣装が大変なことになりそうだ。

巡音さんがこの話を、どれだけ気に入っているのかはよくわかつたけど。というか、巡音さんの言い回しが詩人みたいだ。

「……ちょっと話がズレるけど、探していた青い鳥つて、確か自分の家にいたんだよね？」

気になつたので、俺はその辺りを訊いてみることにした。

「ええ」

「結局幸せは自分の家にいるつてこと？」

子供向けとはいえ、落ちがちょっと安易過ぎないか？

「……違うと思うけど」

それが、巡音さんの答えたつた。……ん？

「と/orうと？」

「だつて、鳥を探していいたのは自分たちのためじやなくて、病氣の女の子のためだもの。目的を果たせなかつたことを残念に思つ一人の気持ちを受けて、元々家で飼われていた鳥が、青く変わつたんじやないかしら」

あ、そんな前提あつたのか。昔のことだから細かい部分忘れてた。  
……なるほどね。

「それに、最後、青い鳥は飛んで行つてしまつて、泣き出す女の子にお兄ちゃんの方が『また見つけてあげるよ。』に来た人、鳥が飛んできたら、捕まえておいてください』って言つところで終わる。劇場に来た人たちに『青い鳥が自分のところに飛んで来るかも』と思わせる為に、そうしたんじやないかしら。このお芝居から、希望を持つて帰つて下さいって」

巡音さんは軽く首を傾げて、夢見るような瞳でそつ語つた。  
綺麗な瞳だな。俺じゃなくて、窓の外を見ている。青い鳥はさすがに飛んでいないようだが……。

「兄妹以外にどんなキャラクターがいるんだつけ？」

ぐどいようだが細部は憶えてないのだ。

「主人公の兄妹の他に、兄妹と一緒に旅をするのが、犬の精、猫の精、光の精、パンの精、砂糖の精、牛乳の精、火の精、水の精。それから二人の両親とか、妖精のおばあさん　お隣さんと一人二役だと思うんだけど　とか、行く先々の国で出会う不思議な存在とかがいるけど」

巡音さんは説明を始めた。良く憶えてるな……つてあの話、そんなにキャラクターいたの？ 確か行く場所も一箇所じやなかつたよな。

「旅するのは？」

「思い出の国、夜の国、森　木々と動物たちが出てくるの　、  
幸せの国、未来の国よ」

うーん……それだけのキャラクターと一緒に旅をして、で、先々で出てくるのも一人つてこと無いんだろうな……。駄目だ、人数が足りない。それに、セットと衣装の問題がどうしても……。犬とか猫とか、やっぱり着ぐるみなのかな？

『ロボット』はその点、楽だったよな。何せほとんどスーツと白衣と作業着で済んだんだから。

「……ごめん、そいつをやるのは無理。一幕しか出て来ないのは使いまわすにしても、必要なキャストが多くすぎる。セットとか衣装とか、そっちのこともあるし」

俺がそう言うと、巡音さんは少々残念そうな表情になつた。本当に好きなんだな、『青い鳥』

「演劇部つて、部員は何人なの？」

巡音さんはそんなことを訊いてきた。人数から、やれそうな戯曲を探すつもりなんだろう。

「二年が八人、一年が七人、合計十五人。ただ、照明や音楽を担当する奴も必要だから、全員が舞台に上るのは無理。あ、半分以上は女子だけど、男役をやるのに抵抗のない奴が多いから、男女比は気にしなくていいよ」

巡音さんはしばらくの間視線を伏せ、考え込んだ。

「じゃあ、チエーホフの『桜の園』は？」

チエーホフの『桜の園』……あ、ちょっと前に読んだ。確か、バ力な貴族のご夫人が破滅する話だけ。タイトルの綺麗さに騙されると痛い目を見る話だ。

「何一つ自分で決めることのできない主人公が、決断を先延ばしにしたあげく自滅する話だよね？」

確認のつもりでそう口にする。巡音さんが傷ついた表情になつた。

……やっぱ。何やってんだ俺。もうちょっと他に言い方あるだろ。

「没落した名家の女性が、生家を売らざるを得なくなる話」とか。口に出す前にもう少し考えるよ。俺にはバカなご夫人の話でも、向こうには思い入れのある話かもしれないんだから。

「あ……あの……巡音さん……」

声をかけようとして、それから先の言葉に詰まる。一度出た言葉は取り返しがつかない。

「……平氣」

巡音さんはそう言つて、顔をあげてくれた。

「確かにあの話にはそういう側面もあるのよね。ただ……わたし、最後に桜の園が無くなってしまったというのが、とても悲しくて。だつて、そこにずっとずっとあつたのよね。広い土地に生えたたくさんの中の桜の木。春になると一面が真っ白な花で埋まるの。無くなったら、もう戻つて来ないのよ」

……巡音さんには、「桜の園」が見えているのか。作中では登場人物の台詞でしか出てこない場所なのに。

巡音さんが「桜の園」の持ち主だったら、絶対に手放さないんだろうな。

「……ラネーフスカヤのようにはなりたくないの」

そんなことを巡音さんは言つた。あのご夫人、そんな名前だったよな。えーっと……そもそも似てないんだが。巡音さんをあんなバカと一緒にしたらバチが当たるよ。

「巡音さんなら大丈夫でしょ？」

「……ありがとう」

あ……笑つてくれた。良かつた。

「あの……で、話戻すけどさ。『桜の園』は、確かに上演するのに問題無さそうなんだけど 新入生歓迎公演でやるには、ちょっと話の中身が暗すぎる気が……明るい話の方が、興味を持つてもらえそうなんだよ」

暗いつつーか、ブラックなんだよな。いわゆるブラックコメディって奴。まあ正直言うと、さすがに俺でもちょっと笑いどころがわからない。バカをやらかしておいて「仕方ないわよ、私バカなんですよ」っていう、ラネーフスカヤを笑えばいいんだろうか。でもキツすぎちゃうとなあ。

「……生きた人間が出てこないお芝居は演じにくい?」

巡音さんはそんなことを訊いてきた。ああ、あれか。

「人生を描くには、あるがままでいけなくて、かくあるべきでも  
いけなくて、自由な空想に現れる形じゃないといけないんだよ、  
確かこうだつたよな。」

「お芝居には恋愛が必要なのよ」

そう言つて、巡音さんはくすくす笑い出した。やつぱり、笑つて  
た方がずっと可愛い。

「で、戯曲の話だけ……文学つて、暗いものの方が多いのよね」  
笑いが収まつた後、巡音さんは真面目な口調でそう言つた。まあ、  
そうだろうなあ。

「ショイクスピアとかは無理でしょ?」

「まあね……俺だつてやれるものなら『テンペスト』とか、やつて  
みたいくけど、さすがにああいうのはなあ……」

セットを考えただけで気が遠くなる。これに魔法の演出まで加わ  
るとなると……。

「バーナード・ショーの『ピグマリオン』は? 確かキャストは十  
人ぐらいだつたはずよ。パーテイーのシーンがちょっと難しいかも  
しれないけど」

うん? 『ピグマリオン』?

「それって、ギリシャ神話の話?」

あつたよな。自分の作った彫刻に恋をした彫刻家が、神様に祈つ  
て彫刻を人間にしてもらうつて話だ。ギリシャ神話だと例によつて  
衣装が……ああ、こんなのはばっかだ。無理矢理現代にでもして「演  
出です」とでも言つてやろうか。

「違うわ。あのね……『マイ・フェア・レイディ』つて映画、知つ  
てる? あれの原作なの。映画はミュージカルだけど、原作は普通  
のお芝居だから、やれるんじゃないかと思つたんだけど」

「え? 『マイ・フェア・レイディ』つて……あの、オードリー・  
ヘップバーンが主演してる奴?」

確かアカデミー作品賞受賞作だつたよな。うちの母親のオールタイムベストで、しつかりDVDも持つてゐる。意外なことに、姉貴も好きだつたりする。

「ええ」

巡音さんは頷いた。原作が戯曲といつにには驚かないけど、文学なのか？

「それ、文学に入れて大丈夫？」

「バーナード・ショーはノーベル文学賞受賞者だから、大丈夫じゃないかな」

「へーえ。それなら顧問も文句なんか言えないだろうな。現代だから、男性陣はスースで何とかなるだろう。厳密に言えばもつと前の時代だけど、高校演劇にそこまでの正確性なんて誰も求めないだろうし。

「……それならやれるかも。あ、でも、俺読んだことないんだよな最終判断はちゃんと作品を読んでからにしないと……。

「わたし、原作持つてるから、鏡音君さえ良ければ明日持つてくるわ」

「あ……じゃあ、頼んでいい？」

「ええ」

頷く巡音さん。明日巡音さんに本を貸してもらつたら、その日のうちに読んで、やれそうかどうか考えよう。……色々と助かつた。

## ショウジョウ素敵な商売はない（後書き）

演劇部が学祭で上演した戯曲つて何よ？ と思う人へ（そういう人いるのかという突つ込みはやめてね）

これです（抄訳ですが）

<http://www.alz.jp/221b/aonora/rrur.html>

1920年にこんな話を書いたチャペックは、色々な意味で先見の明があつたと思うのです。

完訳は岩波文庫で出ていて今でも普通に本屋で売られていますので、興味を持った人は探してみてください

## 自分はありふれた人間

巡音さんが言葉どおり『ピグマリオン』を貸してくれたので、俺は休み時間や、部活が始まるまでの短い時間に、最初の方を読んでみた。……映画を見た時はそこまで感じなかつたけど、ヒギンズ教授って相当性格イタくないか？まあ、そこがギャグとして機能してるんだろうが……。お前はだだつ子かよ、と突っ込みたくなる部分がかなり多いぞ。まあ、説明書きにもはつきりきつぱり「ガキくさい人」と書かれていたりするが……。

部活が終わると、俺は本を鞄に入れて下校した。今日は俺が晩飯当番の日なので、駅前のスーパーで買い物をしてから家路に着く。ちょうど自宅の前まで来た時だった。

「あら、レン君。今帰り？」

あ、お向かいの岩田さんのおばさんだ。

「ここにちは、岩田さん。はい、今帰つて來たところです」

頭を下げて挨拶する。

「ちよほど良かつた。今、お宅に回覧板持つて行こうと思つていたところなのよ」

岩田さんはそう言つて、手にした回覧板を掲げて見せた。「姉に渡しておきます」

俺は回覧板を受け取つた。だが岩田さんは自宅に戻るうとはせず、何か言つたそにしている。

「どうかしたんですか？」

「やっぱり、言つておいた方がいいでしょ？」

何かあつたんだろうか。

「何があつたんですか？」

「あつたつて言つか……最近、この辺りを不審者がつづつこっているみたいなのよ」

岩田さんはそんな話を始めた。

「お宅は若い娘さんと未成年の男の子の一人暮らしでしょ。だから心配で」

まあ、確かに……。特に姉貴、帰りがえらく遅い時があるしなあ。

「お気遣いありがとうございます。姉にも言つておきますから」

俺がそう言つと、岩田さんは重ねて「気をつけてね」と言つて、自分の家に戻つて行つた。不審者か……気のせいだといけど、最近色々と怖いニュースが世の中をにぎわせているからなあ。

通学鞄、スーパーのビニール袋、回覧板、郵便受けの中身を持つて、家の中に入る……持ちにくくな。分けりや良かった、といふことに、家の中に入つてから気づく。まあいいか。一度自分の部屋で制服から私服に着替えてから、下に下りる。

夕飯……時間のかかるものは面倒だから、今日のメニューはうどんにしたんだよな。茹ではるのは姉貴が帰宅してからにするか。下ごしらえをすませた後、俺は居間の座布団に座つて『ピグマリオン』の続きを読む始めた。教授がイライザに最初着せる衣服が日本の着物というのがびっくりなんだが……上演するんだつたらこには変えよう。いきなり着物姿でイライザが出てきたら、見る側は衣装が気になつて話の筋がどこへ行つてしまつ。

「ただいま～」

そこへ、姉貴が帰つて來た。

「お帰り、姉貴」

俺は本を置いて、立ち上がつた。

「お食事できる?」

「今日はうどんにしたから、これから茹でる」

「そう、じゃ、お願ひね。私は着替えてくるから」

姉貴は一階へと上がつていった。俺は台所に立つて、残りの作業を始めた。

食事ができあがつて、居間へと持つて行くと、姉貴は俺がテープルの上に置きっぱなしにしていた『ピグマリオン』を読んでいた。

……（つづ）

「姉貴、それ、俺が友達から貸してもらつた本なんだから、勝手に読まないでくれよ」

「別にいいじゃない」

「良くないっ！ やつを言つただろ、借り物だつて！」

俺はテーブルの上にお盆を置くと、姉貴から『ピグマリオン』を取り上げた。

「それ、誰から借りたの？」

巡音さんから貸してもらつたとは言いづらくなあ。ヒーッカ、なんで姉貴は巡音さんとの友達づきあいに否定的なんだよ。

「……クラスの友達」

「『マイ・フェア・レイティ』の原作でしょ？ あんたにしちゃ珍しい選択ね」

一々細かい突つ込み入れなくていいじゃないか。

「来年四月の公演の候補にどうかと思つてんだよ。顧問は文学をやれつてうるさいし、グミヤは明るい奴がいいって言つし」

「来年か……考えてみれば、もう十一月なのよね。時間の経過が早いわ

突然浸りだす姉貴。びつしたんだ急に。……いいや、放つておこう」と。

俺はテーブルの上に、うどんの入つたどんぶりと箸を並べた。とつと飯にして、食べ終わつたら部屋へ引っ込もう。

「いただきます」

「いただきます……あ、そうだ姉貴。回覧板来てるよ」

俺は、サイドボードの上の回覧板を指差した。

「じゃ、後でチェックしておかなくちゃ」

「それと、畠田さんが言つにほ、最近この辺を不審者がうろついているんだって」

「不審者？ 物騒な話ね」

それに関しては同意見だ。

「姉貴、気をつけてくれよ。時々帰りが遅くなるだろ

「ん~、でも、仕事だしねえ……。向こうに泊まつてもいいんだけど、あんたを一人にするのも、それはそれで心配だし

いや、俺としては泊まつてくれた方が安心なんだが。一晩一晩くらいい一人でも大丈夫だよ。

「俺より姉貴の方が危ないだろ」

「念のために護身グッズは持ち歩いてるわよ。用心に越したことはないしね」

「防犯ブザーとかかな？ 姉貴も、一応考へてはいるらしい。

「……ところでレン、あんたに『ピグマリオン』を貸してくれたのって、もしかしてリンちゃん？」

姉貴はいきなり、そんなことを訊いて来た。俺は呆気に取られてその場に固まる。……なんでわかつた！？

「やっぱりそうだったのね」

姉貴は俺の前で納得して頷いている。「まかすのは無理そつだつたので、俺も認めたことにした。

「……そうだよ。なんでわかった？」

「最近の一般的な高校生は、こんな本読まないのよ。それにその本、結構お値段が張るでしょ？ そうなると、そんな本を持つているのはリンちゃんぐらいじゃないかなって」

どうして本を見ただけで、そこまで推測が働くんだろうなあ。俺は姉貴を睨んだが、姉貴は涼しい表情をしている。ああ面白くない。

「クオや初音さんから貸してもらつたとは思わなかつたの？」

「初音さんは本を借してもらえるほど、あんた仲良くないでしょ？」

ミクオ君は、そういう本を買うお金があるのなら、ゲームかDVDに使うでしょう」

全くもつてそのとおりなんだが……。見透かされてるというのが実にいらつく。

「あのさ姉貴、俺はグミヤから四月の新入生歓迎公演の演目決めを任されてるんだよ。で、顧問が文学文学つてうるさいから、顧問を黙らせるよつなかりした文学作品がいるわけ。そうなると、詳

しい人に相談に乗つてもらうのが一番だろ。俺の周りにはそういう相談ができるような人が、巡音さんしかいないの」

「私は？」

姉貴は自分つてものがわかつてないんだろうか。

「姉貴に相談したらうくでもない回答が来るだろ。何薦める気だよ」「そうねえ……『機織りたち』とか？」

タイトルは普通に聞こえるが……どうせろくな話じやないだろ？

「念のため訊くけど……どういう話？」

「搾取される一方で、働いても働いても貧しくなるばかりとこいつに怒つた労働者たちが、暴動を起こして……」

「もういい……訊いた俺がバカだつた」

プロレタリア文学つて奴なのかもしれないが、新入生歓迎公演でそんな誤解されそうな話やれるか。

「ちゃんとした話よ？」

「暗い話は止めてくれつてグミヤに言われてんだよっ！」

「あら……それは残念ね」

ちつとも残念じやない。そんなのやるべらになら、『桜の園』やる方がまだマシだ。

「で、『ピグマリオン』にするわけ？」

「第一候補つてとこ。まだ途中だけど、結構面白いよ、これ」

教授がかなり嫌な奴だつたりするけど。まあいか、これぐらいなら。

「ふーん、まあ、『マイ・フェア・レイディ』の原作だしねえ」

「姉貴がその映画好きつてのが、俺としては実に意外なんだけど」俺としては素直な感想を口にしただけなのだが、姉貴はむつとしたようだった。

「あなたにはわかんないでしょうけど、この時代の映画はファシシヨンを語る上において外せないのよ。マイコ先生もいつも言つてい

るわ。六十年代こそがファシシヨンにおいて黄金期だつて」

ちなみにマイコ先生というのは、姉貴を雇つているファシシヨン

デザイナーで、まあ、なんていふか……『RENTE』のHンジユルのような人だ。姉貴に言わせると、エンジユルはドラッグクイーンで、マイコ先生はトランスヴェスタイルなんだそうだが。俺にはそういうこつ細かい違いまではよくわからん。

「それはさておき、あんた、ヒギンズ教授と同じ轍踏まないようこしなさいよ」

姉貴はなんでいちいち俺に喧嘩売らないと気が済まないんだ……。

「どういう意味だよ」

「ヒギンズ教授とあんたって、ちょっと似てると思ひのよね」

「俺はこんなに性格悪くなじつ！」

それにこの人、重度のマザコンじやないか。姉貴は俺がマザコンだとでも言いたいのかよ。

その姉貴は、何故か俺の前でため息をついている。

「自分がわかつてないって、怖いわねえ」

それは俺が姉貴に言いたい台詞だよ。全く。

「まあ……とにかく、ガラテアかイライザかわからないけど、逃げられなじょうにしなさい。……やっぱりイライザかしら」

意味不明な話をしないでくれよ。なんで姉貴はこうなんだ。

食事が終わったので、俺は食器を下げる時、『ピグマリオン』をつかんで自分の部屋に戻った。続きを読みたかったし、これ以上姉貴と話を続けると、さすがの俺もキレそうだつたから。食事当番は俺だから、後片付けは姉貴の仕事だ。

部屋のベッドに寝転がって、俺は『ピグマリオン』の続きを読んだ。半分ぐらいは読んでいたから、全部読みきるのにそんなに時間はかかるなかつた。

読み終えると俺は本を傍らに置き、天井を眺めた。……映画とラスト、違うのか。映画だと、一度飛び出したイライザは教授のところに帰つて来る。でも原作では帰つて来ない。教授が「イライザはフレディと結婚する」と言つところで終わっている。なんだか……すつきりしない終わり方だ。そりゃ、ヒギンズ教授は性格悪いしま

ザコンだし、あまり一緒にいて楽しい人とは言えないだろうが……。  
だからつてフレディみたいなバカっぽい役立たず選ばなくても。  
とにかく、この原作の結末は俺にはひどく不満だった。どうして  
不満に感じるのかはよくわからなかつたけれど、嫌なものは嫌なん  
だ。

……一人で考えていても埒が明かないな。明日学校で巡音さんと  
話をしてみよう。

## 自分はありふれた人間（後書き）

つべづく、自分のことになると鈍いですね……。

金曜の朝、俺が登校すると、巡音さんはやつぱり自分の席で本を読んでいた。

「おはよう、巡音さん」

声をかけると、巡音さんは本を置いて机に向ってくれた。

「おはよう、鏡音君」

あれ……また表情が暗いな。何かあったんだろうか。とはいって机に向ってくれるようになったのは、進歩だよな。

……自分で考えといでいうのも何だが、進歩ってなんだ?

「早速貸してくれた『ピグマリオン』を読んでみたんだけど、かなりいい感じだと思つんだ」

「じゃあ、『ピグマリオン』にするの?」

「俺としてはこれを推すつもり。まあ、他のみんなが嫌がつたら無理だけど、でも、多分大丈夫だと思つ」

「ちゅう」ちゅう言ってくる奴がいたら「じゃあ、お前にほもつとマシな案があるわけ?」とも言つてやろう。

「あの……ところで巡音さん、『ピグマリオン』って、映画と結末が違うんだね」

「ええ」

巡音さんは頷いた。

「それ……どう思つた?」

「どちらの結末がいいかとこつひとつ?」

訊かれたので頷く。巡音さんが思案する表情になった。

「あの……鏡音君。鏡音君は、今日は時間、空いてるの?」

珍しく、巡音さんがそう訊いてきた。今日ねえ……今日は部活の活動日だ。とはいって、演劇部のためにわざわざ巡音さんに協力してもらっているんだよな。この話だって、演劇部の公演のための話し合いなわけで。つまり、部活に行くのを遅らせて巡音さんの話

につきあつたところで問題は無い。むしろ俺の義務だ。

「大丈夫だよ」

「じゃあ……放課後に話してもいいかしら？ 少し時間をかけて考えをまとめたいの」

「いいよ」

俺は巡音さんと放課後に話すことに決めるが、自分の席に戻つてグミヤにメールを送信した。公演の作品選定の為に、今日は部活に行くのが遅れる、という内容だ。しばらくして、返信が来る。「何がどうなつていてるのかわからないけど、遅れるのはわかつた」か。何がどうなつていてるも何も、お前が俺に頼んだんだろ？

そして放課後。巡音さんはしばらく、初音さんと何か話をしていたが、やがて初音さんは帰つて行つた。  
「巡音さん、考えはまとまつた？」

初音さんが帰つたので、俺は巡音さんのところに行つてそう訊いてみた。巡音さんがすまなそうな表情で、口を開く。

「ごめんなさい。考えてみたけれど、よくわからないの……」

「うーん、巡音さんでもよくわからないのか。

「イライザは貧しい花売り娘で、お母さんはもう死んじやつっていて、お父さんは機嫌が悪いとイライザを叩くような人で、夢や希望とは縁のない人生を送つていたのよね。……だから、イライザは幸せになりたいんだとは思うんだけど」

そう言われると、何だかものすごく暗い話に見えてくるな。……

でもこれ、確かにそのとおりなんだが。

俺の前で巡音さんは、両手を組んで瞳を閉じた。そのまま、じつと考えに沈んでいる。声をかけるのもためらわれたので、俺はそのまま巡音さんを眺めていた。

「イライザは綺麗になつて、幸せになりたかったのよ。そういうものが何一つ無い人生だったから。泥にまみれたりしない幸せがほし

かつたの」

不意に瞳を開けると、巡音さんはしつかりした声でそう言った。  
綺麗になりたいねえ……。確かにあの映画のオーデリーは、最初ひ  
どい格好で出てくるけど……。

「どんな格好していても、綺麗な人はもともと綺麗なものじやない  
？」

幾ら顔を泥で汚してもオーデリーは美人だよな。

「女の子にとつては違うのよ。ドレスを着るのとぼろを着るのでは、  
全然。それに、その場所にふさわしい服装つて、あるじゃない?  
華やかなパーティー会場に、ぼろを着て入るわけにはいかないわ。  
一度くらい綺麗なドレスを着て、飾り立てられたパーティー会場で、  
多くの人たちの視線を集めてみたい……。イライザがそう夢見てしま  
つたとしても、それは無理のことだと思つの」

「うーん……そういうことなのかな? 僕にはまだちょっとピンと  
来ないけど……。でも巡音さんの話の方が、姉貴の話よりわかりや  
すいよな。

……巡音さんがドレス着たら、どんな感じになるんだらう?

「巡音さんもドレス着てみたいとか思うわけ? あ、でも、巡音さ  
んだったら、ドレス着てパーティーに出たことぐらいあるよね?」  
何せ筋金入りのお嬢様だもんなあ。会社関係でパーティーぐらい  
あるだろう。

「自宅で催されるものになら……わたし、まだ高校生だから、外の  
会場のには出たことがなくつて」

「自宅でパーティーって……まあ、でも、巡音さんのところも初音  
さんのところと同じぐらいでかい家なんだうつな。じゃあ、家でパ  
ーティーぐらじできるか。

あれ? 巡音さん、えらく憂鬱そうだな。

「パーティー、嫌いなの?」

「……あんまり好きじゃないの。おどぞ話に出てくるような、楽し  
いパーティーじゃないから。お姫さんもお父さんの会社関係の人ば

かりだし」

それは確かに退屈だらうなあ。会場ですーっと仕事の話ばっかりされてそうだ。お姫様もいいことばかりじゃないってことか。

「イライザの気持ちに関してはわかつたけど……結末に関しては? 話がそれてしまつたので　　この話はこの話で興味深かつたが元に戻すことにする。

「この作品を『シンデレラストーリー』として考へると、イライザが結ばれるべき相手はヒギンズ教授じゃないんじゃないかしら」

巡音さんは今度ははそつ言つた。うん?

「つまり……フレディと結ばれるべきだと?」

「ええ」

「あいつへタレの役立たずじゃないか。あんなののどこがいいんだ。」「なんで?」

ついきつい声が出た。巡音さんが驚いた表情になる。

「え?　だつて、ヒギンズ教授はドレスを着せてくれる人でしょう?　シンデレラにドレスをくれたのは、お母さん代わりの妖精か、死んだお母さんの魂だわ。……だから、教授は彼女の保護者だと思うの。年齢だつて離れてるし……」

巡音さんはそんな説明を始めた。……保護者?　確かに年齢離れてるけど、でもなあ。

「だつてフレディつて、何の役にも立ちそうにないじゃないか。確か定職ついてなかつただろ、あいつ。そんな甲斐性なしと一緒になつても、幸せにはなれないんじゃないの?」

「あんな奴と一緒になることなんか無いのに。」

「でも……好きつて言つてくれたわ」

それが巡音さんの答えだつた。そんな言葉だけで?

「それがそんなに大事?」

「大事なのよ……少なくとも、イライザにひとつでは」

巡音さんにとつてはどうなんだろう?

「ずっと腐つたキャベツと同じ扱いなんて、わたしだつたら耐えら

れないわ。どんなに頑張つても、ちゃんととした褒め言葉すらもうりえないんだもの」

巡音さんは視線を伏せ、淋しそうな声でそう言つた。……そんな表情しないでくれ。巡音さんが腐つたキャベツだなんて思つてないから。

それにしても、確かにそこはビギンズ教授の問題点ではあるな。もうちよつとかける言葉を選べよ、おっさん。そんなんだから逃げられるんじゃないか。

「でもさ、ずっとイライザを見ててくれたのは教授の方だぜ。イライザが汚い言葉づかいだった頃からさ。フレディなんて、綺麗になつたイライザが広場で出会つた花売り娘と同一人物だつて、気づいてすらいなさそうだし。そんな上辺しか見てないよつな奴はやめておいた方がいいと思うんだ」

絶対気づいてないよな、あいつ。まあ、たいした話をしたわけじゃないから仕方ないかもしれないが……。

「でも、腐つたキャベツって言われるのは嫌なの！」

泣きそうな声で巡音さんはそう言つた。いやだから、誰も巡音さんを腐つたキャベツ扱いはしてないつて。……イライザに同調しうきちゃつたみたいだ。

「だからそんなこと言わないって」

「教授はずつとやめてくれないじゃない！」

えーと……俺はそんなこと言わないけど、確かにあの教授、やめないよな。……なんであるなことばっかり言つてんだ、あの人。どう考えても敵ばかり作るタイプだよな……。頭すごくいいし、独特の優れた才能だつて持つているつてのに。

……そう言えば、イライザも決して頭は悪くないんだよな。最後の方では教授を理詰めで言い負かすし。ちゃんとした教育を受けてないからわかりづらいだけで、実質的な知性は教授と互角なんじやないのか？ 教授が言うところによると耳もいいらしいし。

教授は、イライザの能力自体はわかってるんだよな。すごい子だつ

てことも。けど、ああいう態度しか取り続けられない。ガキくさい人……というか、ガキだよな。説明書きにもそう書いてあるわけだし。

「しょうがないよ、あの人ある意味じゃお子様なんだから」「お子様って……」

「だからさ、ヒギンズ教授つて人は大人になりきれてないの。多分どこかで成長が止まってるんだよ」

あ、そうか。要するに、あの人好きな女の子にイタズラする小学生のレベルなんだ。……小学生ならギリギリ可愛く見えなくもないけど、あの年齢でやられるとイターッ。

「ついでにさ、あの人は変なところでプライドが高いから、田の前にいるライザのことをちゃんと認めてあげられないんだよ。ライザのことをいつまでも花売り娘つてバカにしてるけど、家のあれこれを任せてたつてことは、本当は信頼してたつてことだろっし」

ただの花売り娘だつたら、あんな短時間でちゃんとした貴婦人になるのは無理だよな。教授は自分がだけの手柄にしたがつてゐるけど、素材が良くなけりゃあそこまで行かないよ。

「言いたいことはわかるけれど……じゃあ、この後はどうじたらいいの？」

巡音さんはそんなことを訊いてきた。どうしたら……ねえ。教授は結構いい年だから、今更自分が変わるのは無理だろうな。えーと、つまり……。

「ライザの方が大人になるしかないんじゃない？　ああ、この人はお子様なんだ、わたしが世話を焼いてあげなくちゃ、って感じで、教授の首に手綱でもつけてしつかり握るしか」

それだと今度は教授がマヌケに見えてくるな。ま、仕方ない。才能のありすぎる人はどつか子供みたいなもんだつて、何かに書いてあつたつけ。それにそんな自体を招いたのは教授なんだし、ここは我慢してもらわないと。

「ライザはずっと我慢しなくちゃならないの？」

「我慢とはひょっと違うと思つ。要するに、イライザの方が主導権握つて上に行くつことだから。案外の人、甘やかされると弱いんじゃない？」

マザコンだしね。まあ、マザコンの割りに、ヒギンズ教授の母親はえらくまともだったりするが……。あの母親に育てられて、どうしてあなるんだか。

巡音さんは、淋しそうな表情で首を横に振つた。

「……わたしだつたら、やつぱり耐えられない」

ラブレターを書くしか能の無い男なのに？ そんなことやつてる暇あるんなら仕事の一つでも探せよ。

「なんで？ フレディなんてやめようよ。あんなおつむの軽い男と一緒にになつたら、一生、中身のある話はできないぜ。将来性も無いし」

イライザの知性がもつたいたいないじやないか。将来をビビッと捨ててどうするんだよ。

「イライザは愛されたいのよ。話がどうのとかの問題じやないわ」

「そんなもつたいたい」

「愛をほしがつたらそんなにいけない？」

参つたな……平行線になつてきた。どうやつてこの話を落としたらいといんだらう。そう想つた時だつた。不意に、俺の携帯が鳴り出した。

「ごめん、ちよつと待つてて」

俺は携帯を取り出した。グミヤからメールか。開くと、「今どこにいる？」と表示される。何だよ、所在確認か？ 俺は今取り込み中だつてのに。「自分の教室」と打ち込んで返信。何なんだ一体。「急用？」

「いや、大した用事じゃなこよ。それで、話戻すけども、教授が駄目だからフレディつてのは、やつぱりちょっと違うと思つんだよ。それつて逃避だろ」

それはやつてはいけないとのような気がする。うん。

「そんなのわからないわ。だってフレディはイライザに長いラブレターを送っているもの。イライザはそれでフレディを好きになつたのかもしないじゃない」

それは全くもつてそのとおりなんだが……。ああもう、なんでこんなにいろいろするんだ。フレディの肩なんか持たないでくれよ。「それに、演出一つで、フレディをもつと感じ良くすることもできるんじゃないかしら？ オペラとかでも、時々そういうことがあるのよ」

言つてることは實に正論だが……そんな演出は考えたくないつ！「それなら逆も可能だろ？ ヒギンズ教授をもつと感じ良くすることだつて」

「それは……そうだけど……」

困つた口調でそう言つ巡音さん。そんなに教授が嫌なのか？ 例によつて、下を向いている。俺も何を言えばいいのかわからず、しばらく沈黙が続いた。

そんな気まずい時間をぶち壊したのは、教室のドアが開く音と、その後に続いたでかい声だった。

「あーっ、いたいた！ つて、鏡音先輩、どうして巡音先輩が一緒なんですか！？ もしや部活サボつてデートですか！？」

「グミだ……なんでここに来るんだよつ！ といふか、部活はサボつたんじゃないし、デートでもないつ！ お前の頭の中にはそれしかないのか。

唖然とする俺の目の前で、グミは教室に入ってきた。後ろにぞろぞろと、演劇部の連中が続いている……クオどグミヤもいるな。何に来たんだよお前ら。

「鏡音君、部活サボつたつて……」

巡音さんが田を見開いてこっちを見ている。げ……。巡音さんに黙つておこいつて思つたの。これも全部口の軽いグミのせいだ。「いや、グミヤに遅れるつて連絡はしておいたんだよ。演劇部の為の話し合いなんだから、こっちを優先しただけ」

「でも……」

巡音さんは俺の田の前で困り果てている。まずいな……絶対気にしてゐる。巡音さんのせいじゃないのに。一方で、演劇部の連中はこいつを興味津々と言つた田で見ている。

「おい、グミヤ。これは一体何の真似だ。俺は、演劇部の次回公演の決定のために話し合つから、部活に行くのは遅れるってメールしたよな。なのになんで押しかけて来たんだ」

俺はグミヤに訊くことにした。変な答えだったら、幾ら俺でも怒るだ。

「いや、それがさ……」「

「鏡音先輩っ！ 次の演田はあたし、もつと純粋なラブストーリーがいいですっ！ もちろんヒーローはグミヤ先輩でヒロインはあたしで！」

「ちゅうとグミ、部を私物化しないで。それはそうと鏡音君、次は笑える口メティにしない？ そういうのが一番気楽に見てもうれると思つのよ」

「俺は次はアクション物がいいと思つ。そういうのだったら、もつと男子を増やせると思つんだ。断じて俺が恋愛物嫌いだからじゃないで。大体うちの部は男手が少なすぎる」

演劇部の連中は、こぞつて勝手なことを言つ出した。あーの一なー。戯曲の一冊も読まないでいるのに、なんでそういう主張ばつかりしていくんだよつ！ セめて条件にあつ戯曲を探してからこいつつての！

「いい加減にこいつを前らつ！ 次の作品はほぼ決定済みなんだよつ！」

怒鳴ると、演劇部の連中は静かになった。

「あ、決まつてんの？」

部を代表してなのか、グミヤがのほほんとした口調でやつ訊いてきた。つたくもつ。「何にしたんだ？」

「『マイ・フェア・レイディ』だよ。ただし原作だから、『ミュージカルじゃないぞ』

『ミュージカルをやるのは大変すぎる。しばらくして、クオから抗議の声があがつた。

「なんでラブコメなんだよっ！？」

「色々考えてこれがやりやすそうって結論に達したんだよ。というかクオ、お前、何かもつとマシな案あるわけ？」

俺がそう訊くと、クオは悔しそうな表情で黙ってしまった。やつぱり代案は無いんだな。

一方で、女子のほとんどは喜んでいる。昔の映画なのに人気あるな、『マイ・フェア・レイディ』つて。競馬場のドレスがどうの、と言っている奴がいるが、原作には競馬場のシーンは無い。後でこれが原因で何か言われなきやいいんだが。

「みんな、『マイ・フェア・レイディ』でいいか？」

グミヤが訊いている。女子は全員手をあげた。一年の男子一人は、反対というより、作品自体を知らないらしい。とはいっても過半数が承諾したんだから、これで決定か。

「あの……鏡音先輩、いいんですか？」

不意に、グミが俺にそう訊いてきた。

「『マイ・フェア・レイディ』に決めたのは俺なんだから、いいに決まってるだろ」

「いえ、作品のことじゃなくて……巡音先輩、帰っちゃいましたけど」

「へつ？」

俺はびっくりして振り向いた。巡音さんの席は空になっている。

……まずい。

「放つておかれて淋しかったんでしょうねえ。鏡音先輩、女心つてもんがわかつてないですよ」

うつ……グミの言うことは真に受けない方がいいとは思つもの、なんだかグサツときたぞ……。

「このいちいりさんと言わなくていいよ。……とにかく、出て行つたのつていつ？」

「つじわつきですよ。ちなみに巡音先輩はちゃんと鏡音先輩に『帰るから』って言つてしましましたよ。鏡音先輩聞いてなかつたみたいでけど。巡音先輩、もしかしたら、無視されたつて思つちやつたのかもしれないですね」

聞いてなかつたんじゃなくて、聞こえなかつたんだよつ！ グミ、お前、聞こえていたんなら、その場で俺に教えてくれればいいだろつ！」

「おい、レン。どこ行くんだ」

教室の出口へ向かおうとした俺に、グミヤが声をかけた。  
「巡音さん探しに行つてくる。多分、まだ追いつけると思う」

「なんで？ 放つておけばいいじやん。話は終わつたんだろ」

これはクオだ。あのなあ。そんな真似できるか。

「演出について相談してたとこで、その話はまだ終わつてないんだよつ！」

「そんなの部員みんなで話しあえば済むだろ。あの子部外者なんだし」

何故かしつこくクオが絡んでくる。……つるさい。

「俺の方から頼んだんだぞ。途中で放り出すわけにはいかないだろうがつ！」

俺はみんなを置いて、教室から飛び出した。

黙むのまいにかの昂躍（後書き）

「ハーフレトライに腹が立つのか、いい加減に決ついたらどうなんでしょうね……。」

それと演劇部の皆さん、空氣読みましょうか。

## 君は特別な人

廊下を走ってはいけない。それはわかっている。だが、今の俺にそんなことを気にしている余裕は無かった。校舎の出口に向かって走る。巡音さんの性格上、寄り道するとは考えにくいから、この途中にいるはずだ。校舎の外に出てしまっていたとしても、校門の辺りで迎えを待つだろう。

下駄箱のところまでいくと、見慣れた後姿が見つかった。ああ良かった。

「良かつた……まだいたんだ」

「え……？」

巡音さんがびっくりした表情で振り向いた。

「……鏡音君、どうして？」

「勝手に帰らないでくれよ」

俺の言葉に、巡音さんはうつむいて視線を伏せた。

「……」めんなさい

いや、別に謝ってほしいわけじゃ……。参ったな。そもそも、演劇部の連中が押しかけてきたせいで、遠慮しちゃったんし。「でも、わたし、部外者だし……あの場に残つていたらおかしいかと思つて」

巡音さんの人見知りする性格を考えると……追い払うべきだったな、あいつら。誰かが「で、この人はなんでここにいるの?」なんて訊こうものなら、巡音さんはひどく傷ついただろう。俺の方が頼み込んだのに。

「そんな気回さなくていいから。押しかけてきた向こうが問題なんだし」

巡音さんはまだ下を向いている。……気にしてるんだな。うつむいた肩が微かに震えている。

……不意に、田の前の細い肩を抱きしめたい衝動にかられた。巡

音さんの身体の柔らかさや温かさは知っている。何せこの前……つて、俺、今、何を考えたんだ!? そんなことしたら、巡音さんが怯えるだろ!

「でも……部活があるんでしょ?」

自分のよくわからない思考に自分で突っ込みを入れていた俺は、巡音さんのその言葉で我に返った。

「いやだからや、部活動を円滑に進める為には、次の作品を早く決定することが大事なんだよ。でもって、内容をちゃんと理解しない状態で、上演の準備なんてできないだろ。だからこの話し合いは大事なことなんだ。なんか、グミヤに上手く伝わってなかつたみたいで、妙なことになっちゃつたけど」

……実は、半分ほど自分でも何を言つているのかよくわからなかつたりする。

「そういう話なら、演劇部の人たちとした方がいいと思つの。何もわたしじゃなくとも……」

クオと同じようなことを巡音さんは言つ出した。いや全然違うんだよ。他の奴に訊いたって、多分俺が求めているような答えは返つて来ない。

「巡音さんじやないと駄目なんだよ」

「どうして?」

「…………」

我ながら、答えになつてないな。とにかく、ここで逃げられたら困るんだ。

「あの、わたしそつき、お迎えを頼んじやつたの。だからそんなに時間無いけど……それでもいい?」

巡音さんは、おどおどとそう言つ出した。う……もつと早く教室を出つや良かつた。クオの奴め。

「……いいよ」

短時間でも話せないよりました。

「じゃ、中庭でも行こうか」

あそこなら座れるしな。巡音さんが頷いたので、俺たちは連れ立つて中庭へと移動した。そこにあるベンチに腰を下ろす。

「……話を整理しようか。イライザは愛がほしい。だから愛をくれない教授ではなくフレディを選んだ。けど、フレディはヘタレで、イライザを幸せにできるような甲斐性があるとは思えない。そういうことだったよね」

「……ええ」

巡音さんは頷いた。

「一方、教授はガキだから、面倒を見ててくれる人が本当は必要。けど、優秀すぎる上にプライドが高いから、並のレベルの相手だとたき出されてしまう。イライザは頭がいいから、教授が相手でもやりこめることも可能で、教授の相手としては理想的。でも、教授は変人だから気持ちを素直に口に出せない」

俺がそういううぶつにまとめるど、巡音さんはまた考え込んだ。「わたしは、イライザが選ぶのはフレディだと思う。魂を手に入れたガラテアは、もうピグマリオンのものじゃないのよ」

……そんなに教授が嫌なのか？　なんだかまたいらいらしてきた。巡音さんは、頭上の空を憧れるような瞳で見上げている。「だつてもう自由だもの。どこへだつて飛んでいけるわ」

「うん？　あれ？　何か気になるな……。

「けどさあ、やつぱりフレディじゃなくていいんじゃない？」

「どうしてそんなにフレディが嫌なの？」

「ヘタレの役立たずは嫌いなんだよ」

そう答えてから、俺はあることに気がついた。

「巡音さん……フレディと一緒になつたら幸せにはなれないよ」

「え……どうして？」

「巡音さん、フレディのことを『シンデレラ』における王子のようなものだつて言つたよね。でも、作者の意図がそくなら……もっといい男にするんじやない？　ヘタレの役立たずじやなくつてさ」

別にもつとできる設定でも問題はないはずなんだ。なのにあんな

ボンクラにしたってことは、浮わついた感情で相手を決めるなって意味なんじやないのか？

「で、でも……じゃあどうして、フレディを選ぶエンディングなの？」

「うーん、そう来たか……。けど、物語が常にハッピーホンドで終わるとは限らないよな。どじぞの映画監督だつて……。

「一見ハッピーホンドに見えて、実のところちうではない……そういうラストを演出したかったんじやない？」

「この戯曲、何気に毒氣、強いもんな。その可能性も充分あるんじゃないだろうか。

とはいえ、俺としてもすつきりしないんだよな。『マイ・フェア・レイディ』になつた時、帰つて来る結末にしたのは、その辺りが影響してるんじゃないだろうか。客が入らないと困るし。

「けど、大掛かりな舞台になると、そういう毒氣つて受けないんだよね。だからミュージカルにする時に、結末を書き換えたんじやないかな」

そこまで喋つて、俺は、巡音さんが今にも泣きそうな表情をしていることに気がついた。

「あの……巡音さん？ 大丈夫？」

「『めんなさい。イライザのこと考えていたら、のめりこみすぎちゃつたみたい』

……何というか、すーっと物語の世界に入つてしまえるんだな。ちょっと羨ましいかもしね。俺だって本を読んだり映画を見たりして、その世界に没頭することはあるけれど、こんな風になることはない。

「結局、イライザに幸せは来ないのかなと思つていたら、悲しくなつてしまつて」

「うーん、そういう風に考えるのか。俺としては物語の結末が不幸でも仕方ないとは思うけど……。

「幸せ不幸せなんて気の持ちよう一つなんだからさ。フレディを選

ぶにせよ教授を選ぶにせよ、イライザの頑張り一つで案外何とかなるかもしれないよ。どうせそこから先は書かれてないんだし」

巡音さんを元気づけたくて、俺はそう口にした。実際のところ、フレディを選んで欲しくはなかったりするけど。これ以上巡音さんを落ち込ませたら、確実に泣かせてしまう。それだけは避けたい。

「…………ありがとう」

「ちょっとは元気になってくれたのかな？」

「それで、結末のことだけ……」

俺が結末についてもう一度話をしようとした時だった。巡音さんの携帯が鳴り出した。げ……これって、多分……。

「『めんなさい、携帯が鳴ってるの』

巡音さんはそう言ひて、鞄から携帯を取り出した。表示を見たその表情が、さつと曇る。

「…………お迎え？」

俺が訊くと、巡音さんはまなそなうな表情で頷いた。

「ええ。…………『めんなさい』、話の途中なのに。でも、わたし、もう帰らないと

色々と無理を言つているのはこいつだ。

「いや、いいよ。『ピグマリオン』のこととか、今日のこととか、色々助かった」

「あの…………鏡音君、明日は時間ある？」

巡音さんの方からそう言つ出しだので、俺は驚いた。確かにまだ結論は出てないから、俺としてもまとめたいが……明日は学校は休みだ。

「巡音さん、明日は第二土曜だから、学校は休みだよ」

基本的に土曜も授業はあるが、第一土曜だけは休みつてのがうちの学校のシステムだ。巡音さんがしまったという表情になる。

「俺としては、外で会つて話してもいいけど……巡音さんは大丈夫？」

明日は部活も無いしな。でも、巡音さんは俺と違つて色々忙しい

んじゃないだろうか。

巡音さんは俺の前で、ためらいがちに頷いた。いいつてことだよ

な。

「……どいで会つの？ また鏡音君の家とか？」

あ、まずい。姉貴は土曜は仕事だ。姉貴がいない時に、巡音さんを家にあげるわけにはいかない。

「『めん、俺の家は無理。姉貴は土曜は仕事なんだよ。あれでも一応俺の保護者だから、姉貴の留守中に勝手にお密さん呼ぶわけにはいかなくって』」

姉貴のいない時に巡音さんを家にあげたなんてバレたら……下手をすると半殺しにされるな。

「鏡音君、柳影公園つて知ってる？ 大きめの都立公園なんだけど『知らないけど、調べられると思つ。そんな大きい公園なら、簡単にわかるだろ』」

ネット検索で大抵のことはわかる世の中だ。携帯で簡単に地図も見られるし。行くのはそんなに難しくないだろう。

「そこがいいの？」

「……ええ。その公園、ボート乗り場があるの。そこの前に朝の十時でいい？」

柳影公園のボート乗り場ね。

「わかった。じゃ、朝の十時にそこで待つてるよ」

「ありがとう。それじゃあ、わたしはもう行かなくちゃ」

それだけ言って、巡音さんは去つて行つた。……なんか妙なことになつたけど、明日も話せるんだからよしとするか。

巡音さんと別れた後、俺は部活に戻つた。演劇部の連中はよつてたかつてあれこれ訊いてきたが、適当な返事をしばらく続けていると、うんざりしたのか何も訊いて来なくなつた。意外と使えるな、この手。

やがて部活が終わり、着替えて帰り支度をしていると、クオが不機嫌そうに俺に話しかけてきた。

「なあ……なんであの子なんだよ」

「何の話だよ」

何が言いたいのかがよくわからず、俺はクオに尋ね返した。

「四月の公演のことだよ。なんで巡音さんが相談相手なんだ？」

「なんだよ、俺の決断に文句があるのかお前は。

「他に文学に詳しい知り合いがないから」

「お前の姉さんは？」

「あのなあ。俺の姉貴がどういう人間か知ってるだろうが、お前。姉貴に相談すると、プロレタリア文学とか、そういう変なのを薦めて来るんだよ。労働者が暴動を起こす話なんか、新入生歓迎公演でやれるわけないだろ」

「だからってラブコメか？」

結局不満はそこか。

「明るい話にしろってのがグミヤの注文なんだよ」

「俺がどうしたって？」

やりとりを聞きつけたのか、グミヤが割つて入ってきた。

「グミヤ、クオに説明してくれよ。クオの奴、俺の決定に不満があるみたいで」

「四月の公演でやる演目の話か？ 俺もお前も文学には縁のない人間だろ。他の奴もそうだしさ。一番詳しいのがレンなんだから、レンに任せるのがベストなんだよ」

「だからって部外者に相談することは……」

「そのレンが、さつきの子を相談相手に選んだんだったら、その判断は尊重するもんだろ」

なんか回りくどくないか、その説明。クオはとすると、未だに不満そうな表情をしている。

「……ラブコメってのが気に入らない」

そこまでラブコメを嫌わなくてもいいじゃないか。それに、『ピ

『グマリオン』は、一筋縄じやいかない毒氣のある話だつての。』

「クオ、不満に思つてんのはお前一人ぐらいだぞ」

「グミヤ、お前はいいのかよつ！」

「文学作品読むなんて俺のガラじやないしたあ。『マイ・フェア・レイディ』でいいよ」

駄目だこりや、とでも言いたげな表情で、クオはグミヤを見やつた。そこへグミが駆け寄つてくる。

「グミヤせんぱ～いつ！　か～え～り～ま～しょ～つ！」

そう叫ぶと、グミはグミヤの首に勢いよく飛びついた。……つくづく、こいつのノリにはついていけない。

「じゃあな。ああ、そうだ。クオ、どうしても嫌だつて言つんなら、一週間以内に『これがやりたい』つての、見つけて来い。そうしたらもう一度話し合いをやるから

グミが首にしがみついたまんまの状態で、グミヤは部屋を出て行つた。……器用な奴だ。

……俺も帰るか。

## 君は特別な人（後書き）

最後のグリル、どうこうの状態で歩いているんだろう……。謎だ。

最初にストーリーラインを考えた時は、レンの行動がもつと暴走していたんですが、どう考へてもリンクが怯えて話が続かなくなるよね、ということで却下しました。

## ミクの要望

リンちゃんと鏡音君は順調に仲良くなつていいよつで、わたしは今日、リンちゃんに「放課後に鏡音君の相談に乗りたいから、またミクちゃんと一緒にいたことにしてもらえる?」と頼まれてしまった。わたしの返事は「もちろんいいわよ」に決まつている。

ついでに何を相談するのかも訊いてみただけど、鏡音君の相談については、演劇部の次の公演についてのことだった。残念ながら、まだ色っぽい話題とまでは行かないみたい。とはいって、いつう話が出るのは相手を信頼している証拠よね。

それにしても、毎回アリバイ工作が必要というのも考え方よね。どうしてリンちゃんのお父さんって、あんなに詮索したがるのかしら。普通じゃないと思うのよ。わたしの家に電話をかけて「本当に一緒にいたのか」と確認したがるなんてね。あ、もちろん、毎回つてわけじゃないわ。でも、不定期とはいえ突然訊いてくるから、リンちゃんはいつもお父さんの影に怯えている。

まあ、あのお父さんが訊いてきたところで、わたしの返事は決まつている。「はい、一緒にいました」よ。たとえリンちゃんが根回しを忘れたつて、本当のことなんか言わないわ。仮にわたしを疑わしいと思つたところで、それ以上追求する材料なんて無いしね。まあみなさいつての。つこでにわたしのお父さんとお母さんにも、根回し済みだもんね。

さてと、あの二人をもつと仲良くなせることどうしたらいいかしらね……しばらくのところは、静観でもいいかな。こういう時は、下手につつかない方がいいだろつし。状況を観察しながら決めることこてしましょ。

その日、部活を終えて帰宅してきたクオは、えらく不機嫌だった。

わたしは居間のテレビで、最近のお気に入りの動物もののドキュメンタリーを見ていたんだけど、クオの様子があまりにもあれだったので、思わずテレビの音量を下げてしまつたぐらい。

「あ、お帰りクオ。……どうしたの？」

「……別に」

それが、クオの返事だった。ちょっとー、わたしが心配してゐるのにその返事はないでしょ？

「部活で何があったの？」

わたしがそう訊くと、クオはわたしの隣に腰を下ろした。ビービーハラ、話す氣はあるみたい。話す氣がなければ、クオはせつせつと自分の部屋に行っちゃうしね。

「演劇部じゃさ、四月に新入生歓迎公演をやるんだよ。うちの部、今年から顧問が変わって、新しい顧問ってのが変な趣味で、『どうせやるなら格調高い文学作品をやれ』とか言い出しあがつて」

その辺の話は知つてるわよ。クオから大分前にも聞いたし、今日はリンちゃんからも聞いた。

「で、うちの部でまともに文学作品を読んだことがあるのってレンぐらいで、それでグミヤが作品探してくれつてレンに頼んで、そしたらレンの奴、作品を決めるのを巡音さんに相談しちまつて」

クオ……それ、機嫌が悪い理由にならないわよ。鏡音君がリンちゃんに相談したのって、わたしはいいことだと思うわ。

「それでレンの奴、新入生歓迎公演の作品を『マイ・フェア・レイディ』に決めやがったんだよ」

クオは腹ただしそうにそう言った。あー、そういうことかあ……

リンちゃん、『マイ・フェア・レイディ』を薦めたのね。あれが文學だったとは知らなかつたけど。

あの映画はわたしも大好き。オードリーは綺麗だし、音楽も明るくて楽しいし、ドレスも素敵だしね。競馬場で着ている白と黒のドレスが有名だけど、わたしはラストシーンでオードリーが着ているピンクのドレスがお気に入り。あんなの着てみたいな。

あ……でも、うーん……。

「『マイ・フェア・レイティ』になつたんだ……ちょっと残念かも」  
わたしがそう言つと、クオはびっくりした顔になつた。

「お前、残念つて……」

そんなに驚かなくともいいじゃないの。

「だつて『マイ・フェア・レイティ』つて、男性キャラクターが  
んまりかつこよくないでしょ？ 主人公の教授とその友人の大佐は  
いい年したおじさんだし、若いお坊ちゃんは頬りなさ過ぎてかつこ  
よさとは無縁なんだもの」

この分だと、クオはまたかつこよくない役だらうな……。折角  
舞台上上がるんだから、かつこいい役をやってほしいのに。

「どうせならかつこいい男の人ができる舞台を見たいのよねえ…

…

ヒーローでも好青年でもなんでもいいから、そういう役は無いの  
かしら。

「お前は演劇部の舞台に何を期待しているんだよ」

「クオがかつこいい役をやってくれること」

わたしがそう言つと、クオはほんとした表情になつた。……ど  
うしちやつたのかしら。

「クオだつて、かつこいい役やりたいでしょ？」

「学祭の時はかつこよかつただろ」

クオはそんなことを言い出した。えへ。クオの感覚だとあれがか  
つこいいんだ。わたしには理解できないなあ。

もし、この次もリンちゃんが鏡音君に相談されるようなら、「男  
役がかつこいい作品」を推薦してもいいよひづりと。

## ミクの要望（後書き）

男役がかっこいい戯曲といわれても、私がピンと来ません。戯曲  
じゃないんですけど、オペラとかでも大体テノールはヘタレだしねえ  
……。

## 未知との遭遇

金曜日は姉貴が食事当番なので、俺は買い物はせずに自宅に帰った。十一月なので、もう辺りは真っ暗だ。これからどんどん暗くなるのが早くなるのかと思つと、毎年のこととはいえちょっと気が滅入る。

自宅の前まで来た辺りで、俺は家の前に誰か立つてゐるのに気がついた。……ん？ 誰だあいつ。シルエットからすると男みたいだが……。俺は電柱の影に隠れて、様子を伺つた。

誰だかわからない奴は、俺の家の様子を伺つてゐる。……まさかお向かいさんが言つていた不審者？ ひょつとして空き巣か何かか？ 空き巣だつたら、今のうちに声をかければ逃げるはずだ。

「何やつてんだ」

俺は電柱の影から姿を現して、男に声をかけた。男がぎょっとした表情になる。

「あ……えーと……君、誰？」

「それはこっちが訊きたい。人の家の前で何してんだよ」

「え？ いやその？」

男はうろたえながらも逃げようとした。空き巣のくせに。

「僕はただこここの人の帰りを待つてるだけ……」

「はあ？ 誰のだ。俺の知り合いにこんな奴いないぞ。

「俺んちだぞ！ そんな言い訳通用するか！」

俺が怒鳴ると、相手は飛び上がつた。返答しだいによつては鞄で殴つてやる。

「言い訳じやなくて……あの、その……」

「レン君何騒いでるの？」

「あーっこいこいつ！ 私がみかけた不審者つて！」

声を聞きつけたのか、お向かいの岩田さんとお隣の河合さんが出てきた。あ、やっぱり不審者つてこいつだったのか。

「岩田さん早く通報！」

「違います！ 僕は不審者じゃありません！ 僕はただメイロさん  
が帰つてくるのを待つていただけで……」

「まあ、メイロちゃんのストーカーですって……」

「嫌だわ、最近こいつの多いらしいわよ。警察に突き出しましょ  
う」

逃げ出せりとする男の首ねりを、俺は引つつかんだ。そのまま  
引きずり倒して地面に押さえつけた。こいつのはきつちつお灸を  
据えて置かないと。

「レン君そのまま捕まえとこい。今警察呼ぶから」

「止めてください！」

「黙れストーカー！」

「……なんの騒ぎ？」

少し離れたところから聞こえてきた姉貴の声に、俺は驚いてそつ  
ちを見た。スーパーのビニール袋を提げた姉貴が立っている。どう  
やら、今帰つて来たところらしい。

「メイロちゃん大変よ！ 説明して！ 僕は不審者でもなんでもないつ  
「あ、メイロさん！ 説明して！ 僕は不審者でもなんでもないつ  
て！」

同時に叫ぶ岩田さんと不審者。姉貴が小走りにこりひきやつきて  
て、不審者を見て驚いた顔になる。

「……カイト君！？ どうしたの！？」

「姉貴、知り合いで？」

「マイロ先生の弟さんよ。レン、離してあげて」

姉貴の雇い主の弟？ 余計怪しいじゃないか。

「姉貴、こいつストーカーだぜ。家の様子伺つてたんだから  
知り合いならますます危険だ。姉貴に変な真似される前に、警察  
に突き出そう。

「……とこりかカイト君、何しに来たの？」

「メイロさんに訊きたいことがあって……それで、家の前で帰りを

待つてたんだけど……マイコさん、この子は？」

「弟のレンよ」

「あ、マイコさん、弟がいたんだね。どうも、初めまして。始音力イトです」

のほほんとした口調で、カイトとやらはそんなことを言った。状況わかつてんのかこいつは。

「黙れストーカー」

「僕はストーカーじゃない！」

締め上げると、奴はストーカーの癖に文句を言つ出した。

「じゃなんで俺の家の前うるうらしていたんだよ！」

「だから、マイコさんの帰りを待つてたんだってば」

……理由になつてないぞ。

「姉貴に用があるんなら職場に行けば済む話だりー。」

お前の姉さんが姉貴のボスなんだから。

「マイト兄さんに会いたくなかったんだよー。」

「カイト君……姉さんって呼ばないと、マイコ先生怒ると思ひわ

姉貴……突っ込むところはそこかよ。

「生まれてこの方ずっと兄だと思つていた人に、突然『姉になりました』なんて言われたって、受け入れられないんだつー！」

「そんなことを言われてもねえ。マイコ先生はマイコ先生なんだし「マイコさんつー！ 君だつてそこにいるレン君が、ある日突然妹になつて帰つて来たら対応に困ると思つよ」

もうちょっとましな例えは無いのかあんたは。

「え……男でも女でも、レンはレンよ」

姉貴も乗つからないでくれ！

「とにかく……ちゃんと話をしましちつ」

言いながら、姉貴は携帯を取り出した。どこに連絡する所なんだ？

「姉貴、携帯なんかどうするの？」

「マイコ先生に連絡しようと思つて」

姉貴の言葉に、ストーカーカイトの顔が引きつった。

「そ、それはやめて！　マイト兄さんの職場の子につきまとつたな  
んて思われたら、僕、マイト兄さんに殺されるよ！」

「だからって、このままつてわけにはいかないでしょ？　あ、もし  
もしメイコです。マイコ先生、実は今、帰つて来たら私の弟がカイ  
ト君を取り押されていて、なんでもうちの様子を伺つていたって言  
うんです。『近所さんまで来ちゃつて今大騒ぎで……え？　こつち  
に来る？　道分かります？』

三十分ほどで、マイコ先生とやらは自家用車でやつてきた。その  
間、俺と姉貴は家の前で立つていた。だつてこの、カイトとかいう  
奴を家にあげるのは俺が嫌だつたし。辻田さんと河合さんにはわけ  
を説明して、それぞれの家に戻つもらつた。何かあつたら呼んで  
ねとは言われている。

「めーちゃん！　『めんなさいね、バカな弟が迷惑かけて』  
車から降りるやいなや、マイコ先生とやらはさう言つて、カイト  
の頭を一発殴つた。

「痛つ！　マイト兄さん、何するんだよ！」

「お黙りっ！　それにあたしはマイト兄さんじやなくてマイコ姉さ  
ん！　何度言えばわかるの、バカイト！」

……なんかすごいな。カイトは恨めしそうな表情で、マイコ先生  
を見上げている。

「このせいでのめーちゃんが辞めたりしたら、どうしてくれんのよ！  
？　あたしのノリにつきあつてくれるパタンナーなんて、なかなか  
見つからないんだからね」

どういう理屈なんだろう。姉貴は苦笑している。

「大体めーちゃんに話があるんなら、あたしのアトリエに来ればい  
いだけの話ぢやないの。めーちゃんの家の前でうろつうするなんて、  
変質者だと言つていいようなものだわ」

それに関してはそのとおりだ。格好の割に　だつてこの人、す

「」い派手な格好してるんだよ。ついでに言つなら、メイクもケバい中身はまともなんだな。

叱られたカイトの方はしゅんとしている。……幾つだ、あんた。どう見ても俺より年上のはずなんだが……。

「ただ僕は、マイコさん」「ひつじでも訊きたい」とがあつて……」「何よ！？」

マイコ先生はカイトに詰め寄つた。カイトがじぢりもじぢりになる。「いや、マイト兄さんの前で話すのはちょっと……」

「姉さんって呼びなさい……」

どうやら、そこは譲れないポイントらしい。俺にはよくわからぬいけど。

「あの……寒いんで、良かつたら家に入りませんか？」

これは姉貴である。寒いのは確かなんだが、マイコ先生はともかく、このカイトとかいう奴まで連れて家にあがる気か？

「いえ、めーちゃん。そういうわけにはいかないわ……でも、ここで立ちっぱなししてのもないわね。……あなたたち、タジはんは？」

「まだです。帰つてから作る予定だったんですけど、レンとカイト君がもめていたんで、それどころじゃなくて……」

「じゃあみんなでどこかのお店にでも食べに行きましょうか。お詫びに今日の払いはこっちが持つから」

「先生、そんな……悪いですよ。私とレンの分は払いますから」俺まで勘定に入つてんのか。なんか妙なことになつてきたな。

「いいつていつて。半分はバカイトに払わせるから」「マイト兄さん！ 僕、貧乏学生だよ！？」

カイトの叫びをマイコ先生は綺麗に無視して、結構高いヒールで弟の足を踏んだ。カイトがぎゅっと悲鳴あげている。……怖つ。「めーちゃん、この辺で美味しいお店とかある？」

「洋食屋さんがありますけど……ちょっと口な感じなお店なんです」

「あらここじゃない。そこにはしまじょう

というわけで、何故か洋食屋まで移動して、全員で食事をすることになってしまった。あ、さすがに一度家に入つて着替えたぞ。制服のままで食事に行きたくない。

「さてと……カイト、とつとと白状しなさい。なんでもめーちゃんの家の前をうろうろしていたの？」

テーブルに座り、ウェイトレスに注文を告げると、マイコ先生は怖い口調でカイトに詰め寄つた。カイトの方は完全に縮み上がりしている。そんなにマイコ先生が怖いのか。

「マイコ先生、そんなに睨んだらカイト君が怯えちゃいますよ」

姉貴の言葉に、マイコ先生は何故かため息をついた。

「女の子に変な真似するような弟に育てた憶えはなかつたのに、なんでこいつなつたのか……」

「マイコ兄さ……いや、姉さん。だから僕は、別に変な真似をしていたわけじゃなくて、めーちゃん……マイコさんに訊きたいことがあつたから、帰つて来るのを待つていただけなんだ」

「じゃ、なんで何度も田撃されてんの」

思わず俺は突っ込んでしまつた。マイコ先生が、ぎろりとカイトを見む。

「あんた、やつぱりめーちゃんに対するストーカー行為を……！」

「そんなんじゃないつ！ なんというか、デリケートな話題だから、訊こいつ訊こいつと思ひながらも、後一歩が踏み出せなかつたつてだけで……」

なんなんだ、こいつは。ヘタレか？ ヘタレでストーカー気味つ

て……最悪だ。

「言い訳はいいからとつとと話しなさいつ！」

「だ、だから……見ちやつたんだよつ……この前の日曜日こつ……」

「日曜……？ 日曜なら、めーちゃんはあたしと一緒に新宿二丁目にいたわよ。それが何か？ めーちゃんとあたしが飲みに行くのな

んで、変なことでもなんでもないでしょうが

あ、だから姉貴は帰宅が遅かったのか。バスのお供で飲み会ね……

大変なんだな。

「新宿二丁目ってことは夜だよね。僕が見たのは昼間の話なんだよ。メイコさんが……その……女の子と一緒にラブホテルから出てくるところを見かけちゃって……」

……女の子と一緒にラブホテルから出てきたあ！？ そういうや確かに月曜の朝、家計簿にラブホテルのレシートが挟んであったが……。

「姉貴まさか……」

俺は思わず姉貴を見た。姉貴は女子高の出だし、高校時代はバレンタインデーにたくさんチョコレートもらひてたけど、まさか本当にそういう趣味とは……。

「メイコさんっ！ もしかしてメイコさんもそっち系の人なの！？」  
「マイト兄さんと仲良くやれるのは同類だから！？」

「ちょっとバカイト、そっち系ってどういう言い草！？ それに、めーちゃんの性的嗜好がどうであれ、それはあんたがどうこう言いつことじやないわっ！」

姉貴はぽかんとしていたが、やがて得心がいった表情になつて笑い出した。

「やだもうー カイト君ってばそんなこと気にしてたのー！？」

「そんなことってなんだよそんなことって！ 僕にとつては大事なことなんだよ！」

どう大事なんだよ、バカイト。あ……移つちまつた。まあいいかバカイトで。

「というか姉貴、女の子とラブホテルに行つたの？」

「行つたけど、色っぽい話じゃないから。単に昔の友達と会つてたら、その子が途中で気分悪くなつて今にも倒れそうになつちゃつたのよ。しばらく横になつてれば治るつていうから、休憩取るためにラブホテルに入つたつてだけ」

うわ、本当に色氣の無い話だ。

「なんでラブホテルに？」

「だつてあそこならベッドがあるからゆったり休めるし、時間単位だからその日のうちにチェックアウトできるでしょ。個室だし防音だし、受付に人もいないから気楽だし」

姉貴は軽い口調で説明した。言われてみれば納得がいくが……。やつぱりそれでラブホテルに入るってのは、なんか間違ってる気がするなあ。

「じゃ、じゃあ……ただの友達なんだね？」

バカイトが妙に必死な表情で、姉貴にそんなことを訊いている。

「やーね、私はストレートよ」

「そ、そなんだ……良かつた……」

おい、なんでお前がほつとしてるんだよ。

「ああ、そうか。あの子ね……あのとんでもない格好の子」  
これはマイコ先生だ。……うん？

「そうですよ」

「そう言えばめーちゃん、例の話はどうなった？」

「それが、なかなか踏ん切りがつかないみたいで……いい話だし、私も言葉を啄くして説得してるんですけど……」

姉貴とマイコ先生は何やら話を始めた。モデルがどうの、サイズがどうの、という言葉が出てくる辺り、仕事に関する話らしい。ちょうどそこへ頼んだ料理が運ばれてきた。話を適当に聞き流しながら、姉貴の仕事に関する話を、俺が真面目に聞いてもしょうがない 食事をする。

大体半分ぐらい食べ終えた時だった。不意に、姉貴が俺にこう訊いてきた。

「あ、そうだ。レン、演劇部の次の公演、結局『マイ・フェア・レイディ』に決まったの？」

なんだよ急に。

「それになつたよ。でも姉貴、正確には、原作の『ピグマリオン』だから。ミュージカルをやるのは無理だし」

「『マイ・フェア・レイティ』… 素敵よねあの映画」

突然、マイコ先生が割つて入つた。そういう姉貴が、マイコ先生はあの時代の映画が好きだって言つてたな。

「オードリーは永遠の銀幕の妖精よ。誰が何と言おうとこれだけは譲れないわ」

うつとりした表情で、マイコ先生はそんなことを言つた。えーと……。どう返事すればいいんだこいつの場合……。

「……マイト兄さん、レン君が返事に困つてるよ」

あ、初めてカイトがまともなことを言つてゐるのを聞いたぞ。

「姉さんと呼びなさい、バカイト」

カイトがマイコ先生をむつとした表情で見ている。マイコ先生の方は涼しい表情だ。

「ところでレン君、衣装はどうするつもりなの？」

衣装ねえ……。そう言えれば考えてなかつた。ま、適当なのでいいんじやないだろつか。

「まだ演目が決まつたばかりで配役も決めて無くつて、だから衣装の話までは出てません。男性はスーツで何とかして、女性は適当にパーティードレスでも借りてくるとか……」

映画のようにはいかないよ。高校生の演劇なんだから。

「そんなもつたいた無いわ！」

「いやでも、予算の都合もありますし、俺たち高校生ですし……」

「何ならドレス、作つてあげるわよ」

……へ？ 僕は言われた言葉が信じられなかつた。作つてあげるつて……。いいのかおい。この人本職のファッションドザイナーだろ？ 高いんじやないのか？

「先生、仕事たくさん入つてましたよね？ そんなことしてゐる暇、あるんですか？」

姉貴が訊いている。

「ああ、めーちゃん……それが最近、あたしスランプ気味なのよ。同じようなばかりデザインしていたから、飽きちゃつたんだと思

うわ。だから何か違うものをやつて、感性を取り戻したいのよね」「どういう理屈なんだろう。姉貴はため息をついている。

「レン……どうする？」

「いや、どうするって言われたって……俺一人で決めるわけには行かないよ」

さすがに演劇部の連中と話しかわないと。着るのは俺じゃないんだから。

「それもそうよねえ……。レン、話はどこまで進行しているの？」

「どこまでも何も、上演日が決まったところだよ。これからみんなに話を見てもうりで、台本に手を入れるかどうかを考え、配役を決めて」

あのままだとちょっと長いよな……カットできそうなどうなカットしよう。ラストもできれば変えたいし。映画があるから、映画の台詞を参考にすればいいか。その前にもう一度巡回さんと相談して……。

「公演は四月だし、衣装はそれまでにできればいいのよね？」

「まあ、そうだけじ」

「じゃあ、必要かどうかを、十一月の終わりまでに決めてちょうだい。OKなら、冬休み中にドレスの採寸をするから」

ちょっととちよつと姉貴！ 姉貴が決めていいのかよつ！

「それって姉貴が決めることじゃないんじゃ……」

「スケジュールの調整はめーちゃんに任せてるのよ」

これはマイコ先生だ。あの……姉貴がそっちへ就職したのって、確か去年のはず……。

「マイト兄さん……仕事のスケジュールは自分で調整するもんだと思つよ?」

「あたしそういうの苦手なのよねえ。それとバカイト、姉さんと呼べと何度も言つたらわかるの?」

カイトは頭を抱えてため息をついている。さすがの俺もちょっとだけ同情したくなつた。

「あの……いいんですか？俺たちただの高校の演劇部ですけど」「そこが面白いのよ。なんか逆に斬新なアイデアとかが湧いてくれそうで」

「……………ですか。」  
「うう人の発想は、俺にはよくわからん。  
だから、場合によつてはデザインを他所に流用するかもしれない  
けど、構わないでしょ？」

「それはもちろん……」

作つてもらえるだけで滅茶苦茶有難いもんなあ。それ以上の贅沢  
なんて言えないよ。演劇部の連中もね。

というわけで、何だかよくわからないうちに、姉貴の雇い主のフ  
ァッションデザイナーが、女性キャラクターのドレスを製作してくれ  
る、という話がまとまつてしまつたのだった。

## 未知との遭遇（後書き）

クリプトン家の中ではカイトだけ出番が無いのもどうかと思つたんで、出すことにしたんですが……。この出番だと出て来ない方が良かったかも（汗）

## 折れた翼での子は歌つ

金曜の夜、なんだかよくわからない食事会の後で帰宅した俺は、自室のPCで柳影公園の場所を調べた。そこそこ距離があるな。巡音さんはよく知ってるみたいだから、彼女の家からすると行きやすいんだろう。

翌日、普通の時間に起きだした俺は、朝食を取つて身支度をすると、ポケットに財布と家の鍵と携帯を突っ込んで、家を出た。姉貴は仕事なので既に家にいない。

電車に乗つて、目的地に向かつ。公園までは道に迷うこともなく、あっさり辿りついた。ボート乗り場つてのは……あ、あれか。時計を見る。九時五十五分。ちょうどいい時間に着いたな。このまま待つてよう。

俺はボート乗り場の前で、巡音さんが来るのを待つた。……ところが、十時になつても、肝心の本人が現れない。あれ、おかしいな？ 巡音さんて、割ときつちりして性格だと思つたんだけど。まあ、五分ぐらいの遅刻は遅刻に入らないよな。俺はそのまま待つた。だけど、十分が経過しても、やっぱり巡音さんは現れない。念のために携帯をチェックしてみたが、着信も来ていない。

うーん……まさかとは思うが、約束を忘れたんだろうか？ それとも、何か不本意な事態でも発生したとか？ 連絡してみようか。でも、巡音さんの親つて異常にうるさいんだつけ。

俺は携帯をしばらく眺めた後、仕舞いこんでもうしばらくだけ待つてみることにした。かけてみるのは最後の手段にしよう。

俺は水鳥が泳いでいる公園の池を眺めながら、そのまま待ち続けた。このまま現れなかつたら、俺がマヌケだよな……と思いつがら。そうして、どれくら経過しただろうか。

「い……ごめんなさいっ！ 遅刻、しちやつて……」

聞こえてきた声に振り向く。顔を真っ赤にした巡音さんが、そこ

にいた。それだけ言つと、後はぜいぜこと荒い息を吐いてくる。  
どうやら、ここまで走ってきたらしい。

「あ……巡音さん」

寝坊でもしたんだろうか……。うわ、髪がぐしゃぐしゃだよ。いつもきちんととしているのに……でも、なんだか可愛いな。

「髪がすごいことになつてるけど……」

俺は何気なく手を伸ばして、巡音さんの顔にかかるつている髪をかきあげた。弾みで、俺の指が巡音さんの頬に触れる。瞬間、巡音さんが今まで以上に赤くなつて硬直した。

「え……」

巡音さんの瞳が、じつといつも見えてくる。その瞳から視線を逸らすことができない。俺たまにまじめにいつまつめあつていた。

「ああああの……本当に、『めんなさい』……」

巡音さんは赤くなつたまま、ようやく口を開いた。そのまま視線を伏せてしまつ。

「……寝坊でもしたの？」

俺の問いに、巡音さんが頷く。……なんだか巡音さんのイメージとあわない気がするんだが。

「タベ夜更かしでもした？」

「え……ええ。そんな感じ……」

「口」もりながらそう答える巡音さん。様子がおかしこよつた気がする。

「なんかあつたの？」

俺はなるべく軽い口調で訊いてみた。

「あつたつていうか、その……」

巡音さんは下を向いてしまつた。……話したくないようだ。でも、なんだか気になるな……。俺は辺りを見回した。少し離れたところに、ベンチがある。

「巡音さん、あつたベンチがあるから座つて話そつか」

頷いてくれたので、俺たちは連れ立つて、池の向かいにあるベンチまで移動した。

ベンチに腰を下ろすと、巡音さんは無言で目の前の池に視線を向けた。少しほんやりとしている。……大丈夫だらうか。

「巡音さんって、この公園にはよく来るの？」

俺は、なるべく無難そうな話題から振つてみることにした。

「……小さい頃にはね。最近はあんまり……わたしも忙しくて」

淡々とそう答えて、巡音さんはまた池をみつめていた。その瞳から、涙が一筋零れ落ちたのに気づいて、俺は愕然とした。

「巡音さん……」

「……平気だから」

全然平氣そうには見えない表情で、巡音さんはやつ笑つた。……参つたな。

「あ、あのせ……なんか悩みがあるんだつたら、俺でよければ話を聞くよ?」

「のままにはしておけないよ。俺にそつ言われた巡音さんは瞳を伏せ、考え込んだ。

「あの……」

やがて、巡音さんはおずおずと口を開いた。

「うん?」

「あのね、これから話すこと、誰にも話さないでもらえる? ミクちゃんにも話してないことなのだから、鏡音君のお姉さんにも、ミクオ君にも、話さないでいてほしいの」

意を決した口調で、巡音さんはそう言つた。初音さんにも話してないつて……。

……つまり、それだけ信頼されているということだ。

「わかった。誰にも言わないよ」

「わたしね……前にも話したと思うけど、姉が一人いるの。上の姉ガルカ姉さん。わたくしより七つ上で、何でもできる完璧な人なんだけど……何ていうか……完璧すぎるのよ」

七つ上つことは、俺の姉貴より一つ上か。完璧すぎる？

「どういふこと？」

「えーとね……わたしたちが今通っている高校に、ルカ姉さんはやっぱり中学の頃から通っていて、中高六年の間、ずっと学年トップの成績を取り続けていたの」

ちょっと待て。俺たちの通っている学校で、中高六年間トップの成績つて……桁外れだな。ランクの高い進学校だから、トップを維持するのはかなり大変だ。俺だってこれでちゃんと勉強はしてるんだよ。

「それはただ単に勉強が得意なだけなんじゃ……」

「ルカ姉さんはね、絶対に間違ったことはしない人なの。お作法も立ち居振る舞いも完璧で、どこに出しても褒められる人なのよ。言いつけはいつもきちんと守って、寄り道なんてしないし、門限もしつかり守るし、服装だつて一筋の乱れも無いし……」

俺は自分の姉貴が、そんな人間だつたらどうだつたかと想像してみた。成績がものすごく優秀で、いつも真面目に机に向かっていて、家事をパーフェクトにこなしていて、なんでもちゃんとやれる姉貴だ。……まず間違いなく息が詰まるな、姉貴がそんな人間だつたら。「寝転がつてテレビ見ながらおせんべい齧つてたりとかは……

「そんなお行儀の悪いこと、絶対にしないわ」

俺は生まれて初めて、自分の姉貴が適度にいい加減な人間であることを感謝したくなつた。あ、言っておくけど、仕事とかはちゃんとやつてるよ。ただまあ、寝転がつてテレビ見ながらおせんべい齧るのはよくやつてる。仕事が忙しい時期だと家事も手抜きになるし。……ま、俺もだけどね。うるさいな、いいんだよ。綿埃程度で人間死んだりしないって。

「わたしの記憶の中のルカ姉さんつて、いつも机に向かってるの。お勉強をしているか、本を読んでいるかのどっちかで。その本も、小説とかじやなくて、何かの専門書みたいな難しい本ばっかりだし

……」

「そのお姉さん、趣味は？」

「……多分、無いわ。趣味、だけじゃない。わたし、ルカ姉さんが友達と一緒に出かけるところも、友達が遊びに来たところも、見たことがないの。出された食事はなんでも残さず食べるけど、『『飯の好き嫌いを言つたこともないわ。着る物はファッショングッズの『一ネートそのまま』って感じだし』』

「い、異常だ……そのお姉さん、本当に人間か？ 姉貴はちゃんと友達がいるし、今はともかく、学生の頃は結構友達が遊びに来ていた。さすがに食事を残すような真似はしないが、好物はちゃんとある。着る物にはこだわりがあつて、結構ひるさい。

「人間」というよりロボットなんじや……」

俺は思わずそう口にしてしまい、それからはつとなつた。以前、巡音さんは「好きや嫌いという感情のない人間つて想像できる？」と訊いてきた。あれは、そのお姉さんのことだつたんだ。

確かにロボットだよなあ。情熱も無ければ魂も無く、だ。……でも、作られたロボットじゃなくて、巡音さんの血の繋がつたお姉さんなわけで。そりや、巡音さんじゃなくとも頭が痛いよ。

「確かにちょっとそんな感じがするの。……完全にロボットつてわけでもないみたいだけど」

巡音さんは沈んだ口調でそう言つた。う、うーん……俺にはかかる言葉がみつからない。そんなハードなお姉さんがいるとは思わなかつた。

でもポイントは、お姉さんのことじゃなくて、巡音さんのことだけよ。

「それで、お姉さんが異常なのはわかつたけど……巡音さんは何を悩んでるの？」

「……わたし、ルカ姉さんが何を考えているのかが知りたいの。だから、それを訊いてみようとしたんだけど……何だか全然ちゃんとした話にならなくなつて」

「どうも状況がわかりにくいなあ。

「どういう感じ?」

「わたし、ルカ姉さんになつたつもりで返事するから、鏡音君、何か話しかけてみて」

巡音さんはそんな提案をしてきた。何か話しかけてって……何でもいいのかな。俺は辺りを見回した。景色についてでも話してみよう。

「うーん……じゃあ、木の葉が赤くなってるね」

「……そうね」

淡々と返事する巡音さん。……うわ。

「紅葉は好き?」

「……嫌いじゃないわ」

「や」に鳥がいるよ

「……そうね」

「多分キジバトだと思ひけど……」

「……キジバトなんだ」

「キジバトって首のところに縞模様があるんだよ。あれで見分けがつくんだ」

「……や」

「あの……俺と話すのそんなに嫌?」

「……いいえ」

「じゃ、なんぞさつきから返事全部一言なの」

「……まあ」

「じゃ、俺と話していて楽しい?」

「……」

「……全然話が繋がらないぞ。ああ、なるほどね。こりゃ本当に

ロボットだ。

あれ? でも考えてみたら、巡音さんもこんな感じになる時があつたよな。ここまでではないけど、近いっしゃ近い。いつの間にかそういう応対はしなくなっていたから、以前のことは忘れかけてたけど。だって、嫌なことよりいいことの方が、思い返してて楽しい

しゃ。

「ストップ。シリコーンはもうこいよ。なんとなくわかつた

から」

「これ以上、ロボットの真似をしてくる巡音さんは話すと疲れそうだ。」

「本人を見ないで」「うつ」と言つたのは、本当に良くなかっただけ  
ど……そのお姉さん、多分、何も考えてないと想つ」

学年トップを維持していたつてことは、頭自体は良いんだろうな  
あ。おそらく、機械的に何も考えずに勉強していたんだろう。

「やっぱり……そうなのかな……」

巡音さんは淋しそうにそう言った。……多分、巡音さんに答える  
はわかつていたんだろう。でも、自分の姉がそんな状態だつてのを、  
認識するのが嫌だったんだろうな。それは仕方がないかもしれない。  
あ、でも……。

「あの……巡音さん、ちょっとといい？」

俺は気になつていることを訊いてみる」とした。

「あ、うん。何？」

「多分これ、ひどく失礼な質問だと思つんだけど……巡音さんも、  
時々、さつきみたいな状態になつてたことがあつたんだよ。自覚が  
あるのかどうかはわからないし、最近はそんな対応しないから、言  
わない方がいいような気はするんだけど……やっぱ気になつて……」

……

つまり巡音さんは何も考えずに喋つていたんだよ、あの頃は。

「……わかつてる。わたし、考えるつてことから逃げてた」

「あ……気づいてたんだ。

「自分の考え方を持つて、それを否定されるのが怖かったの。私自身  
が否定されているみたいだし……」

「おいおい、それは幾らなんでもネガティヴすぎるぞ……。あ、で  
も、それにはもう気づいてるし、自分の考え方を持つて話もあるよ  
うになつたんだよな。」

「でも、結局、自分の考え方とか意見を持つようになつたんだよね？」

きつかけは？」

それがわかれば、お姉さんもどうにかできるかも。

「多分、鏡音君がわたしの問題点を指摘したからだと想つ  
「え？」

意外な答えが返ってきた。俺がきつかけなの？

「鏡音君、わたしに言つたわよね。『自分の意見つてものがないの  
？』つて。あれ、そのとおりで、わたし何も言えなくて、ショック  
でわたし、頭の中が真っ白になつて……でもその後で気がついたの。  
わたし、考えることから逃げていったんだって」

あ……確かに言つた。あの時の巡音さんは、まさにロボット状態  
がひどくて、俺は結局頭に来て、きつい口調でそう言つちやつたん  
だっけ……。その後に巡音さんが倒れてしまつたから、俺として  
は言つたことを悔やむはめになつたが……どうやら、一種のショッ  
ク療法になつていたらしい。

「同じことをお姉さんにやつてみたら？」

「もうやつてみたわ。でも……駄目だったの  
氣落ちした表情で、巡音さんは肩を落とした。沈んだ様子を見て  
いると、俺としても胸が苦しくなつてくる。かといって、気軽に「  
元気出せ」とも言えないしな……。

「……巡音さん、もう一人のお姉さんのこと、訊いてもいい？」  
確かもう一人お姉さんいたよな。姉貴の後輩だつたつて人。こつ  
ちのお姉さんのことも、巡音さんはあんまり話したくないみたいだ  
けど……。とはいへ、姉貴が懐かしんでるぐらいだから、ロボット  
つてことはないだろ？」

巡音さんは頷いた。訊いてもいいのか。

「もう一人のお姉さん……ハクさんだけ。その人はロボットじゃ  
ないんだよね？ ロボットだつたら、俺の姉貴と話なんかできない  
だろうし……」

ロボット状態の人間を前にして、姉貴が黙つていられるとは思え

ない。絶対修羅場になる。

「ハク姉さんはロボットじゃないけど……三年前から部屋に引きこもって出て来ないの。わたしが部屋に行けば入れてくれるけど、他の家族は無理。絶対に入れようとしないし、話もしていわないわ。部屋に引きこもつてるつて……。巡音さんが話したがらなかつた理由はそれか。しかし、上の姉はロボット、下の姉は引きこもりつて……。何をどうしたらそんな状態になるんだ？」

「何だつてまたそのお姉さんは引きこもりを？」

「……それがわからないの。ハク姉さん、何も話してくれないし」

巡音さんは暗い表情で首を横に振った。

「でも……もしかしたら、わたしのせいかも。」

「おいおい……幾らなんでもそれはないよ。考えすぎだつて。

「巡音さんのせいってどういうこと?」

「うちの学校、お父さんの母校もあるの。お父さんはわたしたちを全員、あそこに行かせたかったんだけど……ハク姉さんだけ、受験に失敗してしまつたの」

あ……だから巡音さんは、ユイが落ちたつて聞いた時に暗い表情してたのか。お姉さんが落ちた時のこと思い出しちやつたんだな。「わたしとハク姉さんは四つ離れているから、ハク姉さんが高校受験に失敗した次の年、わたしは中学受験することになつて……わたしの方は受かつたのよ。ハク姉さん……もしかしたら、それがストレスになつたのかも……」

えーと……それは要するに「自分より優秀な妹は欲しくない」ってことか？ あつたよな、『エンダーのゲーム』にそういう台詞があれは両方男だから正確には妹じゃなくて弟だし、ピーターは一番上だけど。参つたな……どうなつてんだ。というか、優秀に生まれつくのなんて、その人のせいでもなんでもないじゃないか。それにあの本読んだら、大抵はピーターの方に腹を立てるぞ。ま、それ以前にピーターは性格破綻者だけど。

あれ？ でも待てよ。何か変だ……。

「巡音さん、お姉さんが引きこもったのは三年前からって言つたよね？」

「ええ。三年前の冬だったわ」

「じゃ、巡音さんは中学一年だよね？」

「ええ」

「じゃあ、原因は巡音さんじゃなによ。時間が開きすぎてる。巡音さんが合格したことが原因なら、もっと早く引きこもつてるとと思う。一年以上も経つてから、それが原因で引きこもるなんておかしいよ。

「姉貴の話だと、高校生活自体は結構楽しんでいたみたいだし、受験の失敗が引きこもりの原因とは考えにくいよ」

「楽しんでなかつたらバドミントン部なんか、じっくりやめてしまう。姉貴の話だと結構ハードだそうだし。

「え…… そうなの？」

「姉貴はこの手の話で嘘つかないよ。巡音さんのお姉さんより一学年以上だから、引きこもつた原因までは知らないだろ？ けど」

「巡音さんは、多少ほつとした表情になつた。とりあえず、気がかりの一つは消えたか。…… 大本の問題がまだ残つてるけどね。

「でもこれ、巡音さんが一人で悩んでも仕方がないんじゃないかなあ。俺だったら、姉貴がこんな状態になつて、話しても話しても埒が明かないつてことになつたら、多分諦めて放つておくだろ？ …まあ、そんな状態になる姉貴つてのは、想像がつかなかつたりするが。」

俺は巡音さんを見た。やつぱり思いつめているみたいだな。言葉を選ばないと。向こうは俺と違つて纖細にできている。

「あのや…… 巡音さん、お姉さんのことは、あんまり悩んでもしょうがないと思うよ。兄や姉つて立場の人は、弟や妹に弱みを見せたくないって思うみたいなんだよね。俺の姉貴だって、あんまりそういうこと言わないしわ」

「それ以前に姉貴に悩みはあるのだろうか。……まあいいや、嘘も

方便だ。

「でも、鏡音君のお姉さんはわたしの姉とは全然違うわ。仕事もしてるし、鏡音君と毎日話もしてるんでしょう？わたし一週間前にハク姉さんと揉めちゃったんだけど、それからずっとハク姉さんとは話していないの。ルカ姉さんは、昨日話したんだけど全然埒が明かないし」

それが、巡音さんの答えた。これじゃ堂々巡りだ。どうするか……もういつそのこと姉貴に頼み込んで、ハクさんつて人と話をしてもらおうか。片方だけでもカタがつけば、巡音さんだってもう少し落ちつけるかもしれない。

「あの……巡音さん、さつき『誰にも言わない』って約束しちゃっけど、ハクさんつて人のことを、姉貴に話したら駄目かな？ 実は姉貴、ずっと心配してるんだよ。何かあつたんじやないかって……嘘だけどさ。ま、後輩が引きこもつてるって話聞いて、黙つてる人じやないよ。俺の姉貴はね。だからいいんだよ。

「！」の前に巡音さんが家に来た時の受け答えで、『なんかおかしいな』って勘づいたみたいで……あれで結構勘がいいんだよ。姉貴はハクさんの先輩なわけだから、無関係じやないしさ』

巡音さんはしばらく考え込んでいたが、やがて頷いた。……よしじやあ、後で姉貴に話しておこう。巡音さんと会つてたことをあれこれ言わいたら……いや、会つてたなんて言う必要はないか。昨日聞いたことにしておけばいいんだ。昨日はあのカイトとやらのせいで、そんな話する暇無かつたって言えば、姉貴も疑わないと。俺があれこれ考えていると、いきなり右の肩にずしつと重みがかかつた。……何だ？ 見ると、巡音さんが俺の肩にもたれかかって、瞳を閉じている。

「……巡音さん？」  
返事はなかつた。

「巡音さん？ 巡音さんつてば」  
やつぱり返事が無い。……眠ってしまったようだ。！」は公園な

んだが……こんなところで無防備に寝ちゃつていいんだろうか。十一月の割に今日は暖かいけど、天気が崩れるかもしれないしここした方がいいような。

そう思つたのだが、俺は巡音さんを起しす氣になれなかつた。今田寝坊したつていうのも、ひょっとしたらお姉さんのことで悩みすぎて眠れなかつたのが原因かもしないし。少し寝かせてあげた方がいいのかも知れない。

……なんていうか、本当に無防備だな。ちょっと手を伸ばして、頬に触れてみる。……柔らかい。そつと指を滑らせてみたい気もするけれど、そんなことをしたら起きちゃうだろ? な。……もう少しあう。

よそいとと思つたのに、なんで俺はやつているんだ!? いい加減にしりよ。相手は眠つてるんだぞ。眠つてる女の子にちょっかい出すなんて……。

俺の頭に、いつぞやの夢が甦つた。巡音さんが眠り姫になつていて、キスしたら田を覚ました夢だ。だから、なんでそんなこと思い出すんだよ? これは夢じやなくて現実なんだから、巡音さんにキスしたら……まあ、起きはするだろ? な。……そして俺は築き上げた信頼を失うだろ? 巡音さんは以前、ガラスに閉じ込められるどうのと言つていたが、むしろ巡音さん自身がガラス細工だ。

……このまま巡音さんの寝顔を見ていたら、また妙なことを考えてしまいそうだ。俺はため息をついて、目の前に広がる公園の池に視線を向けた。水鳥が水面を漂つてゐる。……あーあ、のんきそうだな、あいつら。

## 折れた翼での子は歌つ（後書き）

肩にもたれての居眠りの構図を想像すると、東京メトロのマナー  
ポスターが真っ先に頭に浮かぶんです……。あのポスター色々な  
意味でインパクトありすぎました。

どんなポスターか知りたい方はこちら。九月のポスターです。

<http://www.tokyometro.jp/corporate/css/society/manner/index.html>

## 全て同じところではないけれど

俺の肩にもたれて眠っていた巡音さんが、不意に身動きした。  
「あ、田が覚めたのかな？ 見守っていると、巡音さんが田を開けて身体を起こした。二、三度まばたきをして、ぼんやりと辺りを見ている。寝起きで頭がはつきりしていないうらしい。」

「あ……巡音さん、起きた？」

声をかけると、向こうは弾かれたみたいにうつを見た。あ……  
真っ赤になっちゃってる。

「ああああの、わたし……」

「俺の肩を枕にして気持ち良さそうに寝てたから、起しそのもなんかかわいそうで……」

そう言つと、巡音さんは今まで以上に真っ赤になってうろたえた。  
無防備に寝てたよ、なんて言つたら、パニックになりかねないな。  
やめておこう。とこつか……既にパニックを起こしかけている。  
……話を変えるか。

「ところで巡音さん、昼食はどうする？ 今日はお弁当用意してないみたいだけど」

バッグの類を持っていないことこれからすると、弁当を持ってきてはいよいよだ。まあ俺も手ぶらだけどね。この手の公園なら、公園内に売店ぐらいあるだろう。

「あ、あの……今何時？」

訊かれて、俺は自分の時計を見た。そろそろ一時だ。

「一時になると」と、俺、ここは初めて来たんだけど、売店とかある？

「ええ、ボート乗り場の近くで」

「じゃ、そこで何か買おうか」

俺の田の前で、巡音さんがしまったと言いたげな表情になつた。

「どうしたの？」

「お財布……忘れて来ちゃった……」

財布忘れたつて……どれだけ慌てたんだ。思わず笑い出しそうになり、俺は必死でそれを押さえ込んだ。ここで笑うのはまずい。

巡音さんはまた恥ずかしそうな表情で下を向いている。自分でもドジ踏んだと思っているんだろう。……結構可愛かつたりするんだが。

「じゃ、俺がおじるよ」

だからって昼を抜くのは健康によろしくない。

「え……そんな……」

予想どおりの返事が返つて来た。……やれやれ。

「あのね巡音さん、俺、空腹の人間前にして、自分だけ食事できるほど神経太くないんだけど」

巡音さんがきょとんとした表情になる。言われた意味がよくわからなかつたようだ。

「だからね、俺が代金払つから一緒に何か食べるか、それとも一人して昼飯抜くか、どっちかつてこと。で、俺としては腹減つてるからちゃんと食べたいの」

言いたいことは伝わつたようだが、今度は俺の皿の前で悩み始めた。ああもう。結論が出るまで待つてられない。

「そういうわけだから、食べるもの買に行こうね」

俺はそういうと、巡音さんの手をつかんで立ち上がつた。当然、引っ張られる格好になつた向こうも立ち上がる。俺はそのまま、手を引いて歩き出した。

売店まで移動すると、俺は適当にサンディッシュやら飲み物やらをまとめて購入した。巡音さんは終始申し訳無さそうにしている。

売店の近くには、椅子とテーブルが幾つか置いてあった。暖かい日の昼食時ということでほとんど埋まっていたが、幸運なことに、目の前で一つテーブルが空いたので、そこに向かう。椅子に座ると、

俺はジニール袋の中からサンドイッチと紅茶を取り出して、巡音さんの前に置いた。

「あの……本当にめんなさい」

「それもういいから、食べなよ」

巡音さんはしばらく迷っていたが、俺が食べずに見守っていると、おずおずとサンドイッチを手に取った。包みを開けるのにしばらく手間取っていたが、食べたことないのか、もしかして……やがてなんとか包みを開けて、サンドイッチを食べ始めた。……じゃあ俺も食うか。

「……そう言えば巡音さん、『ピグマリオン』のことだけど無言で食事をするのも淋しいので、俺は話を始めた。といつもともと『ピグマリオン』の話をする為に会つたんだよな。

俺の言葉を聞いた巡音さんの表情が、例によつてすまなそうなものになる。俺は氣づかなかつたふりをして、話を続けることにした。こいつの時は、なんでもない態度の方が良さそうだ。

「あの中で、イライザが着物を着るシーンがあつたじゃない？ あれ、どう思つた？」

巡音さんは思案する表情になつた。

「作者は時代性とか、異国情緒とか、そういう雰囲気を出したかつたんだろうとは思つた。もしかしたらあの時代のイギリスでは、日本のことが流行の話題だつたのかもしれないし。でも、わたしからすると、ちょっとついていけなかつたわ」

「あ、やっぱり、そう思つわけね。

「着物つて、着るのすげく大変だもの。わたしもお母さんに手伝つてもらわないと着ることなんてできないし……外国人がいきなり見ても、そもそも着方がわからないと思うわ。それなのに『見事に着付けした』なんて、どう考へても無理だと思つた。羽織つてくるのならわかるけれど」

「へえ、そなんだ。そいや姉貴も着物着たのなんて成人式の時ぐらいたよな。帰つて来るやいなや、『あ、苦しい！ 私結婚する時

は絶対洋装にする！ こんなにギューギューに締め付けられるなんて、耐えられないわ！」って絶叫してたつて。

「巡音さんって、着物着たりするの？」

「ええ、お正月にね」

……ちょっと見てみたいかもなあ。どんな感じなんだろう。

「着物つて、そんなに苦しいの？ 成人式の時に姉貴が悲鳴あげてたんだけど」

「基本紐で締めて着る衣服だから……しつかり着付けないと緩んできてしまうの。慣れもあると思うけど、お正月ぐらいしか着ないから、どうしても慣れなくって……」

だから和服つて廃れたんだろうか。いや、廃れたつて言うと悪いけど。でも、誰だって楽に着られる方がいいだろ。

「上演する時、こここのシーンを変えようかなと思うんだよね。うちの部員に着物を着ろつて言うのは無理があるし

「変えちゃつたりしていいの？」

「いいんだよ。高校の演劇部で全部を完璧にやるなんて無理があり、柔軟に対応しないと。『ロボット』の時も、回りくどい台詞とかは結構削ったんだ」

使つたのはネットで見つけた抄訳版なんだが、それでも長すぎる台詞とかがあつたので縮めたりした。もちろん削つた奴をみんなに見せてチェックはしてもらつたぞ。

「でも、着物を着ないとしたら、どうするの？」

「何か適当に服を着せることにしようと思つてゐるけど……何なら自然だと思う？ 独身男の家に若い女性用の衣類があるつての、変だと思うんだよね」

だから作者は「日本土産の着物」つてこととしたんだろうが……。日本人の感覚からすると、着るのは無理だよ。今、巡音さんもこう言つたし。

「家政婦のピアス夫人の若い時の服とかは？ あの人つて住み込みよね？」

巡音さんはそんな提案をしてきた。なるほどね……使えそうだ。

「それなら良さそうだ。巡音さんってやっぱり頭いいね」

俺の田の前で、巡音さんは頬を赤らめて俯いてしまった。……照

れている感じ。

「台詞の変更とかに關しても、一緒に考えてほしいんだけど、いいかな？」

俺が一人で考えるより、巡音さんと一緒に考えた方がいいものになるだろう。

「あ……ええ」

赤くなつたままで、巡音さんは頷いた。あ……良かつた。

金で回していくのが何でもないかねえ（後書き）

田の前に立てる粗手に氣があるから「ねーる」とこの行動になるんだよなあ……。

これがクオだつたら、レンはお金を貸して「月曜に返せよ」と言つていたでしょ？。

## 疑問は多くあれど答えは少ない

それからしばらく、俺たちは戯曲の話をしたり、公園を散歩したりして過ごした。巡音さんも午後になると多少は気分が上向いてきたらしく、笑ってくれるようになつた。

三時になると、巡音さんは淋しげに「もう帰らなくちゃ。今日はありがとう」と言って、帰つて行つた。……本当のことをいつと家まで送つて行つてあげたかったけれど、向ひの家の事情を考えると無理だな。

俺も帰ることにする。何気なく携帯を取り出して確認すると、メールが一件入つていた。姉貴からか。チエックすると「昨日買つてきた食材を無駄にしたくないから、今日と明日の夕飯当番変わってくれない?」と書かれていた。そういうや明日は姉貴が当番だつたつ。俺としても別に異存は無いので「いいよ」と書いて、メールを送信する。

家に帰ると、姉貴はまだ帰つていなかつた。ま、そんなにしないうちに帰つて来るだろ? 日が暮れるのが早いので、カーテンを閉めて明かりを点け、洗濯物も外しておいてやる。風呂も洗つところ。やつといった方がいいことを全部終わらせると、俺は自分の部屋で、姉貴にどう話せばいいかを考えた。

「あのね、姉貴」

そして夕食の時間、俺は姉貴に巡音さんとのことを話すことにしてた。

「大事な話だから、真面目に聞いてほしいんだ。その……昨日、巡音さんから聞いたんだけど

「リンちゃんから? 何を聞いたの?」

「……姉貴の後輩だつていう、巡音さんのお姉さん。その……なん

でも、部屋にずっと引きこもつていて、もう三年になるんだって

俺がそつと語りと、姉貴は箸を置いて考え込んでしまった。

「レン、それ、リンちゃんの方から教えてくれたの？」

しばらくしてから、姉貴が口にしたのはそんなことだった。……

俺が問い合わせたんじやないのかを知りたいらしい。

「……ああ。まあ、その前に俺の方でも『悩みがあるんなら話してくれ』とは言つたけど」

それを聞いた姉貴は、難しい表情でため息をついた。……変なことを言い出さなきやいいんだが。いやでも、姉貴だって後輩のことぐらこ心配だよな。

「コソンちゃんは、その他には？」

「お姉さんと全く話ができるない」とを悩んでた。なんでも喧嘩して一週間近く喋つてないとかで。どうして自分は話ができないのかって

姉貴は更に難しい表情になつて、額を押された。ちゃんと考えてくれるのは嬉しいんだが……同時にちょっと怖い。

「あんたとしてはどう思つの？」

「俺としては正直、巡音さんが一人で悩んでも仕方のないことだと思つ。いくら巡音さんがお姉さんと話をしたいと思つても、お姉さんの方にも話をしたいつて気持ちが無いと、どうにもならないんじやないかつて。でも、あんなに深刻な表情をされると、そんなこと言えないし」

俺だつたら確実に放置するんだが。巡音さんにそれを薦めるわけにもいかない。

「つまり、私にハクちゃんを説得しようと？」

「……ご明察。姉貴、どうにかできない？」

上のお姉さんはどうしようもないだろうが、下のお姉さんの方なら、まだ何とかなるんじゃないだろうか。なんか姉貴慕われてたっぽいし。使えるものはなんでも使え、だ。

「姉貴だつて気になるだろ。後輩が引きこもりだなんてさ」

「あ～、そのことだけ……実は私、知つてたのよね」

姉貴の爆弾発言に、俺は文字通りその場に固まつた。どうこういとだ？

「知つてたつて……」

「ハクちゃんが引きこもつてること」

しつとそう答える姉貴。ちょっと待て。姉貴そのことを知つてたわけ？

「……知つてたんなら、なんで俺に教えてくれないんだよつ！？」

「ハクちゃんから、このことは黙つていってくださいって言われていたから。でもまあ、リンちゃんから教えて貰つたんなら、もういいわね」

普段どおりの口調で姉貴は言つた。……何だか面白くない。そりや、その、ハクさんつて人が話すなつて言つたんだから、姉貴が黙つていたのは当然のことではあるんだが……。

「いつから知つてたの？」

「リンちゃんがこの家に来た時、態度が変だつたからハクちゃんに連絡取つてみたの。それからまあ、色々あつてね……引きこもつてるつて教えてくれたのは先週よ」

確かに……姉貴は「黙つていられる」タイプじゃない。しかし、俺に何も言わぬ、さつさと連絡を取つていたとは……盲点だつた。

あれ……てことは、ハクさんつて人と話したんだよな？

「姉貴……もしかして、引きこもつてる理由も聞いた？」

「聞いたけど、あんたには教えてあげられないわよ。ハクちゃんのプライベートに関わるしね」

予想どおりの返事が返つて來た。しかし……妹にも話してない事実を話してもらえる辺り、姉貴はよほど信頼されているらしい。

「理由自体は言わなくていいから、一つだけ教えてくれ。ハクさんの引きこもりの理由は、巡音さんじゃないよね？」

多分違うだろうとは考えているけど、ここで確認を取つておこう。

「リンちゃん？ 全然違うわよ。何、まさかリンちゃん、自分のせ

「いつて思つてるわけ？」

俺は頷いた。

「ヤ」だけは全力で否定しておいてあげて。リンちゃんは無関係だから

「どうや」、巡音さんの懸念は完全に杞憂のようだつた。姉貴がここまで断言する以上、間違いはないだろう。

でも……だとすると、お姉さんはなんで引きこもりやつてるんだろ？ 僕は田の前の姉貴を見た。……絶対に教えてくれないよな。姉貴はそういう人間だ。仕方ない。

「話戻すけど、姉貴、ハクさんつて人のこと、説得できない？」

「リンちゃんと話をしろって？」

「ああ。正直、あの状態の巡音さんを見てられないよ。お姉さんのことで滅茶苦茶悩んでるんだぜ。あのままじゃ心労で倒れると思う」ちよつと大げさすぎるかなあ……いや、いいや。これくらい言つてしまえ。

姉貴はといふと、また思案する表情になつた。

「……やつてはみるけど、保証はできないわよ。ハクちゃんは家族に対して、強い不信感を抱いているし。正直、私に色々と話していくれる気になつただけでも驚きなのよね」

そんなにひどい状態なのか。まあ、ひどいかり引きこもりなんてやつてるんだろうが……。

「リンちゃんには、年単位で蓄積された負のエネルギーをどうにかするのは大変だから、しばらく時間くれつて言つとこでちよつうだい」「……わかつたよ」

「……やっぱらく様子見か……。巡音さんをお姉さんのことで安心させること」は、当分無理なようだ。

……じゃあ俺は戯曲の方に集中するか。他に考えることがあれば、巡音さんだって気が紛れるだろう。

疑問はあくあれど答えは少ない（後書き）

ハクが引きこもつてゐる理由は外伝【シンクトレーラー】 参照。  
次回は荒れる予定。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5419v/>

アナザー：ロミオとシンデレラ

2011年11月30日19時48分発行